

生まれ変わったらめん
どくさい種族になって
いた

ラーカー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世の記憶はないが転生した男が可愛い妹を溺愛しつつ好き勝手しながら成長していくそんな物語

目次

生まれたての兎編

生まれ変わったらウサギかよ	1
男の頭に兎耳とか誰得？	5
出会いは新しいことに気づくこと	8
空が青い、いや蒼い	12
悪ガキ兎の人間？関係編	
名付けの儀式	15
とある兎と亜龍との関係	19
とある兎と悪魔の端末	25
とある兎と	30
とある兎と月の兎	38

人物設定※ネタバレ注意

終わりと始まり	57
悪意無き悪意	62
袋小路の選択肢	67
終結	71
後日談という名の考察	77
人として生きる編	
変わった日常	83
彼の日常	89
不機嫌な日常	94
YES！ウサギが呼びました！	
YES！始まり始まりですよ♪	99

心配なんかしてないぞ?してないから な!?	107
再開は突然に	113
お仕事(謀略)	122
星の堕ちた日	128
あら、魔王襲来のお知らせ?	
兄からの伝言	139
商談と悪巧み	147
下見というなの暇つぶし	154
兄同士は仲が悪い	160
二人は司会者	166
魔王幼女降臨	173
お調子者は悪ふざけする	179

元ウサギと吸血鬼	189
ゲーム中断中	200
祝勝会	210
そう……巨龍召喚	
帰還	225
腐れ縁	234
仕事	244

生まれたての兎編

生まれ変わったらウサギかよ

side XXX

さて、俺は元々日本に住んでいた大学に所属して大学生と呼ばれることになれるくらいには過ぎたくらいの時の事だ。俺は死んだ、つと言つてもいいのかは不明だが気がついたら俺は生まれ変わっていた。

☆ ★ ☆

気がついたら俺は狭く暗い部屋の中に漂っていた。部屋の外から誰かが語り掛けているような気もするがそれは俺にはなんだか大切な事ではなく、なんだが思いつけずに狭い部屋で漂うという矛盾を体現してる自分はなんなのかを考えつつそのまま眠りについた。

☆ ★ ☆

あれからどれくらい過ぎたのか知らないが段々この部屋の中が狭くなってる。今では身体を丸めても身動きがあんまり取れないくらいには狭い。最近気がついたのだが頭の方にびったりと閉じられた何かがある。試しに狭い部屋で踏ん張って頭突きしようと思つたがまだ早いと本能が囁くのでまだなにもしていない。

この狭い部屋の向こうからよく誰かが話しかけてくるがそれがここでの数少ない変化である。だがそれも長くないような気もするし、まだ続くような気もする。そういえば俺はいつたいたいどうなってるんだ？

☆ ★ ☆

目が覚めたら無性に動きたくなり取りあえず手足を伸ばしてみたたら、壁の向こう側が慌ただしくなってきたてきているが俺には関係ないと割り切つて続けていたら、足を思いつ切り伸ばしてみたたら、頭の方にあつた何かを押し広げていた。そしてそのまま行けるのではないかと思ひ、というより暗く狭いどこかからでたいと無理矢理でたら、光が、音が、莫大な情報を感じ取り、俺はその痛みにより泣き続けた。頭の片隅で自分がもしかして赤ん坊なのではないかという予想が現実になったことに気づき、抱き上げられた腕の中

で揺れるウサギの耳を眺めながら俺の意識はあらがえない心地よさに睡魔という大敵に飲まれて消えた。

side ?

「よかつたなお前！」

心の底からの喜びにより、妻と息子を力いっぱい抱きしめようとしたが「子供を殺す気か！」と婆さんに殴り飛ばされた。流石に思慮が浅かつたなと反省。

ベッドの隣で妻の腕の中で眠る息子は私の息子だから厳しくも優しい男に育て上げて、一族の長にふさわしい男にしなくてはいけない！いや、私と妻の子だ。身についたギフトで自然と長の地位まで昇っていくかもしれない。これからが楽しみだ。眠る息子を見て安心してしまったのかそのまま寝てしまった妻を眺めながら私はこの幸せが永遠に続くように願つて「頭首様お話が」

「・・・・・・・・・・なんですか婆さん」

せつかくの喜ばしい事態なのに婆さんは空気が読めないのか。

「(´▽`)では少し・・・・・・・・」

周りの目を気にしてることからきつと言いくいことなんだろうが

「構わん。言え」

「いいんですか?」

「構わんと言ってるだろう」

少し迷ったようだが婆さんは言う。

「坊ちゃんには月の兎としての最低限のギフトしかありません。他の子でもそれ以外のギフトを最低でも一つか二つ所持しているのに」

は?

.....

男の頭に兔耳とか誰得？

side 俺

6歳になりました。

だからなんだという話ではあるがそれはウサギの獣人に生まれ変わって6年も過ぎたということだ。そのことに関して俺は笑うべきなのか悲しむべきなのか、はたまた前の人生をくだらない人生だったと鼻で笑えばいいのかそれともくだらない人生？にならないための教訓にするべきなのか、俺にはわからないことである。まあ、そんなことを言っても前の人生の事なんぞ全く覚えていない、むしろ思い出すようなことがなかった気もするがというか思い出す必要もないくらい薄っぺらい人生を送ってきたような気もするがそれはどうでもいいことだ。道端なんかに生えてる雑草並にどうでもいいことだ。

どうでもいいことなんだ（真顔）

まあ、本音はさておき。取りあえず今の自分の状況をまとめるためにおさらいをしよう。素数を数えて落ち着くのもいいが今回は自分の事をまとめることで落ち着くことにする。どうでもいいな。なんでこんな説明臭いことしなければならぬのか。いや、

別に誰も俺の考えてることなんざわかるわけないが。

俺は青ウサギ(暫定)という風に呼ばれてる。なんでも推定寿命八百年の月の兎(二百歳で思春期らしいのでだいたいそんなもんだろう)とやらは10歳の誕生日に正式に親などから名付けされるといふよくわからない風習を持つ不思議民族(種族?)らしく、髪の色から青ウサギということらしい。

安直な上にもつとまともな呼び名はないのかと思つたが、なんか親はお偉いさんらしくあつという間に青ウサギという名は広まったようである。迷惑な上にそんな変な呼び名(断定)を定着させないでほしいものである。

それで俺は今6歳。というか今日で6歳である。今日は俺の誕生パーティー(笑)をするらしいが、そんなことはどうでもいい。さて俺はどこにいるか、答えバカでかい屋敷(俺の家兼コミュニティの中心・類似例ホワイトハウス)の屋根に登つて夜空の星を眺めながら下からの俺を探してると思われる怒鳴り声を聞きながら現実逃避しているところである。

なぜ現実逃避しているか?それは単純にコミュニティのリーダーという俺の父親から逃げてるからです。え?なんで逃げてるかつて?骨董品つて壊れやすいよねうん。それで怪我したから血で息子は預かったなんて俺は書いてないし知らないよ。俺はなにも悪くない。はい、現在の状況確認しゅーりよー。

なんか下の騒ぎが大きくなってる気がするが大したことではないだろう。攫われた云々言っているが俺には心当たりないしね。本拠地で警備が整ってる最重要の場所に誰にも気づかれず侵入して重要人物（子供）を攫うなんて犯人もすごい人物だな。

まあ、やろうと思つたらできるかもしれないがどうか狡猾な奴ならできるかもしれないな。なんせ月の兎とやらの種族の特徴として天真爛漫、といえは聞こえはいいが要はバカ正直な子供みたいなものだ。騙そうと思えば騙せる程度にはちよろいしな。それゆえに俺とは合わない、というか俺は月の兎としては異端に分類されるくらいにはひねくれてる。よく言えば大人っぽく冷静、悪く言えば冷めてるといふ風に。

元々大人？または大人の一步手前といった人間とか存在だったため、どうも子供っぽく無邪気な一族とはウマが合わない、浮いているといった風なのである。

「くだらないよなあ。そう思わない？そこにいる人」

「気づかれてみたいね」

いえ、気づいてなかったけどなんとなくカマかけてみただけです。というかあんた誰？

出会いは新しいことに気づくこと

side 青ウサギ

なんだこの状況？

俺は今、現在の状況が全く呑み込めていない混乱というよりも困惑の色の強い状態にある。単純に言うならば別のコミュニティの人間（この場合は純粋な人種を指す）と屋根に寝っ転がりながら星を見ながら会話しているといったような状態だ。あとこの人間の影が妙な動きをしているがそのたびに人間が影を叩く蹴る等の攻撃をしているように見える。純粋に意味がわからない。

「なんなんだこれ？」

「おや、星にまつわる話は面白くなかったかい？」

「いやそれはなかなか面白いんだけど、なんて言うかあれ？」

なんか問題ないような気もするが、そもそもこの人間を知らないことに気づいた。なんで名も知らない人間と普通に話をしていたのだろうか？自分の警戒心が薄いのかそれともこの人間の警戒させないスキルが高いのか。たぶん前者だと思う、というか後者だった場合自分がわりとやばい状態にいることにな……あんまり変わらないな

前者も後者も。

「どうでもいいことだったなと思ったただけだな。うん」

「どうでもいいことって?」

「あんたの名前知らないって事」

ああ、うっかりしていたとその人間はカラカラと笑い、改めて向き合いこいつは言った。

「私は金糸雀。ちよつとしたコミュニケーションの参謀みたいなことをやってるんだ」

「俺の記憶が確かならちよつとしたコミュニケーションではなかったはずなんだが?」

「どういう事かな?」

「階層支配者をまとめて連合に組み込んだ中心的コミュニケーションをちよつとしたっていうのは俺には無理だね」

もしかして敵かもしれないと少々警戒していたが、いい意味でも悪い意味でも予想以上の大物と俺は会話していたらしい。自分の所属している月の兎とも同盟を結んでいてなおかつ、この箱庭で最大勢力の一角と言っても過言ではないくらいに大きなコミュニケーションを率いる女である。見るのは初めてだが。

「そうかい?」

「そうだよ。あ、俺は青ウサギとか呼ばれてる」

「知ってるよ。今大騒ぎしてるのの息子だよね」

「コミュニテイのリーダーとは思えないほど大騒ぎしてるけどな」

なにがおかしいのかケラケラ笑う金糸雀を見ていたらなんかいろいろどうでもよくなってきた。この後の展開も割とどうでもいい気がしてきた。実際どうでもいいけどさあ。

「なんていうか、君は変わってるね」

「月の兎としては異端だったのは自覚してるけど？ あとあんたも相当変わってると思うがね」

「そうかな？」

「そうかもよ？」

どうでもいい会話もなんとなくも続けているとなんだか楽しくなってきた気がするの不思議である。いや、実際に楽しいんだろうな。自分が思ってるより自分つてのは単純だったらしい。

なんだかんだ言っても俺は組織の長の息子、近い年の連中でもなんだかんだで俺とは対等というより若干距離を置いている。自分が壁を作っていただけかもしれないがなんだかんだ言ってる組織の後継者にもっとも可能性の高い人材である。別にうちのコミュニテイは血統主義よろしく次は誰がリーダーをするという風に明確に決まってるわけ

ではないが。一族全体が親戚みたいなものである俺らは、次のリーダーになるであろう人物としてもう大雑把に認識されている。保守的というより日本人的なそういうもんじゃないな感覚である。

今の金糸雀みたいにただ戯言を言い合う仲のいいやつなんていなかったし、なんだかんだで一番年少である俺は子供扱いや弟みたいに見られていた。そういうのが居心地が悪かったのかもしれない。半分以上は想像だけだ。

ふと気になったことあんまり意識せずに聞く。

「そういえば金糸雀さん？」

「今更、さん付けかい？」

「どうでもいいでしょ。それでなんで金糸雀がいるの？」

「今度は呼び捨てか」

「気にするようなことじゃないと思うけどね。で答えは？」

俺の言葉に軽く苦笑したみたいだがこれからが楽しみそうな子だねとか呟き、大したことじゃないと言ってから

「君の誕生パーティーに呼ばれたんだよ。君に私を会わせなかったらしい」

お父さんは何を考えてるんだろう？ ただの親バカ………だろうなあ。きつと。

空が青い、いや蒼い

side 青ウサギ

どうも昨日散々騒ぎ起こした（騒いでたの父だけでなくほとんどの奴が騒いでたみたい）せいで一か月謹慎処分として部屋の中でゴロゴロするか本読むかしかやることのない俺ちゃんです。というか頬つぺた痛い。母に思いつ切りビンタされた後に思いつ切り泣かれてしまった。痛みは引いてるはずなんだけどこれは罪悪感なのかもしれない。「でも暇ー。ひーまーすーぎーるー」

反省の色がないって？反省してるよ後悔はしてないけどね。衝動的にあんなことするようなキヤラじゃなかったんだけど、どうも種族特性か年齢に人格が引つ張られてるような感じがするんだよねえ。結論、自分が思ってるより自分は子供みたいです。

それで俺みたいなのが謹慎処分をきちんと受けてるかという面倒なことに（ドアの近くに二人、窓の下に一人、すぐその庭に確認できるだけで五人、屋根の上に二人いや三人）

監視がいるからですはい。いくらVIPで前科あるからって子供相手にここまで監視要員割くかよ？平常時の3倍だぞおかしいだろ。こつちがわかるってことは向こう

にもバレてるってことだから完全に詰んでます。ありがとうございます。あ、ありがとうございます。」

監視されてるのもウザいし、さっさと何か策を考えないといけないなあ。そう思つてベットに寝つ転がりながら考え始める。

〜20秒経過〜

「飽きた」

策を一通り考えてみたが全部失敗する未来しか見えなかつたので、そのことに関して考えることを放棄した。次に考えたのはどうやって暇を潰すかというどうでもいい考えだつた。が、謹慎の名目で娯楽用の本とか玩具はない。これ本当に子供に対する罰として重すぎないか？

「文句言つても始まらないんだよなあ……」

空想でもして時間を潰そうかと思つたが、それって傍から見たら精神障害者じゃね？と思ひ断念。いい案だと思つたがそんな風な奴と周りに思われてたら泣いてしまう自信がある。というか座敷牢あたりで永久に日の光の当たらない所での生活とかなりそうで怖い。なぜか知らないけどうちの地下に牢屋あるし、もしかしたらS M P O I のためかもしれないが、あんなもんの世話にはなりたくねえ。

「しかし、好き勝手するには俺は立場が弱いんだよなあ。親の七光で普通よりかは立場

はあるが」

だけでも、このままふぎけるのを続けたら立場も下がるし信用とか好き勝手出来なくなる。それは嫌な話だ。自業自得だけでも。そんなことは俺は知らん。そして俺は一つの結論に至る。

コミユニティのリーダーになればよくね？

コミユニティのリーダーになれば責任をはたしていれば好き勝手できるだろうし、自分を才能なしと（無意識っぽい）哀れむ連中への意趣返しとしてもいいだろう。

それにはなにが必要かと言ったら

1 何をおいても必要なはまず知識

2 これは1をいかすためにも必要だろう観察力

3 信頼されなきや反乱されるだろう

4 コミュニティを率いる実力

こんなもんかな？

それじゃあ、まず父にでもおねだりでもしますかね。なにねだろうかな？

悪ガキ兔の人間？・関係編

名付けの儀式

side 俺

あれから月日が経ち、コミュニティの活動に口がはさめる程度に知恵がつき考えるようになった今日この頃。今日は残念なことに俺の名づけの儀式の日である。さっさと名前つけるだけならともかくうちのコミュニティ全体が御目出度いとお祭りになるらしい。子供が少ない上（今の所俺が最年少）に一つの区切り目？らしいのでお祭りになるのだ。それになんだか知らんが俺の頭首としての才覚とやらが発揮されてるとかで、両親が言いふらしているろんな意味で盛り上がっている。

盛り上がるだけならともかく、なぜあいつらは恩恵がないと勝手に哀れんでたくせに掌返したように喜べるんだらうか。

あれか？この前勝手に” のコミュニティ行つたときに魔王退治に巻き込まれて、魔王退治の片棒担いだからか？ほとんどよくわからない魔王だった上にたまたま拾ったガラクタでゲームクリアとかいまいちついていけない事件だったなあれ。

いや、そんな事どうでもよくて問題は

「この服もいいけど、やっぱりこっちかしら?」「いえいえ、やはり頭首様の子息なのですからこちらのお召し物が」「それだと少々地味であろう。ふむ。これなんかどうか?」「それだと派手すぎるであろう」「いやしかし」

母含む、女使用人集団に着せ替え人形のごとく遊ばれてることだろう(※とつくに儀式で着る服は決まっているため完全にただの遊び)。それと母様なんで女物のスカートを持つてニコニコしてるんですか?まさかそれ着せるつもりじゃないですよ?え?ちよつとなんで扉締めるのその使用人!逃げないためって、いやなんでみなさん女物持つてるの?え、ちよ?!アツーーーーーー!!

side長

『これより、育ちゆく子への祝福と我らの主神への報告の儀を始める』

私にとって最も記憶に残るであろう夜は、私の宣言で始まった。我が子が勝手に名づけの儀式と呼ぶ儀は、実は名もないただの10歳になった子に名前を付ける儀式と言う名目の宴会であり、我らの主神への報告と名前を授かる子へのこれからを祝う祭り(建て前)として、コミュニティの内輪だけで行う儀式だ。他のコミュニティも呼んで我が子を自慢したかったが流石に前に親バカとして散々怒られたため泣く泣く我慢したのだった。

帝釈天様への歌と踊りの奉納が始まったのを見ながら感慨深く思う。早かったと。

子が生まれてから短くも早い10年が経ったが自分の子には驚かされつばなしだった。

恩恵のないと他の子供に嗤われた時に殴りあいの喧嘩で勝ち、他のコミュニティを招いた誕生会で行方不明になりいつの間にか招いたコミュニティの重鎮と仲良くなっていたり、いきなりコミュニティの長になると言いだして教えた事をどんどん吸収してコミュニティの方針に口を挟んで来たり、魔王の仕業に見せかけた事件を起こして鬼姫連盟に追いかけまわされていたり、突然いなくなつたかと思えばドツペルゲンガーの魔王退治に巻き込まれ、なおかつクリア条件の一つを見つけ出していたり、白夜叉様ともいつの間にか知り合っていたり、七大妖王の一人と面識があるらしいことを匂わせていたり他にもいろいろな事件を起こしてたり解決していたりと我が子ながら喜ばしいのか悲しむべきなのかわからないような成長をしていた。

……育て方間違つたのか？なんか大半は問題ばかりだと気づいて若干凹んでいいが、いつの間にか奉納も終わり祭壇には我が子が上がっているとあるところであった。

『それではそなたの名をこの場で授けよう』

いつもはほやほやしている嫁もこの役割に徹しているせいかな雰囲気がるで違う。

若干固いのはやはり我々が決めた名前を本人に告げることに緊張しているからだろう。

『玄兎』

我が息子への親からの最大のプレゼントは、この瞬間に渡されたのである。

S i d e 玄兎 (ゲント)

俺の新しい名前は玄兎というらしいです。母親が祭壇から降りてから拡声のギフトが宿った道具を渡され、一言頼まれた。ここで何言おうか決めてなかったし、無茶振りだろ……。無難にコミュニケーションのリーダーになると言ってもなんか面白くないし、変に期待させられるのも嫌だし（自分の力であるつもりだがそれは結構後になるだろうから今から期待されたら好き勝手に動けないし）、なにより普通すぎる気がする。

あ、いいこと思いついた。

『俺の将来の目的は、立派に育って帝釈天様をぶっ倒すことです』

その瞬間、誰もが呆けた顔をしていたが理解が進むにつれて、ある空気が場を包む。

((流石に見過ごせないぞこの餓鬼))

どう見ても反逆宣言ですしね。さて、ブチ切れた大人たちから逃げますかw

とある兎と亜龍との関係

継続は力なり（住岡夜晃）

side gent

「それではギフトゲーム”造物主達の決闘”の決勝を始めるぜえ！」

俺の登場にどよめく観客を無視して拡声の恩恵を片手に高らかに告げる。

「今回の審判はサラマンドラのコミュニティに遊びに来てたら面白そうなゲームしてたんで勝手に審判として参加することに決めた飛び入りの”月の兎”の俺ちゃんがやってやるぜ」

月の兎が審判をするという事で先ほどとは別のどよめきが起きる。さっきのどよめきがなんだあいつ？みたいな感じであったが、名乗りを上げた事で幼い”月の兎”が審判するという事に驚きと喜びの方向に流れている。

お蔭で俺をとっ捕まえて引きずり下ろそうとしていたサラマンドラの連中は頭を抱えたり、やってくれたなとこっちを睨んでいる。例外として笑い転げている年上っぽい亜龍の娘くらいか。あとで楽しく話が出来そうだ。

「そんなじゃあ、決勝に残った奴を紹介だ！北側5桁のコミュニティ”イーヴァルデイ”からリトイ！もう一人は珍しいことに北側6桁のコミュニティ”正宗”から……無銘？え？これ名前？」

疑問に思つてそいつを見てみるとフードを被り顔を布で巻いて徹底的に招待を隠している超怪しい人物が無言で頷く。本名かどうかは知らんがどうやらそれで登録したらしい。

「それは失礼。じゃ始めますか」

『ギフトゲーム名”造物主達の決闘”』

・勝利条件

- 一、対戦プレイヤーのギフトを破壊。
 - 二、対戦プレイヤーが場外に出た場合
 - 三、対戦プレイヤーが勝利条件を満たせなくなった場合（降参含む）
- ・敗北条件

- 一、対戦プレイヤーが勝利条件を一つ満たした場合。
- 二、上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗の下、“イーヴァルデイ”と“正宗”はギフトゲームに参加します。

サラマンドラ“印”

契約書類を読み終えた瞬間、プレイヤーの激突が舞台に響いた。

sideサラ

コツコツコツと暗い石造りの道を進むと牢の警備をしているものが頭を抱えているのを見てやはり来るべきじゃなかったか？と思いつつながら牢番に一言言ってから、目的の牢の前に立つ。

「あれ？次期“サラマンドラ”の頭首様がなんでこんなところに？」

なにもないはずの牢屋の中でフカフカのソファに寝っ転がり、うちのコミュニケーションのものである本に目を通しながら甘味を食っていた子兎は私を見るなりなんているの？と言わんばかりに聞いてきた。

なんで牢屋が個人の部屋並に私物で溢れているのだろうか？

「それはこちらのセリフだ。審判として月例祭を盛り上げるのは構わないが、勝手に審判にならないでくれ。というかそもそも君一人か？」

それを聞くとニシシシと笑いながら当然と言わんばかりに一人で来たといい。続けて

「あんな面白そうなこと関わらない理由はない！」

自信満々に後ろめたいことはないと勝手に審判やっていたことで牢屋に入れているのにもかかわらず言いきる。これを子供特有の無謀さだと父は怒っていたがどちらかというところ。ここまでだったらやつても問題ないというズルい大人のような笑みだ。これは絶対に反省しないな。止めようとしたらむしろ燃え上がるだろうと考える。

「……おい。サラさんだっけ？サラ姉ちゃんと呼んだ方がいいかな？」

少し懲らしめる方法を考えるつもりが没頭していたらしく声をかけられてからそれに気づく。これじゃあまだ組織は継げないなど内心で愚痴りなんだと子兎に聞く。

「そろそろ帰ろうと思うんだけど、出ていい？」

「ダメに決まってるだろう。まあ、その牢から出れるんだつたら好きにするがいい」

「話がわかるね。サラ姉ちゃん！それじゃ！」

鍵がかかっていたはずの牢の扉を針金のようなものだけですぐに鍵を開け、私物をギフトカードび全て入れてから出てくる。少々見くびっていたらしい。

「そういうえば名乗って無かったね俺は玄兎。гентトでいいよ」

「知っているとと思うがサラという。よろしくなгентト」

「よろしくう。まあ、もう帰るけどね」

「гентトよ。帰る前に一ついいか？」

「なん？今日は母さんのシチューの日なんでそろそろ帰らないとマズいんだけど」
飛び出そうとしていたゲントを引き止め聞く。

「なんで今日はここに来たんだ？」

あゝ、そのことね。とどう説明しようか兎耳をヒョコヒョコさせて考えるゲントは少し時間が経つてから答えを出す。

「敵情視察かな？」

「なに？」

「単純に俺は今よりもうちのコミュニティを盛り上げたいと思ってるからね。月例祭とかギフトゲームをいろいろ見て自分が頭首になったら今はうち主催のゲームはないけど、いつか月例祭とかで思いっ切り盛り上げるのさ！」

ニシシシちよつと格好つけすぎたかな？と照れで赤くなつた顔を隠しながら（髪や耳も染まつてるのでバレバレ）、高らかにあばよーつと叫んで飛び出していく。

「変わった奴だな」

あの悪ガキを見逃してしまったことは問題だろうが、問題を起こしても解決して後日きちんと何らかの形で謝罪しつつ双方のコミュニティに利益のある話を見つけ出すか作りだすあのウサギはそういう形でうまく世渡りをしているような奴だから大して問題はないだらう。顔の広さだけでも階層支配者並とも言われるほどの人脈、なんだか

憎めないキャラからみのがされてる点も多い。事実、牢屋に入れていたのも多少反省したら帰させるためのもので大した意味もない。……ん？なにか忘れてるような？

「……あ、コミュニティの本を盗まれた」

途中で気づいた事実慌てて、追いかけるも後の祭りすでに帰ったという報告を受ける。

次会うときはきっちり絞らないとな。

とある兎と悪魔の端末

後悔する者にのみ、許しが与えられる

ダンテ

side ゲント

東側の中層に位置する外門の一つでぶらぶらしているときにそれは現れた。

「ようやく見つけました」

その疲れと怒りを感じるその声を聞いた瞬間、反射的に駆け出したが。

「逃がしません」

しかし回り込まれてしまった。

そのまま別ルートで逃げようかと考えたがそもそも目の前の悪魔の追跡から逃れることなんて容易でないため諦める。そもそも話しかけられてから即座に回り込める点から確実に包囲されてるのだから逃げきれないだろう。

「なんでラプラスの小悪魔がこんな所に？観光？それとも仕事？」

ラプラスの小悪魔。母体であるラプラスの悪魔の端末として箱庭随一の情報収集能

力を持つ箱庭には欠かせない存在である。

「仕事ですね。どっかのバカな子兎が行方不明になって捜索してたんですよ。今見つけましたがね」

「それはお疲れさん。梨食べる？」

「六分割してください」

「はいはい」

怒っているが梨を献上したら即座に食いつくあたり現金である。そういえばなんで梨が好物なんだろうこの子悪魔は。シヤリシヤリと梨をかじる小悪魔たち（いつの間にか6匹に増えている）を見て可愛いからどうでもいいかと思考をブン投げる。

こっちの考えが伝わったのか人の頭の上や肩の上なんか好き勝手に乗ったのを見て感じて、周りからどう見えてるのかかなり気になる。

「面白いやなんでお前らが捜してたんだけ？今から帰るところだったんだけど？」

「一週間近く行方不明になってたあなたを心配してお父さんから捜索依頼が来たんですよ」

「相も変わらず親バカだなあ。というか母さんが妊娠してからひどくならないか？」

「そうなんても一切、自重せずにブラついてるあなたには言う資格はありません」

「ですか」

「です」

外門へ向かつてブラブラ歩きながら時折梨のお代りを催促されつつ進む。果汁なんかを溢さないから汚れなくて楽でいいね。絡んで来ようとしたチンピラを因縁つけさせないように無視しながら会話を続ける。

「そうそう。どこへ行つてたんですか？中層と下層にはいませんでしたよね？」

「なんでそう思うん？」

「行きそうなどころは見張ってましたし、その他の中層下層からも目撃情報は得られませんでしたので」

「本体から行先聞いてないん？」

「母さんからは心配するなの一点張りでしたので上層の何某かに招かれていたと推測しています」

「あつたことねーけど、よくわかるなおい。流石全知の悪魔さまだ。悪いこと出来ないね」

「悪戯ばかりの子兔に言われたくないでしょう」

「その悪戯する前に追いかけてまわしただろうが」

「自業自得です」

「そうだな」

手持ちの梨がなくなつたところで指令塔役の小悪魔以外どこかへばらばらに飛んでいくのを見てなんか他にも仕事あるんだろうなと考えながらも頭に乗つてる小悪魔との会話を続ける。

「それでどこへ行つてたんですか？」

「まだその話題？」

「答えを聞いてませので」

「地獄」

「ふざけないでください」

真面目に答えたら怒られた。なぜだ？

「ふざけてないよ。本当に地獄に行つて来てたの。閻魔様お人よしだったぜ」

「ちよつと待つて下さい。なんでそのことを!?!いや、地獄はただの生者は入れないはずですよ!」

「大したことじゃないよ。とあるバカ帝釈天箱庭産の酒に閻魔様に閻魔殺しを持って行つてもいいか聞いたら許可してくれたぜ。地獄めぐり付きで」

あのバカは今すぐ死ぬべきですなとか呟く小悪魔をなんか怖いのでスルーしつつ、境界門のすぐ近くまで来たので、使用時間外にも関わらず迷わず近寄り使用申請をする。

「ところで俺は今から帰るけどなんか伝え忘れとかないよね？」

「ではひとつだけ」

咳払いをひとつしてからとんでもないことを告げてから飛び去る。

「妹さんが生まれたそうです。よかったですねお兄ちゃんですよ」

「はい？」

一人取り残された俺はいろいろなことに思いをはせ、

「やべえ、母様になんて謝ろう」

産まれる前には帰ると約束してたことを守れなかったことをどう謝るか悩む破目になった。

とある兎と

〃

人生は不安定な航

海だ

シエークスピア

side 子兎

「この俺が魔王に敗れ・・・ただと？」

大勢に見守られる耳鳴りがしそうなぐらいの静寂の中、俺は実力差に膝をつく。

「小賢しい手ばかり打つので少々手こずったが・・・所詮子兎。正面から魔王に

勝てるわけがなからう」

くそつたれ。どこでしくじった？

「.....」

うなだれる俺に勝者が歩み寄る。

「そう落ち込むな。その年でこの私をここまで苦戦させたのはお主が初めてだ誇るがよ

い

そういいながら魔王は先ほどまで向かい合ってたテーブルに目を向ける。

「……負けたら無意味だよ。というか自軍の駒半分以上討たれといて、なんでそんな偉そうにできるわけ？ しかも僅差で勝ったくせに圧勝みたいな雰囲気出してらん？」

「勝者の余裕だ」

なんとなくここでも言い返しても悪口だけになりそうなので、正直に叫ぶ。

「だー！なんでチェスに負けただけでここまで腹立たしいんだ！」

その叫びを筆頭に見守ってた観客が詰め寄ってくる。

「ガハハハ！レティシアがチェスでギリギリなのは初めて見たぜ！」「よくやったぞ負けたのはただけねえがな！」「いやお前子兔が負ける方に賭けてたろ」「バツ!」「おk。ぶん殴る」「子兔が怒った!」「セントの怒った顔もかわいい!」「愛でたい!」「とか抱きしめたい!」「お姉さんたちそのバカ取り押さえてくれたら頭をなでさせてやろう!」「なんで上から目線なのお前?」「ちよつと待て!?!なんでお前から俺を取り押さえるんだ!?!」「だって撫でれるのよ?」「ご愁傷様」「殴られるべきはてめえだろ!なんでちやつかり逃げてんだ」「子兔キック!」——違、ギャアアア!?!「悪は滅びた!……:…:なんか疲れたから俺をなでろやさしくな?」「はーい」「なにこのあざとい子兔」「悪戯兎がうらやましい!」「落ち着け筋肉ダルマ」

結局、もみくちやにされながら不貞腐れるのであった。

side レティシア

不機嫌だったのが可愛がれてるうちに幾分か機嫌が戻ったのか。多少拗ねたような顔をしているので正直に思ったことを言う。

「相変わらず子供っぽいな」

「うるせえ吸血鬼！ さっさと景品とってけやゴラー！」

チエスでのお互いの要求はウサギの血と吸血鬼の牙である。最も子兎が欲しがったのを拒否したら自分の血を景品にギフトゲームの口車に乗せられた形ではあるが、そもそも吸血鬼の牙なんかどうして欲しがったのだろうか？

「交渉の時は大人顔負けの話術の癖にこういう所は露骨に子供っぽくなるな。やはり自らのコミュニケーションに関わらない時は素で楽しんでるのだろうか」では失礼して」

「痛くないよな？」

「大して痛みなどないように配慮する」

「というか直接吸血なのな」

「当然」

カプツ

「!!?」

「嘯みついた瞬間、子兔が硬直したが気にせず頂く。

「やばいやばいなんかやばいコレ」

物足りないが、あまり吸い過ぎても危険なので早めに解放すると、なんかクタクと倒れ込んだ後ブツブツとなんか呟いてる。少々心配になったが「ちくしよ吸血鬼の牙とかいい儲けになると思ったのに」というのを聞いて心配する気が失せた。

「黒か」

気がつくと天井を見ながら寝っ転がっている子兔が不意に言ったことに少々思考を巡らせ「離だも「死ね」危ねえ!」床を赤く染めるつもりだった一撃を寸前に身をひねって飛び出し、かすり傷で済んだようだ。運のいい奴め。

「ちよ、冗談だつて。マジ過ぎない!」

「確かに今日は水色だからな」

「なんで暴露した!」

「.....死ね」

「あんたの自爆じゃねえか!」

覚えてろよー!という捨て台詞と水色と騒ぐ雑音が響くと共に脱兎のごとく逃げ出す子兔は即座に追いかけても逃げ足の速さはどこの韋駄天だと言わんばかりにすぐ

姿を見失う。

「今度あった時は折檻だな」

固く誓った後、後ろでバカ騒ぎしている変態共に天誅を下すべく踵を返す。

「魔王!？」

「その通りだ」

side 金糸雀

「あ、お帰りー」

「あら来てたのねいらっしやい。あとここ頭首の部屋だからあまり散らかさないようにね?」

騒がしさを感じてあえて近くで一番静かな所に向かうと軽く荒れた呼吸をしてるゲントがいたのでいつものことだとして、いるはずの人物がいないことに頭を抑える。

「元から散らかってるじゃん」

そういうしながら散らばってるどういう効果のものかわからない謎のギフトや変なオブリジェが置かれてる部屋を指す。あれでも芸術家なのにほとんどその場の思い付きで作って途中で放置する癖を矯正する必要があるかもしれない。

「整理整頓苦手だからねあのバカは。見た所コウメイはまたどつかに消えたみたいね」

「伝言あるけど聞く?」

「予想できるけど聞いておくわ」

「『ちよつと西側に行つてくる。半年くらいしたら戻る』だって。あと『片付けとかいろいろは金糸雀に任せる』ってさ」

今抱えてる『ちよつとした問題』でコウメイの力があるのに間の悪い男ね。あれでうちの最強戦力かつあり得ないほどの顔の広さがなかったらコミュニティから追い出すわね。その場合、私が長をする破目になるんでしようけど。

「あの自由人は立場わかつてるのかしら?」

「ノーコメント」

「あら自覚あつたのね」

サツと目を逸らすがどうやらただのポーズみたいね。一応考えてはいるってポーズでしょう。

「当然。ま、最近はアレのお蔭でだいぶ緩いけどな」

一転して、気楽そうに笑う子兔の違和感を察しつつも話を続ける。

「『月の御子』。あなたの妹さんね」

「愛されてるからねえ……いろいろなのに」

その瞬間、子兔の目には様々な感情が走ったように思う。

歡喜・失望・怒り・悲しみ・嫉妬・諦観・納得

その目はあまりにも濁っていた。

「……………」

この目を私は知っている。だけど、私には深く関わることは出来ない。

「なんも言わねえの?」

「言つて欲しい?」

それは自分で或いは家族やコミュニテイで解決するものだから。

「いや」

そう言つて、バツと立ち上がつて私に背中を向ける。

どうやら帰るつもりのようなのだ。

「やっぱ、あんたのこと苦手だわ」

「そ。ウチくる?生徒として」

これは結構本気だ。この子のためにも私の成長のためにも答えのわかつてる問を出

す。

「ん。やめとく自分で学んでいくよ」

「残念ね。先生つて立場にちよつと憧れてたのに」

「おい」

ジト目で見つめてくる子兎は心なしか揺れていた。あえて気づかないフリをしてあげて悪戯っぽく笑う。

「いつでもいらつしやい。歓迎するから」

「あんたがいない時に来るわ」

「あらひどい」

ふらつくように出口へ向かう子兎に最後になるかもしれない大切なことを言う。

「自分らしく生きなさい。あなたはあなただからね」

「……見透かすなよ」

不貞腐れたようにつぶやいた後、まっすぐ前を向いて出て行った。

「……」

гентトならきつと見つかるわよ

あなたなりの生き方（答え）が

とある兎と月の兎

side

????

どこかもわからぬ場所

お前は どうするんだ？

どうするんだとは？

お前の居場所の話だよ

・
・
・
・
・

お前は才能がある。恩恵ではなく才能がな

それで俺を勧誘しに来たと？

勧誘？そんなことはしない

じゃあ、何の用だよ？

そもそもお前は自由な存在だ

何が言いたい

お前は自由に動く、或いは自由のためなら最大限の働きをするだろう

それで？

だが組織に縛られればその才を生かすことは出来ないだろうし逆に殺すことになるだろう

お前はそれすら折り合いをつけて生きれる

だが、それではお前は満たされない

自由に動き、欲しいものを勝ち取り、納得いくうえで敗北し、誰かを認め、己を認められる。それがお前だ

お前は哀れだよ

手に入れられそうになった地位は生まれたばかりの選ばれた恩恵を持っただけの子のものになるだろう

唯一その障害になるだろうお前も特に執着することなく諦めた

子供が駄々こねてどうにかなる問題

じゃねえ

そうでもない。お前には頭首だとしてもおかしくないほどの功績を挙げてる

それほどのことじゃない

大したことさ。お前と関係があるという事が外交カードに使われるくらいお前は箱庭中に影響を与えた

ただのガキだぞ？

そのガキが様々なコミュニティを発展させ、犯罪系のコミュニティを衰退させるようなことができるかね？

他にもできる奴はいてもやらなかつ

ただけだろ

そうかもな。だがお前はそれを成し遂げた。天を動かすほどにな

“天”だと？

少々しゃべり過ぎたとは思ってないよ。知ってるだろ？

最近、上位の神仏や悪鬼羅刹共の行動

に違和感があるが俺のせいかな？

あくまで一因だろう。あつてもなくても変わらない程度のな

・
・
・
・
・

「お前が頭首という立場を得るために箱庭中を駆け回ったそれによりあの」
「ですら気づかなかつた欠片と欠片が繋がったのだろう？」

あくまで予測程度だ

そうだな。お前じゃ止められんし、関わることは出来ても曲げることはできない
箱庭のお偉いさんの総意だからか
そういうことだ。それでお前は どうする？

なにがだ？

当然——

「お兄様！」

「んあ？」

side
гент

「お兄様！」

「んあ？」

耳元で大声を出されればんやりと意識を浮上させる。なんか妙なかつ重大な夢を見ていた気がするが今重要なのは目の前でふくれっ面になってるリトルシスターの存在だ

ろう。とりあえずほつぺたを引つ張つてみた。

「なにゆひゆるんれしゆか!」

なにこれめっちゃ柔らかいんだけど餅か? 餅なのか? このモチモチ感やはり餅なのか!?(※寝惚けてます)

く子兎覚醒中く

「で、なんで泣いてるん?」

「お兄様のせいです!あとないてません!」

涙目で睨んでも説得力ないぞ妹よ。それではただかわいいだけだ。言わないけど。

「あつそ。で、なんで起こしたの?まだ夕焼けが綺麗な時間じゃねえか晩飯まで時間あるだろ?」

「う。そ、その〜」

目の前でもじもじする愛玩生物に頬が緩むのを自覚しながら、気がついたら頭をなでていた。なんだこの吸引力?恐るべき罨じゃねえか

「遊んで欲しかったのか?」

「……………最近、お兄様は仕事ばかりで外に連れていってくれませんので……………」

凶星だったらしく落ち込んでる小動物を見て、軽く嗜虐心をくすぐられる。真面目に

こいつは俺を興奮させるのが上手い。めっちゃ泣かせたい。

本音はさておき、俺はことあるごとにリトルシスターを勝手に連れ出して比較的にな全な場所に観光目的（交渉に利用）で様々な場所に連れて行き遊びまわった（追いかけてまわされた）という前科があるため最近では接触すら禁止されているから警戒レベルが下がるまで会うつもりはなかつたんだが。

会いに来るとは少し予想外だった。連れ回す度に割とシヤレにならない出来事起きてたはずだがちよつとしたゲームというのをマジで信じているのか？ 囮にしたり、撒き餌にしたり、邪魔だから放置した記憶しかないんだが。……改めて考えると最低だな俺。嫌われてもおかしくないどころかなぜ懐かれてるのか不思議なレベルだ。

「うくん。遊びに連れて行くのはしばらく無理だな」

「そうなんですか……」

こいつ俺が連れ出さなきや過保護なバカどもが月の都から出そうとしないからなあ。たかが月の兎として破格の恩恵を持っているからって、バカどもの都合のいい人形にさせるつもりはないがな。背負うことを考えてないやつにいろいろ背負わせようとしてるんじゃないやねえよ全く。才能があるからってあれやこれや勝手に背負わせたら潰れるに決まってるだろうに。

「……そういや、今日は満月だっけ」

「え？えっと確か満月だったはずです」

「雲一つない空だし、月見酒と洒落込もうかな」

俺まだ成体になってないけどね。箱庭には嗜好品に関する規制なんかねえし、自己責任論って素敵だよ。裏を返せば誰も助けてくれないって事だけどそこは承知の上だし。

「お月見ですね！あとお酒はまだダメってお母様に怒られますよ？」

「ばれなきやいいんだよ。そうと決まれば飲み物と団子を買ってくるか。酒はお父様の隠してる御神酒でいいし。飲み物は苦行青汁でいいか？」

とある外門でのみ生産されている苦行青汁という名の何か。あれ一杯で一年は生きれるという触れ込みだが異臭に味覚を破壊するかのような代物のため禁輸品として取締まわれているという無害な飲料？で初の禁輸品としてある意海有名な飲み物である。

「嫌ですよ！？あれは嫌いです！」

「あれクソ不味いからなあ。あれ作った奴はお釈迦様に殴られても文句言えないレベルだもん」

「どうしてですか？」

「食えるモノを廃棄物にしてるんだからな。……あれにコアなファンがいるのが理解できん」

「一滴で一か月分の野菜の栄養が取れると言っていましたね」

「そういうやそんなこと言ったような気がするな。箱庭中の珍しい野菜の凝縮液だからそこまで間違っていないだろうが、あれは生命体が取っていいものじゃないわ。」

「栄養はあつてもあれじゃあ拷問だよ。ゲームでコップ一杯飲み干せたら商品出るつてのでクリアした奴数人とかおかしいだろ。挑戦者の数は億超えてるつて話だぞ」

「クリアした人いるんですね」

「一人は暴食とか呼ばれる悪魔らしいが飲んだ後一か月物が食えなくなつたらしい」

「それは大変ですね……ご飯が食べられないなんて」

「(気にするところはそこなのかよ)ま、気にしてもしゃーないし適当に仙桃でもかっぱらつてくるか。皿とかコップ用意しといてくれ。団子と飲み物買い付けてくる」

「わかりまし……お兄様?今聞き間違えじゃなければ仙桃「じゃ、任せた」お兄様!?!冗談ですよね?お兄様——!」

慌ててるリトルシスターを放置して俺とあつてることに気づいた過激派共が無理矢理な行動に出る前に離脱し、ついでにそいつらから財布を拝借して街に飛び出す。妹はちようど入れ違いになった教育係(笑)のオババに任せとけばいいだろう。過激派共を嫌つてるからな。さて、ブチ切れ気味のお父さんとの鬼ごっこだぜ。お神酒でもかっぱらつてこよーつと。

side 黒ウサギ

言うだけ言うとお婆様が入ってくるのと入れ違いにお兄様は飛び出して行っちゃいました。

「あのバカ！また逃げやがったな！」

「オババ口悪くなってるぞ」

「じゃあかあしい！あのバカはしばらく大人しくしとけゆうたのにまた妹様を誑かそうとして！」

「落ち着けババア。黒ウサギがポカーンとなってるぞ」

「……お婆様がこんなに怒ってるところを初めて見ました。でも一緒に入ってきた御付きの人たちはいつものことのように落ち着いています。もしかしていつものことなのでしょうか？お兄様の周りはいつも騒がしいです。お兄様は黒ウサギと違ってみんなから人気ですし、お兄様がいないと皆さんは黒ウサギに対して少し距離を感じます……」。

お兄様みたいに賢くてお友達（※黒ウサギ視点では交渉の席とかがそう見えますが実際は一切そういう関係はありません）が沢山いるのは羨ましいです。

お婆様の怒りは収まりそうにありませんし、そういえばお皿とコップをお兄様から頼

まれていました。お兄様の事ですから後でひよこつと帰ってくるでしょうし、早めに用意ときましましょう。厨房で話せば貸して頂けるでしょうし、お婆様が怖いわけではありませんが早く向かいましょう。

「では、黒ウサギはこれで」

「ちよつと待ちなさい」

「はひ!？」

べ、別に急に声をかけられたから驚いただけで、お婆様の顔が怖いわけではありませんせんよ？

「そろそろお食事の時間ですので食堂へ向かってください」

「はい。わかりました」

お、怒られるかと思いました。返事をしてすぐに食堂に向かう事にします。

「追撃隊を出動させなさい！あのバカはとつ捕まえてお仕置きだよ！」

「もう向かわせてます。最近アレの追いかけてこぼつかりで愚痴を言っていましたよ」

「だったら一回でもとつ捕まえてから言いなさい！」

「いや、私に言われても……」

後ろの声を聞かないように怒られない程度に速く歩く。……お皿とコップはどうしましょうか？

……結局、お食事が終わっておやすみの時間になってもお兄様は帰ってきませんでした。お兄様はよく約束だけしてはそのまま約束を忘れてしまっているのか置いてけぼりにされてしまいお兄様は皆様に囲まれて……。

……今日はもう寝ましょう。

「ん？もう寝るのか？月見しなくていいの？」

「だってお兄様いませ……お兄様？」

「おう。兄だぜ？ちよつと鬼ごっこに時間食っちゃまってな」

そう言つて私を担いで窓から飛び出し……飛び出して!?

「お兄様!?落ちちゃいますよ!」

「落ちねえよ。『模造・筋斗雲（キントウン・レプリカ）』」

これは筋斗雲？

「よしうまくいった。50mくらい上昇しろ」

「お兄様これって」

「うっさい。しつかり捕まっとけ」

ふかふかの雲の上に乗って、空高く月と星が何にも遮られない場所でお兄様は屈託もなく笑う。

「どうだ？すげーだろ？」

苦労したかいがあつたと眩き、下をちよいちよいと指差す。

それを不思議に思いながら下界を見ると

「うわあ」

満天の星空を映したかのような地上の星々が輝く星空の鏡合わせ。

「これを作るのにどれだけ時間がかかったか。あ、リトルシスターの位置が一番綺麗に見える場所になるぞ」

「お兄様。これは？」

輝く鏡面の星空背にお兄様は嗤う。

「俺がこの『月の都』で創り上げた最高傑作だ。ちよつと早いがお前の為に作った光景だぞ」

「私の？」

「そ。お前が生まれたときから計画して作り変えた最高峰の夜景だ。箱庭でここ以上の光景はないぞ。リトルシスターと俺だけの秘密だけだな」

輝く星空、精霊たちの楽しそうな声なき声、そして輝く満月。そのすべてが美しく私とお兄様を祝福してるそんな気がします。お兄様はきつと良い頭首になるでしょうから私がそれを支えて、みんなと一緒に楽しく過ごせればコミュニティの未来も明るい

思います。

side 玄兎

妹は俺の創った夜景に見とれながらも団子と桃のジュースはちやつかり口に運んでる。そのうち太るだろうな。あと口に出してないつもりかもしれないが思ったことを口に出すの止めて欲しい。なんか俺と妹が結婚するみたいなこと言ってるように聞こえるし。

「あと四年か」

ふと口に出してから後悔するがもう遅い。

「お兄様？なにか言いました？」

「こういう時だけは耳聴いなあ。」

「ちよつとした計画だ。それよりジュースお代りいるか？」

「いただきます」

このジュースは仙界の連中が管理している桃源郷の桃の亜種のようなものでこれを摂取すれば病気やけが等で失われた寿命を回復できる程度にはレアな桃である。団子もそれなりに解毒やら解呪関係のものだし、酒に至っては御神酒として加護が宿ったものだ。これらは健全なものには効果はないがそうでないものには大枚はたいでも欲し

がるある意味究極の延命治療だ。

リトルシスターは感じ取っているようだが精霊の気配はここ数年感じ取れない。月光による霊格を整える感覚も失って記憶にはない。鍛え溜まった霊格はすぐに流れ落ちる。溜めた以上に。こんな下らないものに頼らないと確立できないくらいに。俺はもう長くない。あと四年後。つまり妹の名づけの儀式の年まで生きれるかはギリギリといったところだろう。何か妹は期待してるようだがそれは叶わないだろう。

月の兎が獣人だとか言つて誤魔化していたのも流石に限界が近い。月の兎は月に兎が招かれた逸話から発生した精霊よりの帝釈天の眷属だ。月の霊格がなければ存在は失われる。

こうなった理由は大体わかっている。それを何とかする方法もあることはある。俺はその方法をするつもりはないが。万が一その場合、俺はもうここにはいられないだろう。こいつはともかく周りの兎が認めないだろう。これ幸いと今はまだ少数の妹を月の兎の繁栄と栄光の為に祭り上げ、都合のいい神格化に邪魔な俺を排除しようとする勢力が一気に主流になるだろう。

俺はもうすぐここにはいらなくなるんだよ。だから、俺をそんな目で見るな。俺はお前のことが大嫌いだよ。俺はお前に消えて欲しかったんだから。

生まれ持って来た存在への持たずに生まれた存在の劣等感をどうやっても拭うこと

は出来ない。得られそうだったものはただそれだけで取れないことを理解するのはどこまでも思考を煮えたぎらせる。

それだけならともかく肉親としての愛情。庇護欲とかそういうのが存在してなかったら俺は直接月の兎という種を底辺まで叩き落としていただろう。自分という存在を妹という存在をどこまでも利用して誰も得しない復讐にでも走っていただろう。

———それでお前は どうする？

———なにがだ？

———当然、お前がこれから何をするかだよ

.....俺は一体どうするべきなんだ？

人物設定※ネタバレ注意

玄兎（гент）

種族：月の兎

年齢：35歳（月の兎としてはまだ幼年期）

性別：男

本作の主人公でありながら恩恵を持っていない所謂ノンチート。しかし努力と感覚で箱庭内での大規模なマネーゲームでぼろ儲けをするくらいに別の意味で才能を発揮している。

本来なら次期頭首が確定なのだが、妹である黒ウサギの箱庭史に残る破格の恩恵が立場を危ぶめることになる。表向きは次期頭首という事になってるが大多数が黒ウサギを頭首に据えて参謀として活動してもらうのが一番だと思われるし、最善はそれだという事も理解してるが納得はしていない。

破格の恩恵を持つている妹に対して劣等感を抱いているが、極度のシスコンなので基本的に妹のことは大事に思ってる。

趣味として様々なことを少しずつ変えていき誰にも気づかれない様な大きなことを

成すのが楽しみ。カナリアには自分のやっていることを見抜かれたり見透かされたりして、最大の天敵と認識しているため基本的に近寄らないしなにも教えない。それでも感づかれるため子供扱いから脱するのはいつになることか。

好きなものは妹と団子。特に満月の日に妹と月見が至福

様々なギフトゲームに参加しているが商品よりも場を盛り上げることの方が性にあっているため、本当に欲しいものがあるとき以外は基本妨害やら盛り上げ行為で見る人を楽しませている。

数年前に両親が自分を頭首に据えないという会話の内容を聞き、ブチ切れて家出、そして箱庭内の経済を無茶苦茶にしたかったという理由で引つ掻き回し、商業神に多大な恨みを買って討伐されかける。なんとか討伐はされなかったものの大けがを負ったが即座に集めていたギフトで治したはずだったが、身体に異常が出て成体になれないことが判明する（理由は生まれ持った肉体の欠陥）。そのことはほとんどバレてはいないが極一部は知っていて見守っている状態であり、そのことを知っている人物とは徹底的に接触を避けている。

あと数年の延命しても数年が限界だと理解しているが回避する方法はあるがそれをする気は一切なく、回避できても現状が好転するわけではないしデメリットがないわけでもないので余命の過ごし方をいつも通りに過ごすことに重点を置いている。

備考：修羅神仏の知り合いが多いため結構ヤバイことにも感じている

黒ウサギ

種族：月の兎

年齢：6歳

性別：女

主人公の妹であり原作のヒロインというか弄られ役

破格の恩恵を持つて生まれた事から『月の御子』という存在として祭り上げられ、物凄く大切にされている。が、そんなことは関係ないと兄にいろいろな所に連れて行かれた影響か危機回避能力だけは最上級（自覚はない）。兄に溺愛されているため、家族以外の他の月の兎とは越えられない一線を感じて若干の疎外感を感じている。

自分が頭首になることは全く考えていないため、コミユニテイのきな臭い所には全く感づいていない。だが、自分のせいで兄が悩んでいるのでは？と少しだけ疑問がある。

好きなものは兄と団子。満月の時に兄の気まぐれで兄と二人つきりで月見をするのが一番の楽しみ。

原作では金糸雀などとは現時点では面識はないが兄に連れ回されている間に知り合いが結構増えている。妹という事で最初は警戒されるがすぐに周りをゆるふわな雰囲気

気にする。ある意味最大級の癒しとされている。

万能（に見える）兄を崇拜レベルで信用しているため、兄は絶対だと考えている節がある。自分のギフトもなんかすごいもの程度にしか理解していないため、自分が一族の中で最も重要人物だとは気づいていない。

兄の自由さと人間関係に劣等感を感じているが、それに気づいているゲントがいろいろなサプライズや友達作りのきっかけ等を作り緩和させている。

兄経由でしか外に繋がる事がなかったため結構常識知らず。ぶつちぎりで若輩のため自分より年下の相手がいらないから年下との相手は苦手。逆に年上（年寄や百戦錬磨の知将型など）には子供っぽいいためか気に入られやすい。

い。偶然、通りかかった地域支配者のコミュニティに保護されました。

「階層支配者への連絡は!？」

「通信系の恩恵は何者かに妨害されてるらしく外への連絡はとれない状況です。また『門』の周辺は例の化け物が暴れているため近寄れないとのことです!」

私はゲームの関連上、避難区域に避難することは危険との判断で一番守りの固い地域支配者の城で匿われています。

「駐留している階層支配者の部隊は!？」

「ほぼ壊滅的被害により避難民の護衛が精一杯の状況との事!」

「くそ!」

そう叫び、お兄様の取引相手(?)の地域支配者が頭を抱える。

「あの………何か手伝いましょうか?」

「………いや、いい。君の持っている『審判権限』は実に魅力的だがゲームに月の兎を巻き込んでいる以上、下手に使えば状況が悪化しかねない。気持ちはありがたいがね」

「………そうですか」

『審判権限』はギフトゲームに干渉できる強力な権限である代わりに下手に使えば自分の首を締めかねない権限だから最低でもそれを見極めないと使えないとお兄様は

おっしやっていました。このゲームはどのようなのでしょうか？

「（それにあの悪ガキに恩を着せるチャンスだ。下手に協力させて恩を着せさせられるのは勘弁だな）」

「どうかしましたか？」

「いや、ゲームのことを考えてただけだ」

ほらこれと『契約書類』の一枚を手渡される。ギフトゲームについて知っておくべきだと判断されたのだろう。

そう思い黒い『契約書類』に目を落とす。

『 ギフトゲーム：燃える獣

・プレイヤー一覧

・開始時点で三八六六七六五外門・舞台区画・居住区画に存在する知的生命

・ホストマスター側勝利条件

・月の御子の死

・プレイヤー側勝利条件

一、燃える獣の死

二、開始より二四時間の経過

三、燃える獣の正体を暴く事

・プレイヤー側ペナルティ事項

・時間経過ごとにとある事項の記憶を失う

・月の御子の居場所の隠蔽禁止

・プレイヤーはゲーム区域より出ることは出来ない

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の元、ギフトゲームを開催します

“ 印 ”

……このゲームは私が狙いだ。魔王の行うゲームに関わるのは初めてじゃないが中心人物となったのは今回が初めてになります。

お兄様はこんな時にどこへ行ったのでしょうか？いつもならこういう時は率先していろいろやっているはずなのに今回はどんなに耳を澄ましてもお兄様の声も活躍も聞こえない。

……お兄様ほどじゃないにしろ私も月の兎として頑張らなくては

むんつと気合を入れてウサ耳を振じって考える。

今は行方不明の兄が来た時に褒めてもらえるように、私がいつかお兄様の隣に立てる

ように

今はゲームで勝つために考えよう。

悪意無き悪意

side
???

ああ、燃え上がる身体は憤怒の炎、突き動かす動きは怨嗟の心
この身は生まれ変わったのだろう

誰かの都合のいいように、俺の持ち腐れていた何かへの劣等感を利用されたのだろう
だがしかし、この開放感は抑えられない

さあ、暴れるだけ暴れよう

壊せるだけ壊そう

この箱庭を一度終わらせ、すべてを瓦礫に変えよう
創造は破壊からしか生まれないのだから

side 黒ウサギ

ウサ耳を振じつてもいいアイデアが出ず、いつそ囿になると進言するも丁重に断られ、八方塞がりになってしまい、やはり元々の知識の差が大きいとなにも出来ない悔しさを感じ始めた頃、状況が動き出しました。

「大変です！」

飛び込んでできたのは地域支配者の部下と思われる方が飛び込んできました。

「何があった!?!」

「今まで沈黙を保つてた化け物が突如暴れだしました！」

「境界門は!?!」

「破壊されました！」

「クソツ！」

苛立ち混じりに持っていた契約書類を地面に叩きつけて、頭を抱える地域支配者に追い打ちをかけるように最悪の報告は続く

「それと……」

「まだ何かあるのか!?!なんだ？」

「今まで知性を感じさせなかった化け物ですが……」

「無差別に暴れてると聞いたが？」

「それが避難民を襲う振りして階層守護者を誘い出し残存兵を全滅させたそうです」

「くそつたれ！」

治安維持の為に各地域に階層支配者の分隊が配置されているがその分隊が壊滅した以上、この地域には魔王の脅威から身を守ってくれる存在はいない。続けて入る報告に

は協力していた階層支配者の傘下コミュニティもほとんど戦力を削られたようでもはや籠城以外に取れる選択はなく、あと17時間持ちこたえるのは不可能。完全に詰んでいるとのことだ。

「……審判者権限は使ったことはありませんがその場で宣言した方がいいのでしょうか？こんな時お兄様なら。そういえば

「お兄様は？」

「何を言ってる？」

唐突に聞いたのが悪かったのかもかもしれない。深呼吸をして一回落ち着くようにする。

スーハ―スーハ―

「いえ、お兄様が無事なのか気になりました」

「？ 誰だそれは？」

鳩が豆鉄砲を食ったように知らない人の事を聞かれたように地域支配者は答える。

「!? お兄様と商談とやらをしましたよね？」

「商談？何の話だ？今日は商談などしてないが？」

「え？でもお兄様と」

「そもそもお主に兄などいないだろ？」

「……おかしいです。今日は大きな商談の細かいことを詰めるためと言って、あ

れだけ細々とお兄様と商談としていろいろな取り決めをしていたというのに、完全になかったことにされてます。

「……なかつたことにされている？　記憶がない？　それはどこかで見たような？」

「バツ！と黒い契約書類を見直す、そのペナルティー事項には記憶を失うと書いてある。」

それはどういうことか？

考えるまでもない。これは私を狙ったものでもあるかもしれないがお兄様が狙われたものであると！

「……………」

「ちよつと待て!？」

その事実気がついた時気がついたら私は飛び出していった。お兄様の事を忘れろという事はお兄様との思い出も家族の絆も何もかもを失うという事。

誰からも忘れられることは寂しいことではない。

我武者羅にお兄様を探して走り回っていると

そこに化け物がいた。

燃え盛る身体に異形の造形、その醜悪かつ凶悪な見た目からは恐怖しかわかない。そ

れがこつちを見た。

——動けない

お兄様を見つけるために駆け出したのに目の前の現実的な脅威に対し、強力な恩恵も戦い方も逃げるという事さえも頭から掻き消える。

——怖い

真つ白になった頭からやつとその感情が絞り出せるが、どうすればいいのかどうしたらいいのかが全く浮かばない。「いたぞ!」「兎だと!」「注意を引きつける!その間に確保しマスターの元へ!」「了解!」

誰かが異形に攻撃し、それに異形が気を取らてて背中を見せたときに奇妙な感覚を襲う。「逃げるぞ!捕まれ!」知らないはずなのに見覚えのあるようなよく見た光景。「聞こえてないのか!?!仕方がない!」誰かに担がれて運ばれながらも懸命にそれを思いだそうとし、ふと気づく。

「…………お兄様?」

袋小路の選択肢

side 黒ウサギ

誰かに担がれて運ばれていながらも呆然とさっきの感覚について考える。

あの化け物を見て感じた感覚は既視感、よく見た光景を連想させた。そして忘れ去られた兄の記憶。

でも私に何ができるといえるのでしょうか。いつも兄について行くだけで自分では何もできず、周りの人からは笑って助けてもらっていた。私にはどうしようも出来ない。戦うことなんて出来もしないし、知識も考えも浅い若輩者。強大な恩恵だつて使い方はわかつても力量がないから使えない。知識も知恵も経験も力もない子兔。
なにも出来ない。

その事実には涙が出るも、考えることだけは止めない。今、考えることすら止めてしまえば、兄は忘れ去られて怪物として退治されてしまう。それだけは嫌だ。

考えないと兄を救う方法を

大人たちに言う？ 知らない人には説得させるどころか話すら聞いてもらえない。ならば知ってる人に言えば？ それなら地域支配者の所に行けば可能性はある。

なんて言えばいい？何を言えばいいのかわからないが着くまでに思ったことや考えたことを全部言えばきつと何とかなるはず。

そして気づく、兄の顔が思いだせないことに。

必死で思いだそうとするも霞がかかったようにぼやけていて、今までの思い出を思い返そうとしてもそれが思いだせなくなってきたことに気づいた。

慌てて今までの思い出も思いだそうとするが、兄の記憶だけ霞がかかったかのように記憶が薄れてる。いや、思いだせなくなってきた。

「そのまま時間切れを狙うのがいいんじゃないか？それまで生き残れば勝ちだし」
それではお兄様はいなくなってしまう。

「別にかまわないだろ？そうなればお前がコミュニティで誰からも愛されるようになる」

.....でも

「どうせ、兄の事は忘れるんだ悲しくはならないよ」

.....。

「なんでそんなことを言うのかって？諦めて貰うと俺も助かるからね」

.....。

「それでも諦めたくないか。やれやれ子供は素直だねえ」

「それでどうするんだい？誰もあれの事は誰も覚えてないんだからお前が騒いでも意味ないよっ。」

「範囲はこの外門だけだけど助けを求めに行つてたら時間切れは確實だね」

「そうだな。無理だから諦めな」

「悔しいだろうけどすぐにそれも忘れるさ」

「諦めるしかないのか。なにも出来ないし、なぜ悔しいのかもわからなくなってきた。それが悔しくて悲しくて

「おいおい、マジか!？」

大きな爆音と高らかな宣誓が外門に響く。

「あれは・・・!!」

箱庭では知らないものはいないと言われるほどの有名な階層支配者達の連盟”

”。

魔王退治を専門にしているだけあつて魔王の退治或いは封印率はほぼ100%の絶

対的な救いが現れた。

「予想より早かったがこれはこれで問題ないか、あとはあんたがどうするか決めるだけだね」

わたしは……!!

「ん。降ろすよ?」

「ありがとうございます」

頭を下げてすぐに駆け出す。

「無謀だけど止めないよ。頑張りな」

背中から掛けられる言葉に背を押されるように。

終結

side
???

「おい新入り！てめえなんで兎を逃がした!？」

やれやれ。裏切るつもりだったけど今逃がすことになるとは思わなかったわ。わいも甘くなつたの。腕に刻まれた。月の兄妹を守れ」と言う文言をちらりと眺め、「いや。ちよつとあるやつに頼まれて逃がすように言われてたんすよ?」

へらへらと適当なことを言いつつ腕に刻まれた傷跡を隠す。しばらく隠れ家にしようと思つてたけど台無しやわ。まつたくこのお代は高くつかせて貰うで?腕に傷つけてまでして覚えてこうとしたことやし、あんま覚えてないが重要な事なんだろう。

というわけでお世話になつた組織に挨拶する。

「お世話になりましたわ。だから——お前ら潰れとけ」

ここで足止めというか潰しとけば契約は満了だろう。頼むで嬢ちゃん?わいはただ働きする気はないからちゃんと兄ちゃんを救いなされよ?。

side
黒ウサギ

走る。

全力で。

ただ我武者羅に。

走る。

向かう場所は最も威圧感がある場所。

対魔王連盟の包囲網の中心地。

そこにいるはずだから。

いなくなったら悲しいから。

だからあやふやな記憶を抱えながらただ叫ぶ。

「お兄様ー！」

そしてそこにはボロボロの燃える化け物。

倒すために集まった英雄達。

どうすればいいのかわからない

でも、どうにかしなければならぬ

気がついたら化け物の前で英雄達へ立ちふさがっていた。

「なにをしているんだ!?!」「どうして邪魔をする!?!」「精神操作か!」

彼らの言うことなんてわかりません。

でもただ叫びます。

「お兄様を虐めちゃダメです！」

戸惑う英雄たちは攻撃の手を休めて、どう出るのか化け物を見据える。

後ろの化け物の霊格が跳ね上がる。

そして背中から感じる視線は怒りでも悲しみでもないなにか。

よくない感情であることはわかる。

危険ななにかだという事も感じる。

でもなぜだろう？

このすべては私に向けられているものでありながら、その他のもつと大きななにかに向けられた黒い感情である。

そして私ではどうにもできない何かである。

こんなのはただの我儘である。

きつとなにもしないのが正解だろう。

力を

叡智を

経験を

それらを持った英雄にすべて任せるのが最善だろう。

でも、そんなのは関係ない。

これはただの我儘だ。

お兄様がいなくなつては嫌だという我儘だ。

忘れるのが寂しいというだけの我儘だ。

だから

ここで向き合わなければ

一生後悔するだろうから

だから

振り返る。

まっすぐにそれを見つめる。

どうすればいいかなんてわからない

だから私は

一歩前に出た

それに反応して強くなる黒い感情が押し寄せてくる

怖い

恐ろしい

でも

私は一歩ずつ近づいて行く

もしかしたら違うのかもしれない

目の前にいるのはお兄様だ

根拠なんてないただの感覚

それだけがお兄様を繋ぎ止められるものなんだと

近づくと共に大きくなっていった暗い何かが少しづつ薄れ始めた

揺らぎ始めた

「一緒に帰りましょう

お兄様

家族の待つてるあの家に」

「

!!

言葉のない叫びはどこへ向けたものなのかはわからない

燃える炎が勢いよく弾けたと思ったら

空から舞い落ちるゲームクリアと書かれた契約書類はまるでなにかの祝福のように

輝く中で

そこに一人立っていた

化け物がいなくなった場所には見慣れた顔があつた

ウサギの耳もなく、身体のあちこちに火傷をのこした懐かしい人すべてを思いだした

言いたいことはたくさんある

でも言うべき言葉は決まってる

「お帰りなさいお兄様！」

「……」

バツが悪そうに大きなため息をついたお兄様は苦笑いで

「ただいま。寂しかったか？」

その答えは抱き付くことで答える事にします。流石に口に出すのは恥ずかしいですから

後日談という名の考察

S i d e ゲント

あれから半月が経った。

今、俺はコミュニケーションの地下牢で紛糾している会議の結果を待っている。

俺が魔王になった結果、ゲームクリア時には人間に降格していた。ついでに全身火傷で死にかけた。

箱庭の貴族あるいは箱庭の規律の守護者である帝釈天インドラの眷属として、天罰（いや仏罰か？）で人間に降格していた。

その結果、回復力が減衰し死にかけた。

せめて怪我治して欲しかった。

ある程度回復してから聞いたところ、眷属が魔王化したらゲーム終了時に死ぬらしい。

生き残ってるのは帝釈天インドラの慈悲だとか。オババは絶対帝釈天インドラに騙されてる。

あの帝釈天おっさんは絶対そこまで考えてねえし、慈悲深いかそんな奴でもない。強いて言うならだらしなただけだ。

魔王化の上、人間への降格は単民族コミュニティである月の兎としては大問題らしく、追いつ派、残留派、処刑派まで出てくる混乱具合である。真面目にどうでもいいが、俺を目障りに思ってた派閥が嬉々として責め立てているのだろう。なぜかマイシスターがそれを断固拒否してるらしく会議は踊りされど進まずって感じらしい。バカばっかなのだろうか？

俺なら追放しか選択肢はないと思うが、俺がいなくなったらコミュニティ有利の外交が出来なくなると危惧してるアホな派閥もいるらしい（大人の癖に子供に頼るなよ）。実際に俺の魔王化でまとまりかけてた交渉は全部ご破産、ついでにまとまった交渉も見直しと称して無限延期状態なものもいくつつかある。

あのギフトゲームの話をしよう。

あれは嫉妬の大罪のゲームの大幅改変（負の感情で化け物になる話とか誰からも忘れられるという話を混ぜ込んだ）した俺への警告だろうなと推測している。

本来のゲームは参加者が互いに嫉妬を抱いて同士討ちを誘発させる趣味の悪い魔王が遊びに使ってたゲームだったはずである。

だが、その魔王は倒されそのゲームを創ったのはその魔王ではなく遊戯屋を名乗る謎の詩人であることはわかっているが行方も身元も不明である。

今回のギフトゲームにも関わっていると睨んでいるが結局はなにもわからずじまいである。

ただその詩人はかなり実力も思考もヤバイ類いの人物であることは確実だ。

まず多少嫉妬をしていたとはいえ、魔王になるほどのものではなかった。だが、資格は足りない主催者権限も持たない俺が魔王となった理由は

(自分で発動して何らかの方法で俺に押し付けたな)

過去に吸血鬼のギフトゲームを強制的に分離したことがあるということをつかのコミュニケーションの秘密文書で読んだ記憶がある。

ならば、発動したギフトゲームを切り離して他人が使えるようにすることが出来るのではないだろうか？

だとすれば俺は嵌められたことになる。

あの時の俺は近くで強制的な主催者権限の開催の気配を感じて、少し離れた所にいたりトルシスターに避難するように言おうと思ひ、妹を見たときに多少抑えていた負の感情が暴発し、咄嗟に妹の視界に入らない所に逃げた所で俺の記憶は断絶してる。

話を聞く限り、そこから十数分後にゲームが始まったことになっているため俺の推測は大体当てはまるんじゃないだろうか？

推論は出せても真実は闇の中である。

あの時にリトルシスターを助けたのは誰かまでは俺はわからない。だが、うまく保険が効いたのだと思う。そうでないとあの都合のいい行動は理解できない。

犯罪コミュニティの壊滅させる際、ある程度使えそうな奴をギフトゲームなどで俺ら兄妹に有利になるように立ち回れというのを取引としてギフトゲームで絶対遵守させて、逃がした悪党が一定数いる。ついでに言えば俺の為に動けるような奴も一定数いたから俺を消すような動きが本格化する十数年前からコツコツ仕込んでいた甲斐があつたというものである。

(今回は偶然そいつがいなかったらマジで詰んでたな)

妹を守り、ゲームクリアに妹が必要だと睨んで俺の元に向かうように誘導した。こいつの慧眼には称賛が止められないレベルである。絶対本人の前ではやらないが。

聞いた特徴だとなんでそこにいたのかは知らないが南側外門で叩き潰した密漁団にそんなのがいた気がする。そいつは札付きらしく今は逃亡中らしい。

最後にあの時の状況について書こうか

妹は無意識だろうが俺の事を信じて、命をかけた。

俺が暴走してた時に妹に向けて撃たれた矢から(犯人曰く手に入れられないなら殺し

てしまえだそうだ）妹を守るために咆哮をはなった。それで俺の感情は守る方向性に向き結果嫉妬の感情が薄れた。

よってゲームのクリア条件

『燃える獣の正体を暴く』
……妹が感覚だけで正体を察知し魔王の前で答え合わせ

『開始より二四時間の経過』
……これは時間経過でなるから割と関係ない

『燃える獣の死』
……嫉妬の感情を元に生み出された獣のため条件が失われたから消え去った。つまり死んだ。

以上によりギフトゲームの完全クリアを妹は成し遂げたのである。半分以上運と偶然に助けられただけで分の悪い賭けだと俺は思う。少なくとも俺じゃそんな賭けは出来ない。そこまで俺自身を信じられないから。

「でもあいつは当たり前のように俺を信じたんだよなあ」

ギフトゲームの完全クリアでリトルシスターに隷属状態になるはずだったが、妹は当たり前のように『お兄様は家族です！』とこれを破棄。会議が紛糾する理由の一端でもある。

「器量で負けてるなあ兄なのに」

でも、今回の一件であいつへの負の感情がほぼ消えた。

泣きじやくりながら無事を嬉しがるリトルシスターを見て、なんか吹っ切れた。誇れる兄になろうってな。

ガキっばい？ いいじゃん俺はまだ子供なんだからな。

人として生きる編

変わった日常

side ゲント

「行ってしまうのですねお兄様」

上目遣いで泣きそうになりながら覚悟があるなら止めないみたいな顔でリトルシスターが言ってくる。

「ねえこれ毎月やるの？4回目だよ？月一で帰ってきたら出る時に毎回やるの？」

コミュニティから自分から出ることを決めてから約半年、いろんな事情でコミュニティに所属するのは問題があるという結論に至ったらしく、自主的な脱退が認められたので俺は俺でコミュニティを作り、自分を高めるために修行することにした。

だが、それに大反対をしたのは予想通りというか予想外というかマイリトルシスターだった。

俺の言うことは基本的に聞かない子だったはずだが珍しく我儘を言い……黒ウサギの名誉の為に伏せるが泣き疲れるまで5時間と言った所だった。

その時にいろいろあってある程度までコミュニティを成長させるまで会うつもりは

なかったのだが月一ペースで里帰りする条件を飲む破目になったのだ。もっとも最初の要求は毎日帰って来いという事だったのでだいぶマシなっただが。

「コミユニティに帰って来て貰えないのですか？ 私からも皆に言いますので」

「あのな？ 俺も帰る場所あるんだよ。ここは故郷ではあつても帰る場所じやないんだよ。それに俺の部下を路頭に迷わせるわけにはいかんしな。また来月来るからそれで良いだろ？」

「……………約束ですよ？ もう勝手にいなくならないでください」

「それは保証できない。俺のコミユニティにもそこそこ有名になったし、守るもんも多ししな」

妹をなでて適当なことをいう。守るものの所でリトルシスターに笑いかける。

「えへへ。ハッ!? お兄様！」

「はは、じゃ、行つてくるよ」

「いつてらつしやいませ！」

見送られながら境界門をくぐり抜けて、「まだ」7桁外門にあるコミユニティの本拠地に向かう。途中から待ち構えていたらしい商業コミユニティの勧誘を半ば適当に受け流しながら商談につなげるように言いくるめていく。

自分だけで集めた大金を使ってそこそこいい立地の土地を買い取り、フリーだった人

間を引き込み5桁程度の戦力を持つコミュニケーションになった。

“人材紹介コミュニケーション”として今まで創り上げたコネとかコミュニケーションの顔つなぎや商談の取りまとめなんかを専門とする『黄昏』というコミュニケーション。これは自分の身を守るためとちよつとした天への嫌がらせのために活動をしている。

最もなにも違法なことや問題になることはしていない。天が引き起こそうとしている大きな戦争である“太陽主権戦争”だったかで天が間接的に使おうとして引き込もうとしているコミュニケーションをこつち側へ引き込んでいつているだけである。間接的に使おうとしているコミュニケーションは敵対してたり中立だったりするから恒久的な利益を生む商談とかで引き込むのは比較的楽ではあるが。

「それにしてもコネって偉大だわなあ」

適当な商談を終わらせて適当に部屋で書類を整理しつつ、適当に嘯く。

ウサギ時代に作ったコネは即座に様々なコミュニケーションへのそこその影響力を得ることになり、潰しに来る輩への大きなけん制としてかなり役立っている。

もつともウサギで無くなったから切られた縁も多いがそれ以上にウサギで無くなったから作ることの出来た『大聖』や『女王』などの魔王系統のコミュニケーションとかと関われるようになったのは大きい。

つくづく仏門は様々な連中と敵対してたんだなと呆れるものである。最も一神教の

異端なら皆殺しとか許容する連中に比べればまだまだましなんでしょうが。

「マイナスとマイナス比べても意味ないか」

「そうやねえ。なにもしてないのに賞金首にされたりするからねえ」

「そこら辺は知らんが自業自得じゃねえの？あと、お前誰？」

いつの間にか部屋に入り込んでたネコ目の男へ一瞥してから書類整理を続ける。

「おや、てつきりお礼でも言われるかと思つてたのに。誰とはないやろ」

「心当たりがあり過ぎてわからねえな」

見た所、日本神話系統のようだな。人の思考を読んでいるようだから“サトリ”だろう。結構前に潰した犯罪コミュニティで見た顔だし。

「そう言いながら俺のこと見抜いてるみたいやん」

「妹から聞いた特徴が合致してるからな。で、何のようだ誘拐犯」

「いやいや、恩人に対してそれは酷くない？あとサイやお見知りおきを」

「事実だろ。гентだ覚えとけ」

「事実だけでも。忘れられるわけないわ」

こいつが来た理由をいくつか思い浮かぶが嫌な予感しかしない。

「予想してるようだし単刀直入に言うわ。コミュニティに入れてくれない？」

「入会金としてサウンドアイズの金貨10枚で認めてやる。ロンダリングはメンドイか

「ら表の金で頼む」

「いや、ぼったくり過ぎやろ。そんな金ないし」

「てめえの札付きなかつたことにするように掛け合うためだ」

「お前なら一枚あれば十分やろ」

「お前みたいな不良債権入れるんだそれくらい貰わんと割に合わん」

「意外やな？ てつきり断られると思つたら別に入れても構わないと思つてるみたいやん」

「俺含めて問題のないやつはこのコミュニティにはいねえよ。むしろどこかに目をつけられてたり敵視されてる奴かしかいねえし」

どこにでも問題児や異端児なんかの身内の恥は存在するし、逆に手に負えないから追いつけられた類も結構いる。類は友を呼ぶというかそういう類にはなぜか顔が広いというか縁があるというか。

その筆頭みたいな立場だからかいくつかのコミュニティには敵視されまくつてたりする。特に階層支配者みたいな物理的に秩序を守る連中にとつては大きな爆弾に見えるらしい。まだ7回しか迷惑をかけてないというのに。

「確かに問題児ばつかやな」

うるさいな。で、払うの払わないの？

「払いますわ。ここにいるのも楽しそうやし。分割でええか？」

「いっとくけど仕事はキツチリしてもらうからな。しばらくただ働きな」

「当然やな。ただ働きはきついなあ」

「知るか」

彼の日常

sideサイ

ここのコミュニティに入って割と月日が経ち、そろそろ入会金のサウザンドアイズ
金貨10枚も払い終えるかという頃。

仕事の為にボスの部屋に行つたところでそれを見た。

「お兄様〜」

「今日は一段と甘えん坊だなリトルシスターというか。なんでここに？」

「……うわあ。」

そこら中に甘い空気を振り撒いて何やってんねんこの兄妹？

ボスはあれから10歳の見た目から14歳くらいまで育つて、8歳くらいの妹さんと
抱き合つてる姿はなにか道徳的にOUTっぽい気がする。

「私は気づいたんです！お兄様が月一でしか会いに来てくれないなら毎日お兄様の所へ
伺えばいいって！」

「全然納得は出来ないけど、ちゃんと夕飯までには帰るんだよ？」

「はいですー！」

兄の方は妹に対しての愛情と屈折した欲望で妹の方は純粋な兄弟愛と肉親に抱い
ちやいけない類の感情を抱いているのを自覚してないっぽいな。

上つ面ならただの仲のいい兄妹って感じだけど、中身を見ると相当ドロドロして
るが。それ見て蛇のお嬢ちゃんが嫉妬すればいいのか羨ましいのかわからんような顔し
てるねえ。本当に面倒臭いなこの職場。

「お兄様の匂いがします〜」

「え？俺匂うん？ちゃんと洗ってんだけどな？」

なんやろあのフラグ満載のやり取り？あいつらほつといたら一線越えるんじゃない
のか？

面白そうだろうけど放置しとくのは不味いか。

「あく、ボス。商談を完了したんで印お願いできますか？」

「ん？あくわりい。仕事溜まってたか」

「あ、こつちもお願いします」

「リリースもか。ほれこつちに持って来い」

さつさと終わらせてくれよ。本当に。

「報告は以上か」

「はいな」

「マイシスターを帰してよかったな」

「そうですねあ。週一ペースで刺客を送り込まれてると知ったら絶対面倒なことになりますわ」

よほど俺達のこととか俺の存在が邪魔な組織がいるらしい。二重三重に仲介人を挟んでるからどこが敵対してるのがよくわからない。

「まったく俺のどこが気に入らないんだか」

「そりゃあ、あんだだけ商業ゲーム荒らしたり、新たな経済圏を作って勢力拡大を目指してた組織の邪魔とかしまくってたら恨まれますわ」

「その程度利用できない方が悪い。つーか、商業ゲームに関しては参加するように頼まれたのが大半だぞ?」

「え? 初耳なんやけど?」

「言っていないからな。大赤字になりそうだから軽減するために参加してくれつてな。荒らしに荒らして最終的には少し黒字になったら嬉しいから感謝されたな」

大手同士の争いで負けそうだから荒らしてほしいという依頼は結構ある。やってることは大手の独壇場にならないように(ゲーム内の)大手の縄張りを合法的に荒らして

大手以外に勝ち目を残すためのマネーゲームへの参加である。ちなみにこつそりと大手からも依頼があつたりする。大手も独り勝ちを避けたい場合が多々あるのだ。信用が絡んだり組みみたい相手がいたりとね。

「へえ。てつきり嫌がらせ兼楽しむために参加してるのかと思つてましたわ」
「たまにそれが理由で参加してるぞ？」

「.....」

「話を戻すが」

「あ、はい」

なにを大人つて汚いつて言つてるんだ肉体年齢的にはまだ子供だぞ俺？

「先週襲つてきたこいつは明らかに毛色が違う」

「こいつはたしか疫病の魔王でしたか」

「木つ端魔王が出てきた風に見えるが明らかに、こいつの狙いは外門にいた階層支配者を襲うように見せかけて、こつちを狙うことを主軸にした節がある」

「鬼姫の連中が協力してくれなかつたら大変でしたなあ」

「協力してくれたのは奇跡に等しいがな。さあさあ楽しくなつてきたなあ」

味方は少なく周りは敵だらけかもしれないとか最悪に等しい。天相手にちよつかい出し過ぎたかな？

「ま。いつかわかるさ」

そこで俺は立ち上がって外に向かう。

「どこに向かうんですか?」

「再来年にはリトルシスターの儀式だからねえ。今のうちから送るものを考えとかないと。月の都の連中の度肝を抜かないとなあ」

「気が早くないか?」

「ばかやろう!リトルシスターの大事な日だぞ!毎年一年かけてプレゼント厳選してんだ!次の次は重要性の高い儀式だから多く手間をかけるだけだ!」

「シスコンもここまできると清々しいな」

そんなに褒めるな照れる／＼／

「褒めてない褒めてない」

不機嫌な日常

side say

仏門のトップと謁見してから頭首殿の機嫌がすこぶる悪い。最近はどこからか閉心術という心を読むのをふせぐ術をどこかの魔法使いから学んだらしく、考えていることが読めずに中々楽しいことになってる。

変に気を使わなくてよくなるし、頭首殿のやることなすこと無茶苦茶なために予想が出来なくて楽しいものであるが、こういう時は不便だなと素直に思う。

「で、何やらかしたんですかい？ 仏門から抗議の手紙来てますけど？」

「向こうが約束反故にするのが悪い」

「約束でつか？」

はて？ 頭首殿の古巣とも近いから仏門とは取引はそこそこにして、お人好し共ハカに下手に傘下に組み込まれないように気にかけてたはずだが？ そう言えば頭首共が仏門に呼び出されたのと関係があるのか？ 最近はいろんな神々と商談とか話し合いをしてたからそれに関して釘刺されたのかと思つてたが違つたのかな？

「ああ、護法十二天の連中を引つ張りだせること確定したら横槍入れてきやがった」

「いやいや!?なんで護法十二天を引つ張りだそうと!?流石に仏門が後見としてゐるあいつらを味方につけるのは難しいですよ!」

下手に仏門と切り離そうとしたら潰されかねないし、箱庭最大の治安維持機関を敵に回すのは不味い。箱庭の4割が敵に周りかねない。そんなことになったら間違ひなく詰む。

「勘違いするなよ?妹の誕生日に特別参加を飛び入りするように頼んでただけだ」

「あんな護法十二天をなんだと思ってるん?」

「帝釈天が率いてる時点で碌でもない組織だと思ってる」
借金まみれ

そう言えば一回、うちのコミユニティの金を堂々とタカられて、その件で頭首殿がカチコミにいつて護法十二天と共にフルボッコにしたと言つてたな。あんどきはいろいろ大変だった。

「まさかと思ひますが護法十二天全員を妹さんの誕生日の為に引つ張りだそうと?」
「そのつもりだったんだがな。失敗した」

当然やろ。

それは仏門側が横槍入れて当然だわ。一人二人ならともかく全員が一時的にでもいなくなつたら箱庭のパワーバランスが一気に崩れかねない大問題だ。そんなもん良くも悪くも認められるわけがない。

「5人しか引っぱり出せなかったんだが……」

「は？5人？」

「ああ、確約したのが帝釈天・日天・地天・梵天・伊舎那天だ」

「妹さんの誕生日を祝いに行くんだよね？世界滅ぼしに行くんじゃないんだよね？」

「当然だろ。なんで世界滅ぼすとかめんどくせえ事しないといけないんだよ」

その面子はどう考えても最終決戦にでも出てくるような連中なんですが？いや、どちらかといえば温厚な気質の連中でよかったとも言えるのか？

「どうやってそんな面子を引つ張ってきたんで？」

「単純に今まで作ってきたカンを返せと要請しただけだ。仏門その他への根回しも完璧

だったんだがな！土壇場で仏門の横槍のせいで帝釈天一人だけになっちゃったよ！」

「それはそれで大戦果のような？」

月の兎は帝釈天を主神と崇めてるから結果的には良かったんじゃないだろうか？

絶対に飛び入りでも絶対に喜ばれるだろうし。

「○陀の鶴の一声のおかげで今まで根回しに使った金の99%が無駄になっちゃった！小遣いほとんどつき込んだのに！」

「不機嫌の理由そこかい」

というかどれぐらいの小遣い持ってたのかわらんが3桁レベルの修羅神仏相手に根

回しに使った金って国規模のコミュニティがいくつ買えるのだろうか？考えたくなえな。

「しかも誕生日がすぐそこだから精神的にダメージがデカい。なんとか帝釈天は借金のカタがデカいんで残せたんだがな」

「そう言えば頭首殿の小遣いで借金肩代わりしてたんでしたっけ？いくらです？」

「サウザンドアイズの金貨19万ほど」

「国規模のコミュニティの予算やないですかい。そんなに私服肥やしてたんですか」

「金なんぞ増やそうと思えばどんどん増やせる」

なんでこの人は月の兎のコミュニティで引き止められなかったのだろうか？どう考えても恩恵特化の妹さんよりも重要だと思うが。

一人でなんで世界規模の金貯めこんでるんだよ。どこにため込んでたんだ？

「まあ、それはいいんだ」

「いいんですか」

「問題は嫌がらせなのか妹の誕生日を指定して呼び出しかけてきたことだ！」

「あー」

妹ラブな頭首殿に取ってそれは不機嫌に入るわ。即座にカチコミに行ったり仏門への金融的な攻撃仕掛けないだけ大人になったものだ。

「つーわけで、仏門に殴りこみに行った時の苦情がさつきお前が持つて来たそれだ」

「あれ呼び出した先で無礼を果たしたわけじゃなかったんか!？」

「ああ、理由知った上で堂々と邪魔されたんだ殴り込みに行くわ」

「勝手に突っ走るの止めてくれませんか？うちのコミユニティははみ出しもんの集まりなんですよ?」

「暴走しかしないこのコミユニティの連中がたかが天に目をつけられた程度で死ぬわけねえだろ」

まあ、ここがなくなっても全員好き勝手に生き延びるのは目に見えてるが。目をつけられるのは面倒なもんであるし。

「それでどうするんですかい?」

「どうもしねえよ。大体の話し合いは終わってんだ。呼び出しも反故にはさせれんかったし顔出して速攻で月の都に向かえばメインが始まる前には着く」

「そうでつか」

それはそうとして、別の商談もあるしそろそろ移動するか。

「ほな。あんまりはしやぎ過ぎて迷惑掛けんでくださいね?」

「てめえは親か」

YES！ウサギが呼びました！

YES！始まり始まりですよ♪

side???

暗い暗いどこかで一人で佇んでいる。

どうやら夢を見ているらしい。

気がついたら誰かの膝の上に座って話している誰かと話している
他愛もない話して揶揄われて下らないことに怒って

拗ねた振りして慌てさせて

それで結局目一杯甘えている

気がついたら着飾った服をお披露目会をしている

似合うと思うぞって送られてきた服を着て

いろんな人に見て貰って褒められて

それでいろんな組み合わせを楽しんで

気がついたら舞台上の上に立っている

舞台の上で緊張して立ってみんなに祝福されている

舞台の真ん中で誰かを探すも見つからない

やっぱり来れないのかなと肩を落とす

気がついたら赤く染まった土地を走っていた

息も絶え絶えで何かから逃げるために走り続ける

その何かを蹴り飛ばして誰かが大丈夫だと笑顔で言う

誰かはその中心へ向かう

気がついたらベッドの前で泣いていた
ボロボロの誰かの眠るベッドの前で泣き続ける
貴女は悪くないみんなはそう言うけど
行き場のないよくわからない感情がただ渦巻く

気がついたら誰かが高笑いしてふざけてる
笑うことのなかった私も自然と笑う
誰かに手を引かれて騒ぎの中心へ
みんなに囲まれてゲームで遊ぶ

気がついたら置いて行かれていた

背中から誰かが慰めの言葉をかけるが

誰かに置いて行かれたという喪失感が大きい

なんで置いて行かれたのだろうか？

気がついたら月日も経ち

その頃には喪失感も消えて普通に笑えるようになった

“ のコミュニティの一員として成長して

そしていつか誰かに追いつくために

ウサギ

ギ

気がついたら荒廃した土地にいた
頼れる大人たちは攫われたか離れていっていない
自分の肩に幼子たちの命がかかっている
誰にも頼れない

「ほえ？」

目が覚めると見慣れた寝室。寝汗がびっしりとなっているから悪夢でも見ていたのかも知れない。

扉を叩きながら誰かが騒いでる。ぼんやりと聞いていると

『黒ウサギ！もう朝だよ！今日は大事な日だって僕たちに注意したのは黒ウサギでしょ！』

あ。

「あやや!?!ごめんなさいジンぼっちゃん！すぐに用意します」

『朝ごはん出来てるから急いでよね！』

そうでした！今日は重要な日だから準備に時間が掛かるのでした！

「今日は大事ですからねノーネームを復活させるためにも」

白夜叉様に取り引で三人も召喚して貰えるのです。何としてもコミュニティに入って

貰わないと！

ムン！つと気合を入れて

『黒ウサギ！早くしてって言ってるんじゃない！』

「あやや!?!すみませんジンぼっちゃん!?!」
絞まらない黒ウサギであった。

心配なんかしてないぞ？してないからな!!

side ゲント

ある日、ちよつとした用事をこなした後の帰り道でいきなり襲い掛かれたと思つたら、東側の7桁の外門にあるサウンドアイズの支店に拉致されていた。

「お主が7桁こつちに足を運ぶとは珍しいな？」

「俺も用事がなきやこつちには来ねえよ。帰りにてめえに拉致されなきやここに来ることもなかつたわ」

「そう言うな。居場所のつかめんお前を偶然見つけたら捕獲するに決まってるだろう」
そんな決まりねえよ。

そう悪態をつきたいのを我慢して、取り出した煙管を啜えて紫煙を燻らせる。この部屋の主・白夜又はそれを見てムツとしたようだがとやかく言う気はない様だ。だが煙草の匂いが私室に残るのは嫌なのか空気を綺麗にする木の苗を出し、部屋の片隅に置く。

チツ。嫌がらせにも的確に対応しやがる。腹が立つのでそのまま会話を続ける。

「で、俺をなんで捕まえたんだ？嫌がらせか？」

「そんなわけなからう。それにそれはお主の趣味だろうに」

「お前俺のことなんだと思ってるんだ?」

「それも趣味の一つではあるが。」

「悪ガキだの」

「おい」

「まだ俺のことそんな風に見てやがんのか。もっとも自分でもあんまり成長したとか変わったとは思ってないから間違いでないかもしれないが。」

「いや、目撃情報は腐るほどある癖に階層支配者や天神仏が探し回っておったのに逃げ回っておつたらう」

「追いかけて来たら逃げたくなるじゃん?」

「いや、返り討ちにしに行くじゃろ」

「それは場合による」

「ふむ?そうかの?」

最強の階層支配者フロアマスターさんは相も変わらず自分勝手なようだ。帰っていいかな? 敵地アウエーであんまり長居したくねえし。

「いや、そんなことはどうでもよい」

「そだな。んじや俺帰るわ」

「待てい」

帰ろうとしたら止められた。めんどくせえなといいつつ座り直す。

「遠回しに言うのも時間の無駄だしの。単刀直入に言う」

「前置き長い」

「うっさいわ。——ゴホン。гентよ。変な意地張らずにそろそろ黒ウサギのいるノーネームを助けてやってくれんかの？」

「一応聞こう。なんでだ？」

「お主のようなシスコンが月の兎が滅んだとはいえ、他のコミュニティに妹を預けるとは考えにくい。あのコミュニティを信用していたとしても滅んだ今、お主がなにもしないのはおかしいじゃろ」

「……」

なにかと思つたらそんな事か。確かに昔の俺らしくないことだな。仏門経由で俺のことを聞いてたら絶対にんなことは言わないだろう。上層の修羅神仏からハブられるという話は本当臭いな。

「なんか勘違いしてるっぽいからいくつか訂正しよう。一つ、まず俺はあのコミュニティ——というより彼らを信用してたから任せただ。兄離れ出来なくなつたらそれはそれで問題だしな。二つ、ぶつちぎりで若輩とはいえ月の兎の生き残りなんだ生きていける程度の仕事はあるだろ。誰白か夜さんのお気に入りに入りらしいからなあ。三つ、俺が

助けたら俺が抱えてるトラブルに巻き込まれるだろうから関わらないのが一番だ」

「お主らしくないの。以前のお主だったらそんなことを関係なしに自分の近くに置いて守ろうと思うたのだが、お主も成長年を取ったしたのかのう?」

「BBAおちよくつてんのか?」

「む!?わしはまだまだ現役じゃぞ?」

あれから200年近く経つてんだ良くも悪くも成長するわ。ていうかそれBBAの否定になつてないし。

「お主なりの考えがあるのならよいのじゃ。実はノーネームが一か八かの大博打に出ての」

「博打?旗印もねえ負け犬ノーネームが出来る大博打なんぞ——ああ。召喚か」

「うむ。ノーネームが稼いだ生活費を削つて貯めた金で、外界から三人召喚したのだが」
「ちよい待て?三人だと?」

ノーネームが一か八かの博打で三人も召喚できるか?

一人召喚するにしても費用が相当するのにノーネームが用意できるのか?

「そうじゃがどうしたのかの?」

「.....何でもねえよ」

なんでこいつ疑問に—————そういやこいつ大金動かす側だったな。ノーネームに

用意できるはずのない金額だとしても金銭感覚マヒしてて疑問にも思わなかったんだろうな。

「召喚される人物はぶっちゃけどんな人物かわからんじやろ？」

「ランダムらしいからわかるわけねえな。求める人材じゃ無いことなんてザラらしいし」

そんなこと狙って召喚とかできるのは女王くらいだろうし。もしかしたらマイシスターは召喚された自分勝手な連中に虐められてるかもな。

——その頃の黒ウサギ——

「な、なんであの短時間に『フオレス・ガロ』のリーダーと接触してしかも喧嘩を売る状況になったのですか!？」「しかもゲームの日取りは明日!？」「それも敵のテリトリー内で戦うなんて!!」「準備している時間もお金もありません!!」「一体どういう心算があつてのことですか!？」「聞いているのですか三人とも!!」

「『ムシヤクシヤしてやった。今は反省しています』」

「黙らっしやい!!」

——終了——

「仮に黒ウサギがそれが原因で死ぬ破目になっても俺には関係ないね。戦力が残ってるうちに新たな旗でも立ててコミュニティを作らないのが悪い。変な意地張ってノーネームを続けた自業自得だ」

「腕震えておるぞ?」

「気のせいだ」

再開は突然に

side???

おい爺共

それを俺にくれ

は？断るって？

おいおい、心が貧しいのか？

頼んだらプレゼントしてくれるってあいつは言ってたんだが………
ん？プレゼントしたわけじゃないって？

へー。勝手に盗み食いされたんだ

なんでそんなに殺気立ってるんだ？

あー、そういえばあいつって道教も敵に回してたんだっけ？

大昔の事をまだ気にしてんのかよ

いや、俺はあいつの仲間じゃねえけど？

強いて言うなら知り合いだな

っーか、何千年前のことをまだ怒ってたんだよ？

そういうのと無縁になるのが仙道とやらじゃないのか？

いや、そんなの知らんけど？

じゃあ、ギフトゲームしようぜ！

勝ったら俺はそれを貰う

負けたら俺の首でもやるよ

なんだ？怖気づいたのか？

は？いやいや、俺はこれでも箱庭中に指名手配されてる存在だぜ？

そんなの大した^たこと^だじゃない^{日常}

sideгент

なぜかは知らんが白夜叉が話の途中で飛び出してしまったために、白夜叉が秘蔵していた茶菓子を手勝手に喰いながら、喰い終わったら逃げようとか考えていた。

「……………会うべきか会わないべきか」

俺が敵に回してる範囲とか計画とかの理屈で考えると会わない一択なんだが、やっぱり感情的に思うと会いたいものだ。

本音を言うとうんと今すぐ会いに行つて保護したいが、それはあれのためにならないという

のは考えなくてもわかるものだ。絶対俺は甘やかすだろうし、いざとなった時に困るだろう。

まだ指名手配解けてないみたいだし、下手にあれを本拠地に連れて行って帝釈クソ野郎天にバレルのも避けたいし、それ以外を含めても会わないのが最適だろう。いろいろ心残りが生まれそうだが、そんなもん百八十年前から後悔してるし、大した問題じゃないだろう。

「そうと決まればそろそろ御暇させて貰おうかねえ。何か嫌な予感がするし」
茶を飲み干して、さて帰ろうとしたその時

「——お兄様？」

今もつとも会会いたくないあいつの声が聞こえた。

あんにやろう。いきなりいなくなった理由はこれか！

そんなのをおくびにも出さず不敵に笑って声がした方向に振り向く。

「やあ、リトルシスター。久しぶりだねえ」

そこには白夜叉に連れられてきたと思しき黒ウサギとその他3名——服装からして恐らく召喚されて間もない外界の人間だろう——が立っていた。

「お兄様？」

「黒ウサギ、知り合いなの？」

「ヤハハッ！こいつはおもしろいなウサギの兄が人間とは！」

外野が何か言ってるがどうやら妹には聞こえてないらしい。

というかなぜかドヤ顔してる白夜叉がウザい。余計なことしかしてないからな？

それはさておき、リトルシスターは目に涙を溜めて感極まったように

「お、お——お兄様——！！」

突然の体当たりで襲いかかってきたので

「あぶね」

「ひゃいん!!」

普通に避けたら、壁にぶつかって「顔に痛みが!?まさか叩かれた!?!」とか言ってる悶え始めた。

何やってんだこいつ？

「おーい。怪我してないかー?」

「なんで避けるんですか!?!」

さつきまで変にのたうち回ってたのが嘘のようにガバツと顔をあげてツツコミを入れている。

「え?体当たりは避けるもんだろ?」

「体当たりじゃありません!」

「え?違うの?」

「違います!」

side 逆廻 十六夜

今の俺の心境を現すならうんざりといった感情だろう。

「よしよし、悪かったなりトルシスター」

「はうう」

なんで異世界に召喚されてまで、他人がイチャイチャしているのを見せられないといけないんだろうか?

完全に二人の世界に入ってるんだがあれ本当に兄妹か?

「悪い男に騙されてる女みたいね」

「でも兄だつて。ウサ耳ないけど」

「まああやつにもいろいろあるのだ。種族は違うが一応兄妹だぞ?」

「よく見れば似てる気がするわね」

「でも悪人顔」

「まあわからんでもないがな」

「聞こえてるぞー」

二人の世界に入ってると思ったら意外と周りを見ていたようだ。

「え？なにがですか？」

「なんでもないよー？」

訂正、どこかのダメウサギは周りが見えて無いようだった。

あれが本当にノーネームの最年長なんだろうか？

「さて、こうしとくのも役得だけどそろそろそつちの人たちの紹介してくれないか？」

「はい！わかりました！」

へらへら笑つてるけど品定めするような目つきをしてる。見た所、強さはよくわからないが油断ならない相手だというのはわかる。

「その前に自己紹介するのが礼儀じゃないかしら？」

「ん？それもそうだな。俺の名は玄兎ゲントだ。いろいろあつて人間だがこれでも黒ウサギくれの兄だ。残念なことに似てねえけどな。白夜ソノ叉れが真実だとは一応証明してくれるぜ？」

「階層支配者の名に懸けて本当だと言つておこう」

「ま、そういう事。一応、コミュニティの長をやつてたりするな。ま、関係ないけど」

ヒラヒラと手を振る姿からは威厳というものを全く感じ取れないが、なぜか黒ウサギが興奮してすごい人だと騒いでる様子を見て、あれのコミュニティに入ったことを若干、後悔したくなる。

「そしてワシも自己紹介をしておこうかの。私は四桁の門、三三四五外門に本拠を構え

ている” サウザンドアイズ”の幹部、白夜叉。黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニケーションが崩壊してノーネームになってからも、ちよくちよく手を貸してやつているのだよ。ま、器の大きな美少女と認識しておいてくれればいい」

「はいはい、お世話になつております本当に」

ぞんざいな返事をする黒ウサギだが嫌つていふというよりうんざりしている感じが、店の前のように大体セクハラされてるらしい。

「つーか、連れてきたくせに自己紹介してなかつたのかよ」

「それより黒ウサギへのサブライズを優先したかつたからの」

そのセリフを聞いてイラツとしたらしいが、感極まつてる黒ウサギを見て呆れたように表情を戻す。兄としてもアレはないようだ。

「あー、そうかい。一応補足しとくならコレが東側の階層支配者だ。つて言つてもわからんねえか？ 召喚者みたいだし」

「なんとなくはわかるけどな。要するにここら辺で一番偉い奴だろ？ 東側つてことは他にも何人かいるのか？」

「ま、そんなところじやの」

「嘘つけ。ここら辺どころか箱庭の東側の中層下層の最高責任者だろうが。あと、今んとこ階層支配者は5人だな。会うことはないだろうけど」

「中層下層?」

「話進まねえな? 説明メンドイし、後でその黒ウサギにでも聞け」

心底、面倒そうに妹に投げる。そのついでのように

「お前らの名前聞かなくていいや」

と、言いやがった。

「それはどう言う意味だ?」

「それは失礼じゃないかしら?」

「喧嘩上等」

「御三人方!」

「こんなこと言われたらいくら温厚で優しい俺でも怒りがこみ上げるつてもんだ。

「まあ、自信があるのはいいが大したことのない奴も多いしな。大したことない奴なら聞くだけ無駄だし、実力があるならノーネームだなんてハンデにも拘らず勝手に名前は売れるだろうしな」

「上等じゃない! すぐにでも私たちの名が箱庭中に知れ渡るわ! 聞かなかつたことを後悔しなさい!」

「覚悟しとけ!」

「ニャーニャー!」

「ほー？そんじやあ楽しみにしとくぜ」

なるほどな。こうやって挑発して、ノーネームに協力することを取り付けるつもりだったのか。まんまとお嬢様方は乗っちまって。

「ハッ、後で後悔すんなよ？」

「口だけじゃ無いことを祈るわ」

それじゃあ仕事あるからと言って立ち上がったгентはまるで俺達の事は眼中にはないようにさっさと部屋から出て行き

「お兄様！」

黒ウサギが呼び止めて気だるげに首だけで振り向く。

「なに？」

「また会えますよね……？？」

「会えるさ。俺もマイシスターも若いんだからな」

そう言い残し、今度こそ出て行った。

お仕事（謀略）

side 黒ウサギ

「お兄様の凄さですか？」

「ええ、アレは実力者なんですってね？」

飛鳥さんがそんな質問をしてきたのは皆様をコミュニティの本拠に案内して、久しぶりのお風呂でのひと時でした。

「はい。箱庭でも結構な実力者なんですよ？」

「そうなの？あまりそう見えなかったけど」

「悪ぶってるだけに見える」

「あ、確かにそうね」

「飛鳥さんも耀さんも信じてませんね!?お兄様はすごいんですよ！」
「本当かしら？」

お兄様が誤解されたままじゃいけません！

「わかりました！ならばお兄様の魅力を全力で語りますよ！」

「いや、そろそろあがりたいのだけど」

「スツ——」

「お二方逃がしませんよ?」

「(もしかして地雷踏んだのかしら?)」

「(飛鳥のせい)」

お兄様の魅力を語る会は外からの轟音で中断されるまで語り続けました。

☆

★

☆

sideгент

「これが証拠だ」

「本当に潰してくるなんてね。おい。約束の金を持って来い」

「少々お待ちください」

「ゆっくり待ちますよ」

俺は今ペルセウスとかいうギリシャ神話系のコミュニティに来ていた。

ルイオスとか呼ばれる頭首に依頼——とあるコミュニティを潰す——の完遂報告と言った所である。

あ、この茶菓子美味しい。

「コミュニティ一つ潰したにしては料金が安くないか？僕はかまわないけど」

「町の外に国規模のコミュニティを創ったからか最近調子に乗っていろんなところに迷惑かけてたんですよ。薄利多売みたいな感じでいろんな所から少額で結構な依頼が取れたんで、総合すれば結構な黒字になるんで。ま、黄昏くちの人脈とコネがあつての商売ですかねえ」

主に特定の恩恵持ちを探してたりする組織や売り込みたい奴との縁を繋いで紹介料を取るのが、基本的なうちのコミュニティの収入源だが、突発的なゲームや調子に乗り過ぎたコミュニティを大事にならないうちに処理するのも大事な収入源だ。

「正直助かったよ。国規模のコミュニティ程度潰すのはわけないけど、恫喝気味に要求してくるし、潰しに行っても採算合わないだろうし本当に面倒臭い相手だったんだよねえ」

「それをわかっててやってた連中ですからね」

空間移動系がいなくてばかりにそれやってみましたんで確信犯だろうし。

「中心に居た連中は丸ごと潰したんで今頃森元々の縄張り賢の連中者にでも遊んで貰ってるでしょう」

あそこら辺には森の動物の支配者として自身の所有権を奪い合う賭け事ギャンブルを楽しむ確

でもないのがいたはずだし、負けたら大変なことになってんだらうなあ。あれ、最終的に99%主催者が勝つように作られたゲームだから中心人物達ならともかく凡愚たちじゃ勝てないだらうなあ。ま、自業自得だらうけど。

「はん！いい気味だ！」

僕に逆らうものは滅べばいいとか言つて高笑いする様からはバカの印象が薄れない。親の七光で頭首になったという噂はほぼ正解みたいだ。あるいは――

「うん？なんだ僕の顔になにかついているのか？」

「いえ。その首に付けているギフトが気になりました」

箱庭の三大問題児の一角――アルゴールという白夜叉と肩を並べる称号を持つ星霊――なんぞ力量的には使いこなせないだらうが、権能の一部でも4桁で敵うものは者はほぼいないだらう。あれは余程の例外的な恩恵ちからがないと倒せないからな。

使い手はバカだが敵に回したくない奴にペルセウスちは入る。機嫌を取っておくに越したことはないだらう。必要なら敵に回すことぐらいするけども。必要ないならしたくないな。勝てないわけではないが準備が心の底から面倒くさいからな。

先代は理知的だったのになんでこんなバカに後を継がせたのだらうか？鷹が鳶を生んだのだらうなあ。

「へー。これが気になるかい？やっぱり見る目があるね！どうだい？今度うち主催のギ

フトゲームをするんだけど参加してみたらどうだい？」

「それは構いませんがよろしいので？ 景品の吸血鬼あは逃げたそうじゃ無いですか？」

「……それに緘口令を出しているんだがな？」

「急にギフトゲームを中止にする理由はそれぐらいしかないと考えますけどね？」

「ま、すぐに連れ戻せるから気にしないでもいい。居場所は掴めてる」

「そうですか」

景品の吸血鬼——レティシアは仲間思いの吸血鬼だったし、今頃新しく来たメンバキーの実力を測るための準備でもしてるのだろう。

そのバカも白夜叉が手引きしたことぐらゐは掴んでるみたいだし、ノーネームが潰れるくらいのことにはなるだろうが。まあ、ノーネームからの復活なんて夢を掲げる夢見悲劇のヒロイン気取りがちな乙女にはちようどいい地獄にはなるだろう。

「では、ゲームには腕利きを派遣しますよ。箱庭の騎士がいれば箱がつかますしね」

効率良く妹と子供達を自分のコミュニティに組み込むかのプランを立てつつ、グダグダとお茶を楽しむ。

「こつちも大盤振る舞いしたんだ。儲けるさ」

読めないのはあのカキだけだ。アレがノーネームとペルセウスのゲームでの唯一の

勝ち札になり得るかもしれんが

「楽しみにしときます」

どっちが勝つてもいいように準備しとかないとな。

どっちが勝つても大きく動き始めるだろうし。良くも悪くも。

星の墮ちた日

で、何のようだいお嬢ちゃん？

ふーん

魔王を利用して大きな利益を上げるねえ……

興味はあるけどそんな嘘じゃあ

ああ、嘘じゃないか

そういう側面もあるってだけで嘘は言って無いねえ

危うくミスリードに乗ってしまうところだったよ

自爆とも言うけどね

え？ いやその程度で怒るほど器は小さくないよ

相手によるとも言うけどね

口先だけで利用しようとする輩なら叩き潰すけど

君は

いや君たちは何か大きな枠組みで動いているのはなんとなくわかるし

ま、使いツパシリ

いや替えのきく駒かな？

お嬢ちゃんは完全な下っ端だけどそっちの無口な子

そう君

そっちの子は明らかに目的の為に造られたってタイプの存在だし

そういう存在とは何人が知り合いがいるからねえ

アルジュナとかな

神々の遊びの為に消費される方の身にもなれって思うよ

え？どうやって知り合ったかって？

寝てるところを叩き起こしただけだ

とあるクズ帝釈天の弱みでも握ってればと思っただけど完全に無駄足だったなあれ

ああ、君たちには関係ない話だったな

帝釈天に復讐するのに手を貸す？

あれには恨みはあるけど他人が口挟むんじやねえよ

ああ、ごめんごめん

ちよつと本気で殺気出したのは謝るから構えを解きなよ

君と殺り合っても俺に得は無いしね

こんなところでストックを消費したくないし

話し合いを破綻させたいのかい？

君たちの目的にはそぐわないはずだよ

俺達と敵対するのは

お嬢ちゃんはよくわかつてるみたいだねえ

あ、拗ねたのかい？

良くも悪くも俺は大人だからねえ

真つ直ぐに生きれるのは子供の特権さ

大人は捻くれてるんだよ

話を戻そうか

君たちと敵対する気はないよ

君たちの“上”とは若干敵対中だけどね

まったく

遠回しな嫌がらせでかち合うとは思ってもなかったよ

存在は結構前から掴んでたけどね

依頼があるなら利益とこつちの都合で雇われてもいいよ

気に食わないなら一方的に破棄するけど

・
・
・
・
・
・
・

利用する気満々って感じだねえ

子供はそのくらい強欲なくらいでいいんだよ

俺もお前らを利用するから気にしなくていいよ

俺の目的の為にね

side ゲント

「星がきれいだねえ」

5桁の外門から6桁に降格したペルセウスは空に掲げていた旗印を下すことになり、なかなか見ることの出来ない降格流星群が発生したのである。

「ホント。星は綺麗ですわ。あそこペルセウスのボンボンはクソガキだったのに。星座として見れば綺麗ですわな」

「前触れもなく現れるんじゃないやねえよサイ」

「癖って抜けないもんで」

「そうかい」

黙って酌をしてくれるあたり空気が読めるようだ。

他のメンバーは酒と人数が集まったことにより、勝手に宴会に発展している。

勝手に集まった癖に人が星見酒と洒落込んできると見れば、勝手に飲み食いしてんじゃねえよ。

「あいつら静かに飲めねえのか」

「酒と美味しいものがあるんねんなら騒ぎたくなるのも人情ですな。暴れる機会があるかもしれないとワクワクしてたのが空振ったのですから、あの程度に落ち着いてるのはいいことであつしやろ」

「最悪荒事になるって言っただけで、荒事になる可能性は相当低いって通達回してたら」
「そんな勧告回しといて、何も起こらないと思えるほど平和的なコミュニケーションじゃないやろ」

・・・・・・・・・・。

ほとんど逆恨みによる強襲や魔王の介入だったりで根回し自体はほぼ完ぺきに効果を発揮してたんだが脳筋共にはわからないか。

「まったくあいつらが勝つとはなあ。想定していた中ではほぼその可能性はないと思つていたんだが。十六夜とかいったか？あの男があそこまで例外的な人間だとは」

「情報を集めた限りではアルゴールと正面对決で勝つたようです」

「アルゴールねえ・・・・・・・・」

使い手がゴミだという事を差し引いても星霊の中でも有数の凶悪さを誇るあれに勝

てるような奴はほほいしない。俺も勝てる自信はあるがそれはさっさと使い手を潰すという禁じ手に近い方法だし、ぶつちやけそれ以外で勝てる方法はあるまい。正面対決しても勝てないことはないがアルゴールの恩恵から考えると正面対決ではアルゴールは5桁でも勝てるような奴は少数なのだから当然といえば当然だが。

「正直、あいつらが勝つとしたらルイオスを即殺する以外に方法はないと思っていたんだが……」

おかげでマイシスターがペルセウスに入った時に妙な扱いを受けないようにギリシャ神話系の神々に圧力を掛けさせるように動いたのが台無しである。というかなりムダ金を使ったことになる。どっかで補填を入れとかないとな。

「調べる限り石化の光を踏みつぶしたとか」

「アルゴールのヤバい二つの恩恵のうち片方を踏みつぶすとか本当にそいつ人間か？」

「種族は間違いなく人間みたいやな」

「先祖返りとかじゃないのか？」

先祖返りで対悪系の修羅神仏の血が流れているのならそう言うことも可能かもしれない。

純粹な人間が星霊を倒すには、それこそ神々に英雄として造られたとかでもない限りあり得ないがそれならそれで神々の血が確実に混ざるはずである。そうやって神々か

ら力を分け与えられて英雄は英雄と成り得るのだ。

純粹に信仰を集めて人から神になる方法と違い、修羅神仏と戦える人間にはそう言う経緯が必須と言ってもいい。外界で戦争によつて英雄と呼ばれるのはわけが違うのだ。

箱庭における英雄は天変地異を引き起こすような修羅神仏と争える存在である。そんな奴らが純粹な人間なわけがないのはある意味当然であり、その発生に何らかの超常が関わらないわけがないのだ。

「それならそれで別の種族が混ざっているとわかるはずや。うちの奴がそこまで無能やない」

「だよなあ」

他に可能性があるとすれば外界で人造的に超人となるように設計して造つた可能性だが、あいつの身に付けてた服装とかを見る限り西暦2000〜2020年。

その科学のレベルでは多少優秀な人間はつくれても超人はつくれないし、仮に造れるなら確実に神々の介入が入る。生命の神秘の解明は神々の神聖の否定に繋がりがねないため見つけ次第潰すように動くはずである。そうでないと神々が人に恩恵等ギフトを与えて成長させたという神々の役割の否定だ。創造論と進化論で創造論が強いのは人が進化した理由を超常的存在の介入以外で説明できないという理由もあるのだ。

となると可能性としては人類最終試験ラスト・エンブリオのの一つ、人類は人類の手で滅びるという——いや、これ以上は考えても思考の無駄か。

「で、他の二人は？」

「その二人はかなりわかりやすい恩恵ですな。飛鳥という子は言霊系の恩恵みたいですよ。強制的に命令を聞かせるような感じらしいですよ。格上には効かないみたいですがね」

「人心を操る恩恵か？」

「いんや？ 少なくとも水樹を操ることが出来るそうですね。命令されただけにしては水樹の威力が上がってるらしいけどな」

「言霊を介した強化………マントラとか呪文の類か？」

強化エンチャント呪文なんかはわかりやすい。特定の言葉の羅列に力を宿らせ呪文として他者を強化する言霊を介した強化だ。

「ふつーに命令だそうですわ」

「呪文を唱えるなりのことはしてない？」

「みたいですわ」

言葉だけの強化？ 言霊ではないな。言霊ならまず初めに強化するなりなんなりするはずだがそんなことはしてないようだし、だとすると神託や勅命みたいな上位存在の

意志と方向性が合わさった時に＋される力か？

言霊の力を＋40として逆らう意思がー20なら＋20として実行させて、従う意思が＋20なら＋60として使用できるといふ。水樹に意志はないだろうしそのまんま＋40された威力を誇つたのだろう。

方向性としては日本神話の皇室が一番近いか？どこかで血が入っているのかもしれないな。

これも推測に過ぎないが。

．．．．．となる。ノーネームの中で価値のある人間は案外あの娘になるのかも。推測が正しければあの娘は2桁クラスの恩恵を使える可能性がある。そうでなくても適当な恩恵と娘の恩恵がかみ合えばとてつもない効力を発揮する。ノーネームにいなければ人材としては確保しておきたい存在だ。

「．．．．．それで最後の一人は？」

「耀と呼ばれてた子ですな。身体能力がかなり高いみたいですわ。まるで動物の特性を手に入れているかのようなだとの事だそう。サウザンドアイズのグリフォンと競い合った際に風を操る力を得たそうで、友達になつたら力を得られるんじゃないかと言つてみたいですよ」

「．．．．．どつかで聞いたような恩恵だな？そいつの苗字はわかるか？というか

「苗字あるのか？」

「あるみたいですよ？えーっと、春日部だそうですね」

「なるほど。そういうことか」

あの小娘は娘か孫かは知らないがコウメイの血縁か。生命の目録ゲノム・ツリを使用しても変化してない所を見るとコウメイのやつ未完成だった生命の目録ゲノム・ツリを完成させたか、子孫が完成させたのを受け継いだのだろう。

生命の目録ゲノム・ツリは様々な局面に対応できるように創られた対魔王用の最終兵器。魔王共が生命の目録ゲノム・ツリの存在を嗅ぎつけたら確実に奪うように行動するな。対魔王用の最終兵器、逆説的にそれは魔王の手に渡れば連戦連破の手の付けられない存在になりかねない。下手に天の連中に渡っても面倒なことになりかねないし、我が妹も厄介な珍種ばかり集めたなおい。

「どつちにしろしばらくノーネームは台風の目になるな。新参者としては成り上がりのお道筋が出来たと言っているいいな。一人いればコミユニティは復興できるだろうにそこまでの才能持ちの新人が三人もいるとなると」

「の影がチラつくねえ」

「仲良かったんじゃないんですかい？」

「生憎、月の都壊滅からほぼ絶縁状態だよ。人を可哀想な奴扱いとか哀れむような奴は敵だ」

「あいかわらず捻くれていますなあ
うっさい。」

あら、魔王襲来のお知らせ？

兄からの伝言

sideサイ

昔からいろんなところを生き延びてきた自分でもこのような光景を見るのは初めてやなあ。

まともな生活してるならこういう光景も見ることはあるのかもしれないが、頭首殿の妹は比較的にもともな人生？を送ってるから普通なのかもしれないけど。

「い、いいですか!?!黒ウサギは干ばつに備えて〃魘〃の情報を集めてきてほしいと頼んだのです!!情報とは巢を作ってる場所、身体の大きさなどを言うのです!!なのになんでツ!!どうしてツ……!!いったい誰が〃魘〃を倒して来いなんて言いましたツ!!?」

「ムシャクシャしてやった。今は反省してます」

「黙らっしゃい!!」

いや、天下の往来で倒した二十尺ほどの〃魘〃の傍らで説教とか普通の光景ではないか。

日照りを呼び込む神獣“魃”——正確には神格を失い、それでも天に帰ろうとし続け世代を重ねてただの怪鳥へと成り下がった“魃”。神気を失ったとはいえ、あの三人の記憶通りに容易く仕留められる相手ではない。

頭首殿の言う通り、推定6桁上位から5桁下位の實力を持っていると見ていいだろう。敵に回すとそこそこ手古摺るかもしれないという言葉には半信半疑だったが。なるほどペルセウス程度なら辛勝できそうだ。

「いや〜。黒ウサギちゃんは相も変わらず元氣やねえ」

サウザンドアイズに“魃”を売る交渉が終わったようなので、適当に話しかける。

話しかけた瞬間に女性陣は誰だこの人と首を傾げたのに対して、男の子は表面上はヤハハと笑っているが警戒心を持っていつでも動けるように立ち位置を調整する。

なるほど。ペルセウスの件での復讐を警戒してるのか。頭の回る子だねえ。実際、抜けた奴が逆恨みで復讐しようとしてうちの頭首殿に潰されてるし、正しい警戒だ。

「サイ様?! どうしてこちらに!?!」

「呼び捨てでええよ? 様付けされるような奴やないしねえ」

女性陣は黒ウサギの知り合いという事で、警戒心がほとんどなくなったな。対して、男の子は警戒レベルが一段階下がったといった所か。過去に人間同士の騙し合いでもしてたんやろうか?

「うちの頭首殿からの伝言を伝えに来ただけや。伝えたら帰るから安心してや」

「お兄様からの伝言ですか!？」

「ちよつと待て黒ウサギ。俺らにも紹介しろわけがわからん」

「そうね。とりあえず黒ウサギのお兄さんの所の人だつてのはわかるけど」

「自己紹介するべきだ」

別に仲良くする気はないから伝えるだけ伝えて、帰ろうと思つてたのに面倒なことになつてきたなあ。

「自己紹介がまだやったな。わいはサイ。〃黄昏〃つてそのウサギちゃんの兄が頭首をやつてるコミュニティのものや。よろしくしてな。十六夜ちゃんに飛鳥ちゃん、そして耀ちゃん」

「こつちのことは知つてゐるってわけか」

「そう睨まんでくれ。ペルセウスが降格した後始末わいらがしたんやで? ゲームで勝つて後始末せんから本当に大変だつたんや。頭首殿あのズコはブチ切れて本当に面倒だつたんやからなあ」

喜び半分、怒り半分と言つた所だつたがこいつらに教える必要はないだろう。

「後始末?」

「大したことやないで? 5桁の組織がノーネームに負けたからあつちこつちでパワーバ

ランスを維持しようとビビってたバカを大人しくさせただけで」

この機にペルセウスに追撃して二度と立ち上がれないようにしようとする奴らとか、決起した弱小^ザコミュニティが格上に喧嘩売って返り討ちにあったり、ペルセウスを下したノーネームを味方につけようと多少強引^弱な手段^道をしようとして頭首殿の逆鱗に触れて50ほどのコミュニティが潰れたとか話しても無駄だし。

「あの……お兄様が怒ってるのでございますか？」

上目遣いでこつちを見上げる黒ウサギ^{ブラコン}は頭首殿と白夜叉がいなかったら手出しするものが多数出てくるのが納得するほどの破壊力だ。

純粹に兄に怒られるかもしれないと怯えてるように見えて、それよりも兄に会いたいという気持ちが再燃しているあたり結構な重症。

「いや？怒ってへんで？黒ウサギちゃんへの伝言は『よくもやったな。お兄ちゃんはうれいぞコンチクショウ』やと」

「そうですか……お兄様が……えへへ」

「おーい？黒ウサギ？大丈夫か？」

ありやま。褒められただけでトリップしてる。

明らかに桃色の雰囲気を出しててすごく離れたい。いや、頭首殿は昔みたいがいい子いい子とか抱きしめたりしないと思うけどな？考えるのは自由やけど。

「あれって褒められてるのかしら？」

「ツンデレっぽく褒めてるゲントは実はツンデレ？」

「ただのシスコンじゃないか？黒ウサギはブラコンっぽいし」

「……（ツンデレ？シスコンブラコン？それってなにかしら？）」

ああそうだ。この三人にも言つとかないといけなかつたんやつた。

「そつちの三人にも伝言や。『ペルセウスは箱庭の中でも下の⁶桁^{上位}の実力でしかない。だが、お前らの名前は覚えておくことにするよ』」

「ハッ！上から目線だな。すぐに追いついてやるから覚悟しとけて伝えてえとけ」

「あら十六夜君そこは追い越してやるでしょ？」

「首を洗って待つとけやコラ」

若者は元気があつてええなあ。

こんなに直球に勝つて言われたのはいつ以来やろうか？

「はは、伝えとくで。それともう一つ『うちの妹は才能はあるがポンコツだな。よろしく頼む』だとさ」

その言葉を聞いて誰ともなくポワポワしてる黒ウサギを見る。

「やっぱりお兄様には——えへへ」

「……」

「あれ？皆さま？どうしたのでございますか？」

全員の何とも言えない視線に気がついたのか慌ててるが。

うん。頭首シスコン殿が心配するのわかるわ。なんていうか身体目当てのチャライのにすぐにホイホイ付いて行きそうな感じやし。

「ほんまに頼むな？昔はあれがより酷くてメツチャ攫われかけてたりしてたんやから」

「安心してくれ。ちゃんと見張つところ」

「そうね。一人にしないようにしましょう」

「レテイシアが黒ウサギの居場所を常に確認してたのがわかる気がする」

レテイシアさんも大変やねえ。心配して帰った自分のせいでギフトゲーム自分と黒ウサギを賭けた戦いになる

し、戻ったら戻ったで右も左もわからない新入りルーキーと子供戦と黒ウサギ力外だけで実質、ノー

ネーム全体を監督する必要性が出てくるんやから。

「皆さま!?!なんでそんな決意を!?!黒ウサギは子供じゃないんですよ!」

いや、一番子供やで。

少なくともこの中では。

「まあ、それは置いといて。あんたらノーネームは魔王退治を請け負うそうやな?」

こっちの真面目な雰囲気を感じてか、ようやく真面目な雰囲気になる。

「ああ。魔王の事でお困りならノーネームのジン||ラッセルまでつてな」

「ふーん。本気なんやな？名前を売りたいなら他の方法だつてあるだろうに」
「うちの旗を取り戻すためだ。魔王相手には目立つくらいでちょうどいい」

本気で旗を取り返すつもりなんやな。

どこの魔王が旗を奪つたのかわからないから魔王を退治していつて、旗を奪つた魔王を釣り出そうつて魂胆か。

「そうかい。ならこれを渡しとくわ」

「これは……!!」火龍誕生祭の招待状でございますか!？」

「路銀も渡しとくで？片道分やけどな」

「おい。いきなりなんだ？説明しろ」

「大したことないで？とある筋からそこに魔王が出るつて情報が入つた。その祭りには有力なコミユニティが集まるから名を売るには最適やろ」

「それは本当でございますか!？」

本当やでーつと軽くあしらつて、簡単に「火龍誕生祭」の説明をする。

「だいたいわかつた。だが、なんでそこまでする？」

「ん？頭首殿もそろそろノーネームの支援を辞めようと思つてるらしいからその試験と言つた所や。実力があるなら独り立ちさせる。無理そうなら潰して吸収するつて事らしい。ま、」
「」が潰れてから今まで裏で手助けしてたんやからな」

そのためやと目で示せば、納得したように頷く。約一名理解してないようだが、それは仕方がない。というかなんでここまで鈍いんだ。

「白夜叉だけじゃなかったのか……」

「あれに裏工作とか出来んからな。それじゃ伝えたからそれじゃあねえ」

返事も聞かずにさっさと立ち去る。

さっさと戻って、頭首殿のお手伝いに戻りますかね。

魔王召喚の為にね。

商談と悪巧み

side gent

「……思つてたより少ないですなあ」

リストとして渡されたそれは、うちのコミニティが仲介した数に比べて少なすぎる。ざっと1/4もない。想定していたより少ない。少なくとも半数は確実だと踏んでいたのだが、高望みすぎたかねえ？

そういう事も含めて交渉相手の補佐役お兄さんを見るが、目があっただけで忌々しそうに舌打ちされた。

——解せぬ。

「それでもないだろう。貴様らのような無法者共の仲介などどれだけ有益でも付き合いは断つべきだろう」

「このようなことでも起きない限りはですか？」

適当に煽ったらギロリと睨まれたおお怖い怖い。

今、交渉している相手は「サラマンドラ」といういくつか存在する北の階層支配者フロアマスターを擁するコミニティだ。

前頭首（いや、正式にはまだ変わつて無いんだったか？）が病氣だとかで新しい階層支配者に代替わりすることになつたらしい。

それだけなら問題ないのだが（それはそれで問題なきもするが）、新頭首はわずか十一歳の子という事で“サラマンドラ”の有力な協力コミユニティが協力関係を打ち切ると言い出したのだ。

しかも“サラマンドラ”の領域テリトリでも何の経験もない末っ子ではなく目の前の経験豊富（笑）な補佐役お兄さんを頭首にすべきだと内乱寸前だつたりする。

お兄さんが補佐役に甘んじるといふ事で何とか抑え込んでいる状況だ。

……嫌だねえ。才能持つてゐるだけでの存在子供に大人たちがおんぶにだつことは。

大樹に育つ樹があつたとして苗木のうちに城が建てれるわけがない。少し考えればわかるだろうに。

……チイツ。かなり投影してんな入れ込み過ぎだ俺。

「——貴様らの仕業じゃないだろうな？」

「まさかあ。俺らがおちよくる理由がありませんし、おちよくるならもつと悲惨になつてますよ。具体的には内乱で直系傍系含めてとつくの昔に全滅するぐらいには」

「仏門系か“あいつら”なら兎も角、そこそこの遊び相手である“サラマンドラ”にそこまでする理由は無い。」

それにお披露目に協力しないように唆すとか俺らはしない。むしろ“サラマンドラ”を支えるためとか操るにはいい機会だとか言つて、協力することに後押しして“サラマンドラ”の許容範囲を超えるように動かすわ。

そう言つたら何故か呆れられた。

俺なんかおかしいなと言つたか？

「——貴様が原因なら楽なのだがな」

あんたらが傍から見ても頭の悪い選択してるのが原因だと思うが。

「俺の首でも獲りますかね？」

そう言つたら周りが殺気立つ。俺はどんだけ恨まれてるんだか。

あとこいつら程度に不意打ちされても怪我すらしないんだが、そこら辺わかつてるのかねえ？

「生憎、損得計算は出来るつもりだ」

「そうですかい」

損得ねえ？

見た所、損得というより感情っぽいけど。流石にこれは言わなくていいか。言つたら余計拗れる。

「それじゃ、決まったこれらのコミュニティとの仲介はすぐに行いますね。明日までに

は終わらせませんんで。いつがよろしいですか？」

「明後日から準備ができ次第行う」

「ハイハイ。それじゃこれにてお開きですね」

「おい。案内しろ」

そう言つて交渉中ずつとこちらを睨んでいた部下の一人に外に出るまでの案内という名目で監視させるつもりらしい。やれやれ信用ないなあ。

☆ ★ ☆

外に出たら仲間と合流して、些事をこなした後お披露目の舞台となる外門を見て回る。

「どうでしたか？」

「どうつて？どのことだい？舞台としてはまあまあ場所だと思うけど？」

「サラマンドラ」のことです」

思い付きでユーちゃん——ナーガ種の背に乗せて貰つといてなんだけど、ここすごく乗り心地悪いな。これならシリユウでも連れてくるんだったなあ。いや、あいつもあいつで面倒臭いからあんまり変わらないか。

「思つてたより優秀だったね。新頭首とやらと会いたかつたけどそつちについては完全に遮断された。俺みたいなのがいいように利用される危険性は承知らしい」

それは正しい危惧だが、これからの事を考えたら顔繋ぎぐらいしておくべきだろう。期待過剰のくせして過保護とか。今は信用してないって言ってるようなもんだ。

育てる気ないのかねえ？

「そうですか。それは残念ですね」

小声でいい戦力になりそうですのにとか呟かない。

確かに黄昏うらちはいろんな変わり種を集めてるけど俺は別に箱庭の覇権とかそんな面倒臭うざそうなもの興味ないから。

「ユーちゃん俺のこと誤解してる節あるよね？」

「違うのですか？」

「違うね。これからは遊び相手になりそうもないからな」

北側の階層支配者フロアマスターとは、時に協力して時に敵対したりと敵でもあり味方でもある敵対気味な友好関係を結んでいる。

階層支配者フロアマスター達は利害や損得で魔王に肩入れたりするうちを目の敵にしているようだがまあ知ったこつちやない。別にこちらは無益な事はしないだけだ。

ぶつちやけ。最終的な利益に繋がることが少ないから誤解されてるような気もするが今更なので気にしない。

「魔王を呼ぶとか正気なんでしょうかね？」

「正気か狂気かしらんけど、白夜叉と共同開催することで後ろ盾になつて貰うつもりなんだろう。——あんな役立たずに期待するとか頭おかしいと思えんけど」

過去の記録を確認しても箱庭の覇権を取るために暴れた力押し of 脳筋という印象しかない。強大な力を持つてゐるからか強者の傲慢に付け込まれて失敗してきた。そういうタイプのバカだ。

知恵が回るタイプには一番利用しやすいタイプだ。だからこそ愛とか友情だとか贖罪とか功績とか意味わからんことを吹き込まれて階層支配者^{フロアマスター}なんてやっているのだから。

実際、仏門の連中は神格で縛つて人類のためとか過去の罪を雪ぐためにとか言つて階層支配者^{フロアマスター}にしたらしい。

言つてゐることは立派だが内容は上層にお前の席ねえからつていうイジメである。もつとも本人は気づいてなさそうだが。

「それ自体は別に悪い判断じゃねえ。ただあからさま過ぎる点を除けばな」

「新米階層支配者^{フロアマスター}VS新米魔王。……確かに出来過ぎですね」

「バレた時あるいは劣勢にならない為に縄張りの違う白夜叉に頼んだんだろうが——こんなあからさまな策利用されない方がおかしい」

「実際、無関係の私達も知つてますしね」

俺達は小悪魔との関係もあってかなり特殊な部類なんだが。まあいいや。

「何回か会談してみたが白夜叉を呼ぶ判断自体が他所からの知恵つばいんだよなあ。あの子娘ども手をまわしてたな?」

「小娘?」

「まだ知らなくていいよ」

「わかりました」

サラマンドラといくつかのコミュニティとの仲介交渉して欲しいなんて要求してくるから何かと思えば、俺に濡れ衣着せる気だったなあの子娘。

あいつら自身は南に行くと言ってたし、目的は読めるが……。あほらしいから本命以外は消極的な付き合いにしておくか本命以外は俺は興味ないし関わる理由ないし。

「鬼が出るか蛇が出るか。楽しみだねえ」

「来るのは魔王では?」

ユーちゃん空気読んで。

下見というなの暇つぶし

sideгент

火龍誕生祭のメインイベントはまだだとはいえ中々盛況である。

そんな騒がしい街並みを御伴二人をつけてぶらついていた。

「……もうお腹いっぱい」

「おうん？」

連れのユーちゃんが食べ過ぎで動けないので2mぐらいあるだいちちゃんが背負っている。
めっちゃ揺れてるけど酔わないのかな？

「なかなか盛り上がっているようだねえ。あ、おっさんその肉3人前頂戴」

「まいど！」

「私はお腹いっぱいなのですが……」

「ほれ。だいちちゃん落とすなよ？」

「おうん」

だいちちゃんをよく食べるなあ。それに美味そうに食うからつついっつい奢ってしまう。

今日だけで俺の20倍は食べてるのに（ユーちゃんか食べきれない分を食べてるのも含めて）底なしってぐらいよく食べる。

やっぱり身体が大きいとたくさん食べるんだろなあ。

「もぐもぐ。見た所気づいてる奴はいないみたいだな」

飾られている価値ある美術品を見ながら言う。うわっ!?これとかサラ姉ちゃん（年下）の作品じゃん!?こんなとこに飾っていいのか!?

「……………ここは7桁なのですから仕方ないのでは?」

「どつちにしろ質が落ちてるのは間違いないねえ。というか東側との共同とはいえ7桁で階層支配者《フロアマスター》の交代を祝うとか信じられねえよ。本拠のある階層でやらないってのが他の階層支配者《フロアマスター》に舐められる理由なんじゃねえの?」

「おうん」

7桁で階層支配者《フロアマスター》の就任式をやるとなると隠し玉があるとはいえ、力を誇示するという目的にはそぐはないと思う。

最もアレを用意したの俺じゃないから難易度の方は知らないけど、下手すれば詰んで振り返りになるという大失態になりかねない。

サラマンドラがどうなろうと知ったことではないが“もう一本の角”が失われるの

はよろしくない。＼失われた角＼の在処もわかってねえのに。

「この後はどうするんです?」

「特に予定なんかねえけど?」

「……え?じゃあなぜこの外門へ?」

「暇つぶしとよさげなコミュニティを探すためかな」

ブローカー業としては大きな祭りで実力を発揮できるコミュニティとのコネは是非とも作っておきたいものである。下層とはいえ伸びしろのあるコミュニティを発掘できれば、金の卵を産むガチヨウを飼う様なものだ。

「トーナメントは見ないので?」

「決勝ならともかくあんな余興なんぞ見た所で役に立たねえよ」

それにしても何か騒がしいな?何かあったのか?

「ウサギだ!」「月の兎が誰かと戦ってるぞ!」「いいぞやれやれ!」「人間もやるなあ!」
.....

無言で上を見上げると高速移動をしながら鬼ごっこをしている妹とクソガキの姿が見えた。

何やってんだあいつら?

side 黒ウサギ

白夜叉様の招待を受けたとはいえ勝手に飛び出して北側へ行ってしまった御三人方を捕まえるべく怒りのままに北側へ向かった私は、呑気に北側を楽しんでいる御三方を見て冷静になりかけていた頭がヒートアップ。少し乱暴になってしまいました。

怒りで冷静な判断が出来ていなかったとはいえ十六夜さんの口車に乗ってお互いがお互いを捕まえるなんてギフトゲームをするんじゃないやありませんでした。

「うう……。まさかお兄様まで共犯として捕まるなんて」

「いやいやリトルシスター？それサラマンドラの私怨だから関係ないと思うよ？」
「そうなのですか？」

明らかに嘘ついているような口調でホントホントと言うお兄様の様子を見ると気にしているわけではないようなのでよしとしましょう。

そんな様子を見ていたのか白夜叉様が口を開く。

「相変わらずじゃのう。それにしても随分と派手にやったようじゃの、おんしら」
「ああ。ご要望通り祭りを盛り上げてやったぜ」

「胸を張って言わないで下さいこのおバカ様!!」

スパアーン!

ここ最近で使う頻度の上がったハリセンが良い音が出る。

うう。使い慣れてきたことに悲しいのです……。

「仲いいなあ」

「なぜ貴様がここに居る」

ケタケタ笑うお兄様がマンドラ様に睨みつけられている。

十六夜さんのせいでお兄様たちも犯人扱いされてたようですし。うう……。迷惑ばかりかけてます……。

「おいおい。俺の部下がそのクソガキがぶつ壊した破片が被害出ないように身を挺したんじゃないですかー。何が不満なんですかー?」

「そういう所だ!」

お兄様は気にしていないようですが、なぜかお兄様が異様に生き生きとしているのが気になります。

「あやつの事はほうっておけ。嫌がらせの時だけ全力を出す男だからの」

「それは違います!」

「その異議は却下する。それより話を進めるぞ。ほれサンドラ」

「はい」

私の全力の異議をすげなく却下して、笑いかみ殺している白夜叉様が比較的眞面目な姿勢で今回の大暴れの件を主賓兼主催者のサンドラ様に先を促す。

「箱庭の貴族とその盟友の方。此度は火龍生誕祭に足を運んでいただきありがとうございます。今回の件で貴方達が破壊した建造物は、白夜叉様のご厚意で修繕して頂きます。負傷者も奇跡的になかったようなので、私からは不問とさせていただきます」

「へえ、太つ腹な事だな」

「なんで俺を見て箱庭の貴族って言ったん？今は違うよ？」

「うむ。おんしらは私が直々に協力を要請したうえ、怪我人も出なかったからのう。まあ、路銀ろ修繕は報酬の前金だと思っておくが良い。……ふむ。いい機会だから昼間の続きでもしておこうかの」

「なんで無視するん？」

ほっ……。どうやら問題なしという事のようにですね。

「マンドラ様の怒りようから」サラマンドラ」の旗印に泥をかけたとしてコミュニケーション解体の上に牢屋行なんてことにならなくてよかったです。

「それじゃ妹よまたねー」

「おんしは逃げようとするな」

人払いをしている最中に自然に出て行くうとしたお兄様たちを白夜叉様が止めます。あれ？お兄様も関係あるのでしょうか？

兄同士は仲が悪い

side ゲント

「ジン、久しぶり！コミュニティが襲われたと聞いて随分と心配していた！」

先程までと違い、年相応の可愛らしい表情と口調でジンに駆け寄るサンドラ。

そういえば3年前まで普通に交流してたんだっけ。

仲良くてもおかしくはないか。

「ありがとう。サンドラも元気そうでよかった」

「ふふ、当然。魔王に襲われたと聞いて、本当は直ぐに会いに行きたかったんだけどお父様の急病や継承式の事でずっと会いに行けなくなっちゃった」

「それは仕方ないよ。けどあのサンドラが階層支配者フロアマスターになっていたなんて——」

「その様に気安く呼ぶな、名無しの小僧！」

ジンの言葉を聞き、マンドラが詰め寄る。

「というか斬りかかった。」

ジンとやらの首筋に触れる寸前に金髪ヘッドフォン——十六夜が足の裏で刃を止めた。あれただの靴なのによく止められたな。

「おい。止める気なかっただろお前」

「当然だろう名無しのクズ共。サンドラは北の階層支配者フロアマスターになったのだぞ！」名無し〃
 風情「がサンドラの彼氏になったりしたら」〃サラマンドラ〃の——って貴様！」

いきなり斬りかかられた。危ないな。

「おいマンドラ。いきなりなにしゃがる。鬱陶しい」

「人の発言を捏造しといてよく言うわ！それに勝手にうちの酒飲んでる!?!というかど
 こから持って来た!?!」

「ここに来る前に酒蔵が開いてたから」

「勝手に持ち出すな！」

「ちゃんと金は置いといたから問題ねえ」

「勝手に持ち出すな！」

五月蠅いなあマンドラは。

せつかくの人払いなのに騒いでたら外に聞こえるだろうに。

「なあ。あの二人はいつもああなのか？」

「……はい。マンドラ兄様はгент様の事が気に入らないようでいつもああなんです」

「こいつがしたことを考えれば当然だ！」

俺なんかしたっけ？

「惚けた顔をするな！星海龍王の遺産を奪おうと2年前サラマンドラに仕掛けてきただろー！」

「あー。あれ？結局遺産が手に入らなかったから完全に無駄足で示談金出して大損害だったんだよねえ」

太陽の主権と最強種に対する切り札があると推察し（過去の文献参照）、仕掛けたが何も手に入られなかった上に汚名をかぶり敵を増やして金を払って示談というある意味完全敗北した抗争である。

「貴様のせいで〃角〃の片方が失われただろうが！」

「何度も言ってるけど手に入れてたら大々的なゲームでもして全力でおちよくるっての」

「信用できるか！」

信用ないなあ。

「つーか、その〃星海龍王の角〃とか要らねえんだけど。狙いの遺産はもつと価値あるものだったし」

「嘘をつけ！遺産でもつとも価値あるのは〃角〃しかないわ！」

ん？

今サンドラちゃんの顔色が一瞬変わったな。頭首しか知らない情報なのかな？

「お前らの管理の杜撰さを俺のせいにするなよ」

「あの時に無くなったのだ！お前以外あり得ぬわ！」

「聞けよ」

以上のことにより二年前のゲーム以来、“サラマンドラ”ではかなり嫌われているのだ。

頭首が変わるまでに色々懐柔工作したので交渉出来る程度にまでは懐柔が出来た。

元から前党首とサラ姉さん（最近知ったけど年下らしい成長速度の差って残酷だ）が割と仲良かったのでその周りから切り崩していったのがいけなかったのだろうか？

それにしてもサラ姉さんは3年前から見えないがどこ行っただろうか？

“ が潰れてから ” サラマンドラ “ を飛び出したと聞いているが……南側にいるらしいがあつちは幻獣が多いから意思疎通が出来ないことも多く、どうしても敵味方の入り乱れる北側を優先しがちであるから南側はあまり行かないんだよな。

「話が進まないからおんしらは少し静かにしとれ」

「へいへい」

「ふんっ！」

酒を飲み干してしまったので煙管に火をつけ紫煙を燻らせる。

マンドラが睨んでるが無視する。

「どうでもいいから話半分で聞いていたがどうやら」
「『造物主達の決闘』に出るらしく決勝進出した連中の話をしているようだ。」

「へえ、」ラッテンフェンガー」……『ネズミ捕り道化』のコミュニティか。てことは、明日の相手はハーメルンの笛吹き道化だったりするのか？」

十六夜の眩きに、黒ウサギと白夜叉は慌てて十六夜に詰めよる。

「ハーメルンの笛吹き」ですか!？」

「さて、どういふことだ小僧。詳しく話を聞かせろ。」

これからやらかすという話だったようだがなんで出場しているのだろうか？

なにか狙いがあるのか？

「ああ、すまんの。——最近召喚されたばかりのおんしらは知らぬ事なのだが、”ハーメルンの笛吹き”とはな、とある魔王のコミュニティ”幻想魔道書群”の下部組織だったのだ。その魔王のコミュニティは全二〇〇篇以上の魔道書から悪魔を呼び出した、ある召喚士が続べたコミュニティだったのだ」

そういえばそんなのいたらしいな。

俺が生まれる前に中心の『詩人』は討伐されたと聞いていたが、召喚された悪魔どもはある程度生き残ってるらしい。

最近知り合った奴は悪魔というより悪霊だったような？

どうでもいいか。

「おいマンドラなんで俺を睨んでる」

「貴様が呼んだのだろう！」

「そこまで暇じゃねえよ。だいたいコミュニティ紹介してやっただけで招くかどうか決めたのはお前らだろうが！いい加減にしろお前！」

流石にキレた。

「表出ろや！ぶっ潰してやる！」

「上等だ！数々の無礼を後悔させてやる！」

この後、マンドラと演習場でやりあってたら妹たちに鎮圧された。

二人は司会者

side 黒ウサギ

白夜叉様のセクハラ攻撃を撃退して依頼として『造物主達の決闘』の司会をすることになったのですが……。

「待たせたな野郎共に子猫ちゃん達！火龍誕生祭のメインギフトゲーム『造物主達の決闘』の決勝を始めるぜえ！進行はいつも箱庭に混沌を“黄昏”のリーダー、俺ちゃんことгент様様が勝手に進めさせて貰うぜ！」

なぜかお兄様が隣に立ってノリノリで司会をやっています。

さつきまで私一人だったはずなのにいつの間にか隣で勝手に始めてます。

チラツと主催者席の方を見ると

・ 激怒しているマンドラ様

・ 爆笑している白夜叉様

・ 間に挟まれてオロオロしているサンドラ様

……見なかったことにしましょう。

「それでこっちが正式に依頼された審判のマイシスターだ！変な目で見てる奴は後で吊

るすからな！」

あ、目が本気だ。

空気が変になる前に話を進めましょう。

「審判は『サウザンドアイズ』の専属ジャッジでお馴染み、黒ウサギがお務めさせていただけます♪」

『うおーーーー！黒ウサギーーーー！』『お前に会うためにここまで来たぞーーーー！』『好きだーーーー！結婚してくれーーーー！』

相変わらずこの声援には慣れません。

ウサ耳がへによつてなつてしまいます。

「うん。今叫んだ連中顔は覚えたからな。覚悟しとけ」

「お兄様。話が進みません」

「リトルシスターを変な目で見てるあいづらが悪い。うちの妹が箱庭一可愛いからと言つて言つていいことと悪いことがある。特に最後」

「お兄様……」

うう……。あまりそんな事言われると照れちゃいます……。

「マイシスターは相変わらず耐性0だな……。ピンクになつてるし……」

頭が痛そうにこめかみを抑えたかと思えば一転して笑顔で話し始める。

「それじゃあ選手入場だ。マイシスター」

「はい！それでは入場していただきましょう！第一ゲームのプレイヤー”ノーネーム”の春日部耀、”ウィル・オ・ウィスプ”のアーシャイグニファトウスです！」

私のアナウンスと同時にお二方が入場しますが、

「YAツFUFUFUFUUUUUUUU!!」

「わっ……！」

アーシャイグニファトウスが連れていた南瓜のオバケが耀さんを驚かせました。それに驚いた耀さんを見てアーシャさんが笑い転がっています。これは注意しませんと！

「一応試合前だからあんまり挑発とかすんなよ？試合でやるならともかく試合前に空気が悪くするのは困るんで。新人じゃねえんだからわきまえとけ」

「すいませーん」

お兄様に注意されましたが反省する気はあるのでしょうか？

いけませんね空気が悪くなる前にさっさと始めちゃいましょう。

「ほんじゃあ。箱庭アンケートでロリBBBA部門で八回連続で第一位を獲得した白夜s……白BBBAに『待たんか！なんじゃそのアンケートは!?!しかもなんで悪い方に言い直した!?!』——ステージを作って貰いましょう。皆さんご斉唱下さい。しろb『いい加減

にせんか!」

「はいはい幼女萌えー」

『聞く気は無いんじゃない?!』

「いい加減にして下さいお兄様!」

ひよいひよいと私のハリセンを躲す動きは一々キメポーズを取っていてカッコイイです。

うう……。

『……ほん。黒ウサギたちがコントをしとるが無視して進めよう。手元の招待状を見て欲しい。そこに書かれているナンバーが我々のホスト出席外門“サウザンドアイズ”の三三四五番になってるものはおるか?——お主じゃな。木霊の童よ。あとで記念品でも届けよう。それでは決勝の舞台が決定した。皆のものお手を拝借』

白夜叉様が両手を前に出し、それに倣ってすべての観客が両手を前に出す。

パン!と会場一致の拍手一つ。

そして世界が一変した。

☆ ★ ☆

「勝者、アーシャ||イグニファトウス!」

私の宣言で観客席から歓声が上がります。

耀さんには勝って欲しかったですけどジャックさんに勝つには知恵も経験も足りていません。今回の試合をバネにして成長して欲しいです。

「いい試合だったけどちよつと物足りなかったかなあ。不死の南瓜がないか？ ノーネーム」側に相方がいればもつと面白い試合になっていただろうねえ。南瓜の過保護の勝利と言った所かな？」

「お兄様ならどうします？」

「俺？俺なら開幕で地獄の炎を召喚してフィールドを焼き尽くすけど？そして相手を炎の中に閉じ込めてから脱出する」

「そういうえばお兄様は地獄道とも交流があると聞いたことがあります。きっとその関係でしょう。昔、地獄のお土産として魚とも草とも言えるような言えないような謎のモノを持ち帰って育てていましたし。」

でも

「それはジャックさんには効かないのでは？」

「不死なら不死で攻略法はあるんだけどね。この後の試合もあつたまた今度な」

「気になりますけど仕方ないですね」

「そんな他愛無い会話をしていると。」

「空気読まねえなあ……」

お兄様は急に何かに気がついたように遠くを見て眩きました。
その視線の先を見ると

舞い散るようにはば撒かれた黒い契約書類……まさか!?

『ギフトゲーム名：”The P I E D P I P E R o f H A M E L I N”』

1 プレイヤー一覧

現時点で三九九九九外門・四〇〇〇〇〇〇〇外門・境界壁の舞台区画に存在する参加者・主催者の全コミュニティ。

2 プレイヤー側・ホスト指定ゲームマスター

太陽の運行者・星霊 白夜叉。

3. ホストマスター側 勝利条件

全プレイヤーの屈服・及び殺害。

4. プレイヤー側 勝利条件

一、ゲームマスターを打倒。

二、偽りの伝承を砕き、真実の伝承を掲げよ。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスター名の下、ギフトゲームを開催しま

す。

”グリムグリモワール・ハーメルン”

印』

「魔王だ！魔王が出たぞ—————!!」

どこからともかく聞こえてきたその悲痛な叫びが状況を簡潔に示していました。

「お兄様は観客の誘導を——つていません!?どこに行つたのですかお兄様——!」

そういえば魔王退治を任せると前にお兄様からの伝言がありました。

ここは任せるといふ事ですね！お兄様の期待に答えて見せます！

そうと決まれば一度、皆様と白夜叉様に合流しましょう。

舞台へ飛ばされた方を助けながらお兄様の期待に答えるために気合を入れませんと

!

魔王幼女降臨

sideгент

魔王。

それは箱庭世界で己のギフトゲーム^ルを強要し、大多数の秩序を乱す存在。意志ある天災として

そして必ず最後には滅ぼされる。

そんな存在が現れたら弱者は逃げまどい、強者は弱者を守ったり戦ったりとお祭り騒ぎになる。

そんな大騒ぎを俺は

「おーおー、よく逃げ回ってるなあ」

壊れた建物の上でお祭り騒ぎを見物していた。

「гент様これからどうするので？」

「別に何も？つーか、だいちゃんどうしたの？」

何か見に行きたいのかそわそわしているだいちゃんを見ると

「おうん」

「気になるやつがいるのか？じゃあ行ってもいいけど手は出すなよ。邪魔しちや悪いからな」

拾っておいた黒い契約書類ギアスロールをひらひら振る。

これだけでも意味はきちんと伝わるだろう。

「おん」

そう返事してだいちゃんは地面に沈んでいった。

地面に潜るのは勝手だけど魔王連中にも「サラマンドラ」にもばれないように……

だいちゃんなら心配ないか。

「ユーちゃんはどうすんの？」

「私はгент様に従います」

「邪魔にならない範囲で好きにしろ」

「はい」

さて、改めて人込みとかを眺めるとわかることもある。

「流石に混乱で誤魔化されてるけど上から見るとあからさますぎて笑えるなあ」

「なにがですか？」

「“サラマンドラ”の不自然さ」

「そこまで不自然ですか？避難誘導は問題ないようですが」

「問題ないのが問題なのさ」

「ここら辺は経験の差かな？」

性格の悪さかもしれないけど。

「とうとうと？」

「そうだなあ。今までの経験からして魔王が現れた時つて、魔王の直接脅威があるまで混乱で民衆は正しい行動1割、間違つた行動2割、動けなくなるのが7割つて割合で動きになる」

「そうなんですか？」

ホントはなんかの心理学で読んだ気がするだけで、ホントかどうかは知らないけどな。

「そうだ。そしてそれは割合は変わつても階層フロアマスター支配者の組織も変わらない。そこで、改めて見てみる。トップが変わつて命令なんかうまくいきにくい組織である”サラマンドラ”の動きはどうだ？」

「見事に組織だつて動いてますね」

「そうだな。あらかじめ魔王襲来を知っていたとしても動きがスムーズすぎるんだよ。5桁から見物に来た奴も気づいてるみたいだな」

「有能つて事では済まないんですか？」

「6桁に転がり落ちた無能が？本拠の6桁でなく7桁でしかこの祭りが開催できないほどのなのにか？笑わせんな」

そこまで有能なら人数減つても5桁を維持できるはずだ。

本部が減つても協力コミュニティを使えば、それくらいは余裕のはずだ。少なくともサラ姉さんはそれをしようとしていたはずだ。

「お、金髪が悪魔と当たったな」

「女悪魔と久遠さんが相対しました」

遠見の恩恵で見物していたが、序盤としてはまあまあの上がりじゃないだろうか。

「幼女は——なんかこっち見てない？」

「見てるところか向かってきてますね」

面倒くさいなあ。ユーちゃんはなんかやる気になつてて逃げる雰囲気じゃないし。

「逃げなかつたの？」

「逃げてもいいなら逃げるけど——俺を参加者から外してくれよ」

「ダメよ。あなたのコミュニティを傘下にできたら私の目的に近づくもの」

あの小娘何か吹き込んだみたいだなあ。

後でお仕置きが必要かな。

「ユーちゃんは逃げな。ユーちゃんじゃそいつの死の恩恵をどうにもできないでしょ」
「しかし！」

「その言い草だと私がどんな存在かわかっているようね？」

「逆になんでわからないと思った？」

「悪いけどここであなたを潰しておかないとゲームに負けるからね。そもそも早めにいなくなると思っていたのに誤算だったわ」

高評価だな。というより俺を過大評価しすぎているような気がする。

こいつが俺の事を詳しいというより入れ知恵した奴の認識がそうなっているというのが正しいだろう。

「まったく。俺も適当に外で高みの見物するつもりだったんだけどねえ。お前が俺の子分になるならいい落としどころを見つければ？」

「私の目的は知らないわよね？」

「復讐ってことぐらいしか知らん」

「そう。でも私は、いえ私達は私達の手で復讐しなければならぬのよ。それは総体としての意思よ」

「ふーん。ユーちゃん邪魔」

警戒しているユーちゃんは俺の動きを止められずにそのまま後ろへと放り投げられ

る。

ありや完全に虚を突かれたな。

もう少し考えろよ。

逃げろって言うてんのに逃げないから俺が悪者みたいじゃん。

「あらいいの？ 護衛がなくなつたみたいだけど」

「さつきも言つたけど邪魔だつたからな。それにここでお前とやり合つとかないと下手な誤解生じるし」

「まさか自分が死なないでも？」

隠す気はないのか霊格を解放気味の幼女に俺は当然のことを言う。

「んなわけないだろう。俺はそこらへんに居るようなか弱くて、愚かで、無力なただの間だぜ？ 自信があるのは生き残るための奇策ぐらいだ」

「最終勧告よ。私の下に着く気はない？」

「生憎、修羅神仏の下には着きたくないもので」

「ならいいわ。——死になさい」

そして黒い風が幼女から巻き起こり、俺は黒い風に包まれた。

お調子者は悪ふざけする

sideレテイシア

その光景を見てしまったのは必然というより偶然であった。

十六夜との役割分担でフリフリの洋服の少女と陶器で作った人形のような巨人を相手にすることになった私は、苦戦する振りでもして二人を足止めしつつ情報を引き出すつもりだった。

魔王との戦いでは些細な情報でも有益であるし、自身の強さに自信があつたのも理由だ。

だが、どこか別の事に気がついた少女の視線を追ったことで、隙ができ不気味な黒い風で意識を薄れさせられてしまった。

「シュトロムその子の足止めをお願い」

「BRUUUUUUUM!!」

シュトロムと呼ばれた巨兵に吹き飛ばされてしまった。

幸い誰もいない屋根に打ち付けられたが大したダメージではない問題なのは

「く、油断した」

どうやら最近の平穩に少し平和ボケをしていたらしい。

そうでなければ例えギフトを奪われて弱体していようとも、あのような奇襲をまともに受けることはなかった。

しかし、反省はしても後悔はしない。

事実は事実として受け止めなければ、魔王との戦いでは命を落としかねない。

(こいつはシュトロム——『嵐』か。ならば天災に関する悪魔。先ほどのやり取りからしても下っ端。それもいなくてもいい程度の立場のようだ。ならあまり時間をかけずに倒して、あの少女を追わなくては)

すでに少女を見失ったが別に隠れるつもりはなく、誰かを相手にするなどの目的がある動きであった。

ならば、そこまで時間をかけるのは得策ではない。

早めに追いつき目的の人物の保護、あるいは共闘を行ってあの少女に対応するのが最善。

敵の合流が目的だったとしてその妨害あるいは時間稼ぎが次善。

「どちらにしてもお前程度に時間はかけられないな」

龍の影を使用してシュトロムをバラバラにし、少女の飛び去った方向に向かつて、かつての知人が、昔可愛がっていたгентが先ほどの不気味な黒い風とは比較できないほ

どの靈格ちからのこもった黒い風。先ほどの意識を奪うためならば殺すための攻撃を受けるのを目にしてしまった。

「」

黒い風を受ける直前、гентトは私を見つけて何かを言ったようだったが、その声は聞こえず代わりに自分が声にならない叫び声をあげているのに、自覚することなく赤く染まった視界の中で少女に向けて本気で槍を叩きこんだ。

「もしかして大事な人だった？だとしたら謝るわ殺してごめんなさいね」

「——！」

本気で叩き込んだ槍が効いてない事にも驚いたが、さらに驚くべきことが起きていた。

「別に謝る必要ないんじゃないか？死んでないし」

「な!?!」

振り返って余裕の表情をしていた少女が本気で驚いたように声の方向を向き驚愕する。

「あなた殺したはず?!」

「死の恩恵つてのは強力で凶悪だ。しかし、呪いに身代わりがあるように無効化できないくはない。もつとも俺みたいに死の穢れを纏って無効化するなんて真似はできないだ

ろうがねえ」

人のシルエツトが見えないような黒い靄に包まれたそれはまるで何でもなしのように話していた。

「つくづく斜め上にいくな。それも死の恩恵だろうに」

「死で死を相克する。俺みたいな嫌われ者には死神対策というか必殺対策は必須でねえ。それよりレティシア離れな。主役の登場だ」

多少、冷静になった私はその言葉に従うわけでもなかったが一旦距離を取り構え直した。

そこに火龍の息吹が彼を襲う。

「遅かったじゃないかサンドラちゃん。さらつと俺が敵認定されてるのが悲しいぜ」

大げさにそれを避けたгентトは余裕そうにサンドラへ声をかける。

「その声……гентトさんですか!?!それは彼女の仕業で?」

状況を把握できてない様子のサンドラだが、確かに今の見た目のгентトはどう見てもやばい存在だ。

しかし、いつまであの靄を纏っているんだ?

記憶にあるгентトなら「鬱陶しい」とか言って解除しそうなものだが。

「いや自業自得」

「ハーメルンの魔王！あなたを——え？自業自得？」

「一瞬で殺す私の攻撃を防いで、勝手にああなったから自業自得といえれば自業自得ね。

あと私は”ブラック・パーチャ黒死斑の魔王”よ」

「……二十四代目”火龍”サンドラ」

とりあえずゲントのことは脇に置いておくことにしたのか名乗りを上げるサンドラ。

「”黄昏”のゲントだ。早速だけど魔王ちゃんにサンドラちゃん。戦いなんかやめて

デートしない？」

しかし、ゲントはやはり空気を読まなかった。

「ゲントさん今はそれどころじゃ……」

「あなたふざけてるのかしら？」

「デートなら後で私がしてやるから少し静かにしてろ」

「わーい。全方位から厳しい意見だぜ。でもふざけてはいないぜ？」

顔は見えないが立ち振る舞いからわかる。

こいつは確実にふざけている。

しかも確信的に何かを狙ってふざけているようだ。

そしてそれは碌でもないと言言できる。

「二人ともうちに来れば俺が得だからな」

「あなたの都合なんて知ったことじゃないわ」

「私も」サラマンドラ「があるので」

「ふられちゃったよ。ざーんねーん」

「ここまでは予定調和のようでそのまま何かを続けようとしたその時

『「審判権限」の発動が受理されました！ これよりギフトゲーム」The PIED PIPER of HAMERUN」は一時中断し、審議決議を執り行います！プレイヤー側、ホスト側は共に交戦を中止し、速やかに交渉テーブルの準備に移行してください！繰り返します——』

「これは少し——どころかかなり予想外かな。中断されたなら俺は去らせて貰うよ。交渉に関わるだけで面倒なことになるし。バイバーイ」

言うだけ言ってさっさと逃げる。その姿はいつも通りのгентだ。

……気のせいかな？

いつもより調子が悪かったような？

ふむ。主殿たちと合流する前に今回のゲームでのあいつの立場だけでも確認しておくか。

s i d e
ゲント

「やばい死ぬ」
幼女三人組と別れて、
誰もいない路地裏に隠れていた。

「大丈夫ですか!？」

「全身——いやそこまでないか。半分くらい腐れ落ちてんに大丈夫だと思ふならあの世への片道切符を用意してやるが」

靄を解除したはいいいけど、長時間使った悪影響で身体のおつちこつちが穢れにやられていた。

「頭と心臓とかには影響はなかったみたいけど。内臓の一割、肉の2割が腐つたな。このまま治すより取り除いてから治した方が消費は少ないかな」

ちようどがん治療のように取り除く、内臓系は下手に切り取ると面倒くさいので治療で治すが、肉は切り取ってから治した方が効果は高いだろう。

「お手伝いします」

「ならユーちゃん。こことここ切り取ってくれ。新鮮な所も含めて」

「……！わ、わかりました!」

怖々と背中中に刃を突き立てるユーちゃんに指示しながら、治療を進めていく。

（うーん。即死は防いでもあの程度の時間でここまでダメージ受けるんだつたらコスパは悪いなあ。薄めて効果がなくなったら意味ないし、やっぱ無理があつたか）

そもそも問答無用で殺すようなものを無理矢理、防衛に使っているのが間違いだったのかもしれない。

まあ、即死防げるっただけで欲しがる奴は欲しがるけれどな。命あつての物种。生きてれば何とかなるっつのは箱庭だからこそその考えかもしれない。

「……ゲントか？」

震えるような声が聞こえたのでそつちを見ると、

「ん？なんだレテイシアか。交渉に行つたんじゃなかったのかよ」

また面倒くさいのに見つかったなあ。

こういう真面目な善人って相手するのが一番面倒くさいのに。

「一応、人払い張っていたんだけどなあ」

「ああ、探し人がゲントでなければ見つけれなかっただろうな」

そういうえば昔、血を吸わせたことあつたなあ。

吸血鬼だからその時の匂いかなんかで俺の場所を特定したのかもしれないな。

人払いはなんとなく近寄りたくないって思わせる程度の効果しかないし。

「あー、偶然じゃないっつてわけね。で、なんかよう？今治療で忙しいんだけど」

「……それは魔王のせいかな？」

切り替えたようだな。

「詳しくは教えないけど俺の即死対策の代償。聞きたいのはそれだけ？」

「いや違う。このゲームでのゲントの立ち位置を確認しておきたくてな。黒ウサギの味方をしてくれるのだろうか？」

希望的観測、いやマイシスターを出すことで味方につけようとしてるのか。

最悪でも中立を維持させたいとかそこらへんかな？

「さつきも言ったけど魔王にもホストにも肩入れしないよ。今回は静観させて貰うつもりだ」

「そうか……。……それ大丈夫なのか？」

「大丈夫じゃないけど？まあストックは減ったが問題はない。あー、リトルシスターには黙っといてくれよ。やさしいあんたは言わないだろうけどな」

「……」

レティシアって俺に対してなんか妙な感情を持つてるっぽいんだよなあ。

流星にそこまでじゃあないだろうけど、一番近いのは俺の事を息子か何かと考えているんじゃないか？

実際にはなんかの罪悪感だと思うが、そうだついでに聞いてくか。

「レティシア。ちよつと聞きたいことがあるんだが」

「……なんだ？」

「大したことじゃなくて悪いが——アジダカーハはどこに居る？」

元ウサギと吸血鬼

sideレテイシア

「知らないー」

反射的にそう返事してしまいましたと思う。

この兄妹にはアジダカーハを倒したと、だから安心していいと教えていたのは他ならぬ自分なのだから。

そして今の動揺がгентトには値千金の情報になると経験則で知っている。

『知らない』ねえ。あの時は倒したって言ってたんだから『知らない』なんて答えは出ないと思うけどなあ？」

「……そうだ。倒したのだから存在しないものの居場所なんて知るわけがない」

「ならなんで答えて動揺した？」

他者の手が必要な怪我が治ったのかお付きの女性を下がらせる。

「……今のお前を見て昔のお前を思い出してな」

ここで気のせいなどというのは逆効果だ。

ならば、奴の思い出したくないであろう過去を利用して奴自身から引かせるべきだろ

う。

そう考えていた。

だが

「昔？レティシアの前で怪我とかしたことなんて……あー、妹の誕生日の。確かにあの時は今とは別ベクトルで血だるまだったな」

「——ッ」

脱いでいた服を着こみながらケラケラ笑うгентトを見て、息を呑む。

гентトにとつて最も忌むべき記憶と地続きであつて、その事はгентトは触れたくもない記憶のほずだ。

それを——なんで笑える？

「あんたは少し勘違いしている。俺だつて成長している——あの時の事は笑い話じゃねえが、俺の生きる指針にはなってるんだからな。いや成長してねえからそれ以外ねえのかもな」

「——!!」

その目を見て理解した。

その目はかつての私と同じ目だった。

自分がどうなつても構わない——その代わり奴だけは許さないという復讐に駆られ

たかつての私と。

だからこそ止めないといけない。

かつての私と違い、今のгентには様々なものが残っているのだから。

「あるだろうгент。お前にはまだ家族も今のコミュニティも——繋がりがまだあるだろう！復讐は何も生まないとは言わない。だが、それを生きる目的するな！お前には持つてるものがあるだろう！」

「……」

いつも表情豊かなгентの顔が完全な無表情になった。

そして何かに気がついたのか何か含むような笑顔になる。

いつもの顔だ。

これはгентなりの処世術だったのかと今更気付く。

内側に踏み込ませないための心理的な壁だ。

その内側にはきつと誰も入れない。

たとえ黒ウサギでも。

いや、黒ウサギへの溺愛さえもポーズか？

考えれば考えるほどドツポに嵌りそうだ。

「そーいえば、あんたも故郷全滅してたんだけ。もつとも俺と違って滅ぼしたのはお

前だけど」

「……そうだな。経験者として言わせてもらう。そんな復讐は何も残らないぞ」

「残らなくていいよ。そして勘違いしてるようだから一つだけ言っておく。俺の行動は妹のためだ——いや違うな。究極的に俺のためになるからやるんだ。どこにも行けない俺がどこかへ到達するためにな。復讐も手段に過ぎない」

……仮面を被り直したのか、いつものгентだ。

初めて会った時と何も変わらないいつものгентだ。

「……復讐をしない選択肢は？」

「それは無い。それは俺にとつて絶対必要な条件だ。知ってしまった以上、俺はもう止まれない。そのための“黄昏”だし、俺の今までの活動だ。もう引き返せねえところまで来てる。だから——再度聞く」

壁際に追い詰められ被さるようにな寄ったгентが言う。

「アジダカーハはどこにいる？」

どこか冷静な部分があるを壁ドンというという使えない雑談を思い出させるが、それ以外は混乱の中にいた。

「私も知らない。私は途中でリタイアしたからな」

なんだろうгентの匂いだ——クラクラする。

思考がまとまらない。

「なんで？赤くなつてんだ？」

壁ドンされると被食者になつたような感じがしてひどく興奮すると聞いていたが、なるほど。これは結構クル。

かつての友で弟子であり敵であり遊び相手である彼にやられると、昔とのギャップでうまく動けなくなる。

昔なら上から見下ろしていたのに今は逆に見降ろされている。

そこには倒錯した感情が——

「ん？あー、もしかして興奮してる？」

「それは……」

「ここは俺の血で酷いことになつてるからなあ。それに中てられたか。目をギラギラさせて今にも嘔みついてきそうだな。嘔むか？」

服をはだけさせ

その首がよく見えるように見せ

「ああ」

その言葉に——自分の言葉に冷や水を浴びせられたように血の気が引く。

——今、私は何を考えていた？

「……そうだ!? これはお前の血の匂いに酔っただけだ!」

誤魔化すように叫ぶ。

顔をまともに見ることが出来ない。

血に酔ったとはいえ、何をしようとしていた?

「まあ、そういう事にしといてやるか」

「すまないが少し頭を冷やさせてくれ」

「ま、知りたいこと知らないんならいいか」

ふらふらとその場を去る。

様々な感情が——思考が“ノーネーム”に戻る足取りを重くする。

しばらくは黒ウサギと顔を合わせられそうにない。

sideгент

レテイシアは本当に知らなかったのかな？

それとも知らない振りをしてただけなのだろうか。

やつぱり一筋縄ではいかないなあ。

復讐を使って過去の自分と重ね合わせて冷静さを奪い、食人種御用達の血酒ワインで酔わせ
て判断力を奪うように仕向けたのうまく躲されちまったなあ。

俺の血で作った血酒ワインだから、俺の血とは匂いが変わらず自然にその揮発した血酒ワインで理
性を削って喋らせる——という即興の策で口を開かせるつもりだったのだが、流石に経
験豊富なレテイシアには効かなかったようだ。

俺を噛めばそれを口実にうちに引きずり込むつもりだったが、うまくはいかないよう
だ。

それでも” とは疎遠になりやすい理由を作れたから良しとしようか。

「相変わらずえげつないですね」

そう言いながら肩に乗つかるのはラプラスの小悪魔端本であるラプ子だ。

見たところ司令塔のようだから、何か話したいことでもあるのだろうか？

「なんだ今回は不干涉じゃないのか？あとラプ子、別にえげつなくねえぞ。俺は善人

じゃねえしな」

「悪人でもないですよ？ 観察が今回の任務なので」

こいつらから見て俺はどう思われてるんだ？

どんな事件起こしても妙に俺に甘い気がする。

「観察ねえ？」

“サラマンドラ” がどう転ぶかほかの階層支配者も気にしているって所か。

北側は荒れてるだけあつて階層支配者ごとの縄張りがあり、お互いがお互いを敵視とまではいわないが警戒する勢力均衡で平和を維持している面がある。戦国時代の大名とかヤ○ザみたくないものだど理解しておけばいい。

ここで転ぶなら“サラマンドラ”の縄張りを削つておこうって考えなのだろう。

俺でもそうするし、誰だってそうする。

力がなきや何も守れないんだからおかしなことではない。

「久しぶりに見つけたと思つたらナンパしているとは、気まずい思いをしましたよ」

「あの光景はナンパの一言で済ましていいものじゃねえけどなあ」

血まみれで血だるまでナンパとは言い難い。もつとも引き抜きしかけてたことを考えるとあながち間違つてはいないとは思うが。

「やつぱりロリがいいんですか？」

「ちよい待てお前はなにか勘違いしてないか」

「男の子ですし女に興味を持つのはわかりますが魔王がいるんです自重してください。
最悪私が相手になりますから」

「おい待て2頭身。せめて人型になってから言え」

相手になるってなんだ。というか生殖機能あるのか小悪魔に。

「私では不満だ?!」

「不満ですねえ!サイズ考えろアホ!」

「私が代わりにお相手します!」

「ややこしくなるからユーちゃんは黙ってる!」

ぜえぜえと肩で息をする。

なんでシリアス空気が5分も持たねえんだよ!

「チェリーなのは知ってますし、ヘタレなのは当然ですか」

「え?俺結構経験あるぞ?」

「え?」

「え?」

「……まさか妹さんと!?!」

「それはねえよ」

「ごめんなさい」

「わかればいいんだよ」

俺のマジ切れに気がついたのか、比較的素直に謝るラプ子。

素直でよろしい。

「話を戻しますが」

「お前が脱線させたよね？」

「戻しますが——妹さんには先ほどの事は筒抜けなのでは？」

筒抜け？

何言ってるんだこいつ？

妹にばれないようにこのタイミングで——ああ、そういうことか。

ジャッジマスター

「審判権限の事か？ならそうでもねえよ。あれはルール違反とかそういうのには引っかけやすいがそうでないなら引っかけにくい。権限上、ゲームフィールドすべてを把握できるが、だからと言ってそれすべての動きを把握するなんて熟練でも難しい——というか不可能だ。風の流れから足元のアリまですべて把握できるわけがない。どうしても注目したいことに意識が引つ張られる。それに俺は俺を意識させないことを心得てるからな。最初っから最後まで俺を監視するつもりでない限り俺の動向を見つけれ

けるのは不可能だ」

全知の悪魔ならすべてを把握できるかもしれないがな。熟練のウサギですら難しいことをあの未熟なマイシスターができるわけがない。

出来るのであれば、交渉なんて今一番やっちゃいけないことをするはずがないしな。

「それに今は交渉中だ。権限は制限されて把握できるのは良くてお互いのホストの居場所くらいだな」

「元ウサギの経験というわけですか。そう聞くと結構不便ですね」

「実際に不便なんだよ。なんとなく使えるから便利に思えるけどウサギのスペックじゃ使いこなせないし、使いこなしても中立でないといけないから意味がない。ゲームに参加するならかなり制限されるし多少便利なレベルでしかない」

便利といえば便利だが、秩序側に肩入れするならあまり便利とは言えない。私利私欲を貪れないから使い勝手が悪いし。

元々、不利な情勢を中立に戻すまでの恩恵だから当然といえば当然だが。

「不便だと思ってるのあなただけでは？」

「否定はしない」

さて、やっちゃあいけない中断したりトルシスターは何か策があるのかな？

ゲーム中断中

sideゲーム

ゲームが中断されたのにも関わらずだいちちゃんが帰ってこないのので気になって、交渉内容を聞きに戻ってくると想像以上に想定外の結果になっていた。

「いひやいれふ！おひいひやまー！」

「あつはつは！何言ってるんだかわからないな〜」

そう高笑いしながらリトルシスターのほっぺたを引っ張りながら説教する。

主力が集まっている前だがそんな事は気にしない。

よく見るとレティシアジャッジメントがいらないが気まずいのかね？

「昔、言ったよなあ？ジャッジメント審判権限でゲームを中断するなら魔王の種類ぐらい把握してからやれって言っただろうが。まさか確認もせずに中断するとは思わなかったわ」

こつち側の組織に医者や呪術師（解呪）ができる人材がいるか最低でも確認しろって言つとしたのになあ。まさか忘れてるとは。

「でひゅわー！」

「ん？言い訳か？いいだろう聞いてやる」

うわー。という目で（一部羨ましそうに）こつちを見ているギャラリーを無視して、偉そうに座ってリトルシスターの反論を聞いてやろうという姿勢を貫く。

周りの評価が落ちているようだがいつものことなので無視する。

「お兄様は審判権限ジャッジマスターを使う時の注意で確かに魔王の種類について確認するように言いました。しかし、詰まされることなんかあまり無いから不利だと感じたらすぐに一時中断させるのも手だと」

「それはこつちの陣営に優れた指導者ゲームメイカーがいるときだ。今回はその金髪とチビが機転を利かせて、尚且つ魔王が慣れてなかったから大丈夫だっただけで点数つけるなら40点といった所だ。もちろん百点満点中な」

さらつと「サラマンドラ」を貶めながら、マイシスターに気持ち甘めの採点を告げるとしおれたように俯く。チラツチラツとこつちを盗み見るのは自覚はないようだがかなりあざとい。

基準を100点として主な加減点は「確認せずのゲーム中断（-60点）」「主力を攫われていても気がつかない（-10点）」「機転を利かせて詰みを回避（+20点）」「明確な時間制限タイムリミットの決定（-10点）」といった所か。

流石の俺でもこれは褒められない。

一般の巻き込まれたプレイヤーとして見るなら十分な評価だが、対魔王を謳っている

コミュニケーションであればこの点数は論外だ。最低でも80点は欲しい所だ。

強者に保護されてた弊害か最悪への想定がかなり甘い。……7割くらい俺の責任のような気がするがたぶん気のせいだろう。

「ふん！ 貴様が役立たずなのを柵に置いて説教とはな！」

「生憎、〃サラマンドラ〃と違って魔王の傘下に入っても俺は困らないからな」

「なんだと？ やはり貴様——！」

何か勘違いしたのか激昂しているマンドラの言葉を遮って続ける。

「そりゃあ俺は下から魔王を操って好き勝手出来るからな。何度かそれやって魔王を破滅させてるし」

俺の持つてる知識や財産に縁は俺の自由意思がないと意味がなものだ。

負けた時にみっともなく命乞いしたり、魔王に情報を売ったりして勘違いした魔王が俺を都合よく使おうとして勝手に破滅した。

ちなみに俺は何もしていない。

ただ断片的に手に入れた情報を提示して、信頼できると本当の事を言ったら偶然そこに強者がいたり、たまたま天敵が通り掛かったりしただけである。

俺は何もやってないし、嘘もついていない。

どんな手を使ってでも情報を入手しろというから計画を提供することを条件に情報

を入手しただけだ。

破滅した魔王は俺を恨んでるようでもないし、俺は悪くないQ. E. D.

「……最悪だな貴様」

「あんまりほめるな照れる」

さて、だいちゃんはどこへ行つたんだ？

side 逆廻十六夜

解くべき謎も解き終え、各々が明日のゲームに向けて最後の休息や調整を行っているであろう夜。

明日は満月になるだろうなと考えながら、最後まで手出しする気がないと言っていたお兄さんを動かすべく探していた。

お嬢様を気にしていたあいつの仲間……だいちゃんだったか？ そいつがいないのとお嬢様が行方不明なのは無関係とは思えねえ。あの笛吹き女ラッが攫テつたつて言っていたからあの木偶の棒が攫つたとは思わねえが、お嬢様と一緒にあるいは居場所を把握している可能性がある。

ならば、木偶の棒の居場所⇨お嬢様の居場所⇨魔王の居場所で結ばれる可能性が高い。

それを知ることが出来れば明日のゲームは初動で一撃噛まして有利に動けるはずだ。そう考えて黒ウサギを説教してた日から聞こうとしているが不自然なほど自然に出会うことが出来ない。

部屋を訪ねても外出中だったり、いるはずの場所に行っても入れ違ったりと妙に間が悪い。

これは俺だけじゃなく黒ウサギや“サラマンドラ”の連中も同じだというのだから明らかにわざと外しているのだろう。

普通にやつても会えないのは分かったのであえて最も高い塔の上から搜索する。

すれ違っている目撃証言は腐るほどあるのだから近くにいるのは間違いないあとはどう見つけるかだけだ。

「あそこか」

目星を付けたらあまり騒ぎにならないように移動する。

いつもなら気にせず派手にかますが、呪いで苦しんでる奴に余計な負担を与えるのも悪いしな。

そこそこの広さの中庭に入るとそこで舞っていたお兄さんがいた。

「ヤハハハ。踊っているとは予想外だぜ」

「これは踊りじゃなくて型なんだけどねえ」

そういうながら流れるように踊る動きを見ると確かに武術の型のような動きがちらほら見えるが見たことのないような型の方が多い。

やはりこいつは侮れねえ。

こいつは弱い。

少なくとも俺よりは確実に弱い。下手すれば春日部より弱い。

だが、俺がこいつ戦った場合、瞬殺できるともいえるし、瞬殺されるともいえる。またまた引き分けるかもしれないし、そもそも勝負にならない可能性もある。

単純に強いというより毒を持たないはずの蛇が毒を持っていたかのような厄介さなんだ。

敵に回すのもおもしろそうだが、どんな被害が出るのか想像も出来ねえ。

「ちよつと聞きたいことがある」

「よく見つけられたねえ。参考までにどう探したんだい？」

一段落着いたのか動きを止めてこちらをみるお兄さんは相変わらず興味なさげにこつちを値踏みしている。

気に食わねえな。

「単純にいろんな方向から見て死角になつてる場所を探しただけだ。ここはどの方向から見ても死角だったからな」

「ここは元々、『サラマンドラ』の初代頭首が嫁との逢引に使った場所だな？自力で見つけ出さないとたどり着けないようになってるんだ。そのせいで下っ端は知ってるの上は知らないという奇妙な状態になってるのさ。変に襲撃されないから勝手に使わせてもらっている」

「確かにいい場所だな」

「それで何の用？生憎、君と遊ぶ気はないんだけど」

「さっきの流れる動きを見たせいで軽く戦闘態勢に移行できるように強張っていたよ。うだ。言われるまで気づかなかったとはいえ、少々やりにくい。」

「お前とやり合うのは今度にするわ」

「敵対しない限りあり得ないけどな」

「黒ウサギがいるからか？」

「それは関係ないな。〃〃の時だつて敵対気味だつたし」

「俺が一方的に嫌つてただけだ。と呟くのを見る限り、最悪の場合は黒ウサギを敵に回すこともあり得そう。余程の事がない限りそれはありえなそうだが。」

「単刀直入に言う。今回のゲームで味方してくれないか？報酬は黒ウサギ一日貸出権で」

「引き受けよ——いや待て、やっぱ無理」

チイツ。行けると思つたが寸前で止まりやがったか。

「俺は手を貸してもいいと思つてるがだいちゃん完全に観に入つてね。邪魔したら面倒くさいしややこしいことになるから今回は手を出す気はないね」

「お嬢様に関係することか」

「……意外と察しがいいな。そうだ。だいちゃんはある血統を持つ奴を見定める定を背負っているからな。下手な手出しも協力もややこしいことになるから今回のゲームは日和見させて貰うよ。だいちゃんもあのお嬢ちゃんが一定以上まで成長するまで手出しも協力も妨害もしないだろうからほつといていいぞ」

ある血統ねえ。

お嬢様は財閥の家系とは言つてたが、それと関係するのか？金持ちに関係する伝承？権力者に関係する伝承？頭の中で検索をかけても絞り込むことが出来ない。

「言つとくけど正直あの子は試練を受けるかどうか微妙だと思つぞ？直系でもないし、使命を背負つてるわけでもないしな。だいちゃんのお眼鏡に適わない限り」

だいちゃん？

古くから言い伝えがあつて、身体が大きいなどの条件が当てはまり、呼び名でだいがつく伝承といえよ。

「……だいちゃんつて、だいだらほつちか？」

「極東の巨人。原初の歴史で星地の守護者にして役割を奪われたもの。最もそこら辺の眞実は本人以外知らないだろうけどね」

「星地の守護者だと？なんでそんな奴がお嬢様に？」

「さあね？だいちちゃんには重要な理由があるんじゃない？俺は知らないけど」

「じゃあねと言つて立ち去るお兄さんを見送りかけて、慌てて追いかけるがすでに遅く。すぐに見失つてしまった。」

「何があつても対処できるように頭の隅にだけ入れておくか」

そう心に決め明日を待つことにする。

すべては明日で決まる。

side 久遠飛鳥

(入口にようやくやく到達したか)

「入口？」

(だが、まだ足りない)

「足りない？いえこの声あなたなの？」

(**を守るにはまだ足りない)

「何を守るつて言ったの？聞きとれないわ」

(**を守る使命を背負った血脈よ)

「だから何を守るか聞こえないわ！」

(資格と力がないからだ)

「資格と、力？ デイーンでは足りないというの？」

(長には群れが必要だ。使命を背負わないというのなら群れの長になるべきではない)

「長？ そんなものに興味はないわ！ 私はみんなを守る力が欲しい」

(守護者の血からは逃れられぬか)

「だからなによ守護者って！」

(**の守護者の血脈よ。研鑽せよ。**を守護する力を得よ)

「うるさいわね。私はこれからみんなを守りに行くから邪魔しないでくださる？」

(……)

「消えた？ いやいなくなったのね。なんなのあいつは？」

「……それよりも時間をかけ過ぎたわ。行くわよデイーン！」

「DEEEEEEEEEEEEEEEEEEN!!!」

祝勝会

side ゲント

想定内といえれば想定内。予想外といえれば予想外。そんな“サラマンドラ”が用意したサンドラが階層支配者になるための魔王襲来は終結した。

今回の結果で一番損したのは魔王だ。

なぜなら魔王のギフトゲームでは比較的稀な完全クリアという形で敗北してしまっただからだ。死んだら終わりどころか死んでも蘇らせて隷属させる。敗者に厳しく勝者に優しい箱庭のルールだ。そこは諦めてもらおう。確実に“ に恩恵として渡される前に白夜叉の玩具にされるだろうが着せ替え遊びで済むだけマシなんじゃないだろうか？俺は絶対に嫌だけど。

逆に一番得したのが“

” だろう。魔王退治を請負うコミュニティとして魔

王のギフトゲームを完全クリアは拍付けにふさわしい華々しいスタートだろう。オマケに先述のギフトが貰えることが確定しているんだ。名も顔も売れてそこら辺の敗者との差が出来て、一端ののコミュニティとして扱われるのだから笑いが止まらないだろう。

「サラマンドラ」は及第点と言った所か。俺から見れば赤点だが、サンドラが階層支配者になるための最低限の拍付けはできたと言った所か。理想はサンドラが魔王ちゃん（ペストだっけ？）を討つて実力を示すのが良かったのだろうが、
 “に美味しい所をほぼ取られているのでサンドラを認めない派閥が大きくなったので
 今後が不安な所だ。

というわけで

「ちわー。飲もうぜマンドラー」

「何しに来た貴様は!？」

「祝勝会に顔出さない可哀想な奴のために上等な酒かつぱらつてきたんだよ。感謝しろ
 ゴラ」

執務室にノック無しで入り込み何かを覚悟したような顔をしているマンドラへいつも通りにおちよくることにする。

「貴様と違って仕事がある」

「ん？うちのコミュニティに罪を擦り付ける算段か？さつき」

“の小僧に見抜

かれたのにな？」

「……見ていたのか？」

「あの小僧洞察力高いからねー。この部屋から出てくるのを見れば大体予想できるわ」

適当なことを言いながら勝手に持ってきた杯に酒を注ぎ、片方をマンドラに押し付ける。

「で？ 結局のところ魔王を用意したのはサンドラ以外の“サラマンドラ”でFA？」

あえて“サラマンドラ”にとつての真実を聞いてみると諦めたように杯を一気に飲み干す。

「そこまでわかっているなら聞く必要はないだろう」

ふーん。やっぱり売りつけた連中の真意には気付いてないみたいだな。あれだけ露骨にサンドラではなく白夜又狙いだった魔王ちゃんの行動を考えたら少しは違和感を感じてもいいと思うんだけどねえ。

「実際、今回の件で俺が黒幕じゃないかって一部のアホが疑ってるし、お前の目論見は一応成功してるよ。残念ながら大多数は気がついてすらいらないようだがな」

「ふん。日頃の行いが悪いから疑われるんだ」

「俺が悪い行いをした記憶はねえけどな」

善い行いをした記憶もないけどな。俺がやりたいことをやり通したただけだし、俺だから善い悪いで判断されたくはない。

「神珍鉄の人形は」

“に渡ったし、目的のギフトも”

“に授けられる”

予定だし、真面目に今回のお祭りは失敗するのが俺の評価なんだけれども」

「……何が言いたい」

「なんでサンドラなんだ？最終的にサンドラを頭首にするにしても一時的にお前が中継ぎした方がマシだと思うんだが」

真面目にこれかわからないのだ。

今までサンドラに頭首としての教育をしていなかったのに急に頭首にするなど正気の沙汰ではない。

操り人形にするにしても“サラマンドラ”のためだと考えて自分の意思で従うであろうマンドラよりサンドラを頭首にする理由がない。

「能力のない俺が組織を固めたらそれこそ“サラマンドラ”は細々とした零細コミュニケーションにまで没落するだろう。そうなればいくらサンドラの才能があろうが巻き返しは不可能だ」

「自己評価低いなお前」

悪くても中堅程度に落ちるぐらいだろうと思うが、相変わらず妙に自己評価が低いなこいつ。

「そんなお前に商談だ」

「……なんだ？」

「サラを帰らせようか？」

「なんだと!？」

急に立ち上がったせいで書類が崩れたが気にする様子はない。

「なぜ貴様が姉上を!？貴様まさか!？」

「……何言ってるんだ手前?」

俺のドン引きを見て勘違いしていたのが解けたのか、罰が悪そうに杯を飲み干す。

「単純さ。今、南側にいるサラを自主的に帰らせようかつてさ」

「南側?そもそもなぜ姉上の居場所を貴様が知っている?」

「俺だから」

そう言いながら一々注ぐのが面倒になったので普通に直接呑む。

「あー、うまい」

「出来るぜ?ちよーつと事実を針小棒大にして話せばあいつみたいなタイプは絶対引つ

かかる」

「そうか」

何かに葛藤するマンドラをほつといて黙々と酒を呑み続ける。

「……」

呑み続ける。

「……………」

呑み続ける。

呑み続ける。

「断る」

「悩むの長いわ」

樽で持ってきたのに全部呑み干しちゃったよおい。

「つーか、ええのか？ 恐らく最善の手だし、最後の機会だぞ？」

「そうだろうな。だが、コミュニティを棄てた者に縋り頼ったら本当に」サラマンドラ

「は終わるだろう」

「そうかねえ？」

そこは価値観の違いだから考えすぎだと思うが、そう考えるなら俺は何も言わないベ
きだろう。

「考えがあるならなんも言わねえよ。そんじやな」

「どこへ行く？」

「宴会だよ。酒が切れた」

恐らく、「サラマンドラ」は内乱かなんかで潰れると思うがそれまで適当に眺めると

するか。

他人の不幸は最高の肴だしな。

扉に近づいてくる気配を正確に把握した上で、あえて聞く事にする。

「あ、そうだ。サンドラちゃんにあの事をちゃんと言わねえのか？」

扉の前で気配が固まる。

予想を裏切らないなあ。

「これはサンドラ以外の“サラマンドラ”の罪だ。サンドラに背負わせるわけにはいかない」

「ひゅー。カツコイー。サンドラちゃんだけ仲間外れにしてんのにそんなに格好良く言うなんて才能だぜ」

「おちよくつとるのか？」

「別に？五人の死者は戦死ではなく自業自得で死んだつてのは救いがねえとは思うけどな」

自分で利用しようとした魔王に殺されるとか笑い話にもならないくらい哀れなことだと思う。

俺も人の事はいえないか。

「自業自得ではない。“サラマンドラ”の名を守るための汚名覚悟の戦死だ」

走り去る足音を聞きながら意味もなくなった問いを声に乗せる。

「汚名覚悟ならサンドラちゃんに話してきっちり裁かれるよ」

「……………折を見て話す」

「いつだよそれ？」

「サンドラに汚名を被せるわけにはいかん。それにサンドラは清濁併せ持つような器量は今のところはない。それがあると判断したらだ」

「手前にそんな見極め出来んの？」

「出来る出来ないではない。やらなければならぬのだ！弱体化した“サラマンドラ”を立て直すためにも他の“階層支配者《フロアマスター》”や魔王、それに父上にも好き勝手させるわけにはいかない！それがコミュニティひいてはサンドラを守ることに繋がるはずだ！」

んなわけねえだろ。

こいつが求めている強いコミュニティの再来と妹を守ることは必ずしも一致しない。

特に罪の共有はマイナス要素しかないが頭首以外が共有して尚且つ共有者の中に優れた指導者（この場合、サンドラよりも頭首を継承すると思われるいたマンドラ）がいた場合、頭首を蔑ろにしかねない。

内憂外患の手本みたいな今のサラマンドラがサンドラの一歩の敵のようなものだ。

「ふーん。じゃあ頑張れ。そして後悔で嘆け」

「舐めるな。『サラマンドラ』はここから蘇るのだ」

「期待しないで見物しとくわ」

後ろ手を振って部屋を出る。

さて、宴会で暇つぶししてから帰るか。

side 黒ウサギ

祝勝会で大騒ぎしている皆様の相手に疲れが回ってきた頃合い。

「はい注目ー！これより魔王討伐の功労者に信賞必罰のギフト授与式を始めます。ちなみに俺の偏見と独断で決めましたんで反対意見は却下します」

「いきなり何をはいめるんじやお主!」

席をはずしていたお兄様がいつのまにか壇上で司会進行していた。

いや本当に何してるんですか!?!最初に論功行賞は行いましたよ!?!

「ちなみにこれは俺の独断なので階層支配者フロアマスターのあれとは関係ないんで在庫処——遠慮なく受け取ってくれ」

「在庫処分って言いかけたじやろ?」

喧々囂々の怒声を受けのがしつつ、次々いくつかのコミュニケーションを呼び出しお兄様のコミュニケーションの方が壇上に無理矢理上げる。

なんであんなに無駄に無駄のない動きなのが気になります。

「——というわけでステンドグラス探しに貢献した君達にはこの(繁殖させ過ぎた)金の卵を産むガチョウを各一匹ずつ進呈します。ちなみに割と高値で売れます」

「いやらしいからそのセリフは言うな!」

「さつきからうるせえ白いのがいますが気にせず進めるぞー」

「おい!」

さつきから白夜叉様をガン無視してますが何かあったのでしょうか?

それと無視されて若干泣いているような……。

「次は敵幹部を討った」 “十六夜くと飛鳥ちゃんです。おら、さつきと壇上

上がれや」

「ようやくか」

「待たせるわね」

お二方が意気揚々と壇上に上がります。

しかし、お二人を送り出す耀さんが小さくため息を吐いたのが耳に入りました。

今回は呪いによって動けなかったのですし、差をつけられたと感じているのでしょう

か？

しかし、耀さんの恩恵ならすぐに追いつくことも可能です。

「お二人さんは同じコミュニティなので、この空樹の苗を進呈します」

「なんだこれ？」

「これ一本で100m四方の即死クラスの毒霧すら浄化できるレアものだ。あんまり流通してないんだよねこれ」

あの木は木ごとに生産する空気が違うため、数は多いのに使えるのがほとんど流通しないという木ですね。

お兄様の事ですし、使える恩恵のはずです。

「それ以外で何か使えるのかしら？」

「農地の近くにおいてたら収穫が良くなるくらいだ。なぜかは知らん」

「空気中に肥料になりうる何かを発生させてんのか？」

「いや、だから知らんて」

そのままお二人を残したまま進めるようです。

「次に“サラマンドラ”のサンドラと“

“の黒ウサギに先ほどのお二人を加えて魔王討伐の主力メンバーです。ついでに謎ときに尽力した”

“のジン君

で最後です。おら壇上に上がれ」

ついに私の番ですか。

「にはまとめてこの卵を進呈します」

そう言つて取り出したのは……特に珍しくもなさそうな卵です。

「гент！どこでそれを手に入れた!？」

「本人に貰つた。つか、知り合いだったのお前?」

「昔に少しな」

本人?それに白夜叉様の焦りようから見てもないものでは?

「お兄様?この卵は?」

「見てわからんか?不死鳥の卵だ暖炉にでも放り込んで火を絶やさず燃やせば孵るぞ」

……へ?」

「不死鳥の卵ですか!箱庭の超希少種ですよ!」

「食つたらうまそうだな」

「ダメですよ!」

「旨すぎて卵を乱獲されて絶滅危惧種なんだ。味は保証する」

「保障するな!小僧!食べてはいかんぞ!」

あまりのお宝に会場が騒めいています。

こんなもの本当にどうすればいいんでしょうか?責任持てませんよ!

「不死鳥って死なない鳥よね？それって食べられるの？」

「鳥は死んだら即灰になるから食えないが卵は茹でると食えるんだ。割ったら腐るけどな」

「食べていいものではない！特性から繁殖力が低い上に乱獲されたのだ！階層支配者として見逃せぬわ！」

「あんま怒ると禿げるぞ」

「禿げぬわ！」

「これどうしましょう？」

「そうだ白夜叉様に——」

「これは責任持って“ノーネーム”で孵す！」

「十六夜さん!？」

「落ち着け黒ウサギ。これは孵した方が得だ」

「ほう？その心は？」

あ、ダメです。お兄様が何か企んでいます。

「不死鳥の涙には癒しの力があると聞く。それはどんな怪我をも癒せるそうじゃないか」

「流石に詳しいね。じゃあ任せるよ1年は火を絶やしちやダメだよ？」

「・・・一年で手に入るなら安いもんだな」

「そうかもね。それじゃあ次は“サラマンドラ”にはこれを」

そう言つて取り出したのは・・・槍？

「サンドラちゃんにはこのロンギヌスの槍をプレゼント」

「え？ありがとうございます？」

「待て待て待て待て！なぜお主が持つてる!?それは嚴重に封印されてるはずじゃぞ!?サンドラを殺す気か!?!」

「どっかの神の子を相手にポーカードで巻きあげた。別に死なねえよ呪いなんてねえし」

そういう問題じゃないと思います。

「ホントに何しとるんじゃないやお主は!?!それに呪いではなく神群に目をつけられるのじゃぞ!?!」

「大丈夫大丈夫。俺は数年持つてたけど本拠地を7回焼き払われただけで済んだぞ」

「大丈夫じゃないわ!?!何度か中層で神群が動いた形跡があると思つたらお主のせいかわ!?!」

「失敬な。きちんとゲームのルールに乗っ取つて勝ち取つたものだ。焼き払われたのは

別件が理由だ」

「別件って何したんですか？」

「ちよつとクイーンを怒らせて」

「なんで生きとるんじやお主？」

「俺だから」

物凄い説得力です。確かにお兄様ならどんな時でも逃げ延びてそうですが、あのクイーンを怒らせて生き延びてることに驚きです。

「ならレプリカの方で我慢しとけ。本物は白BBAがうるせえし」

「誰がじゃ！」

「あ、結構使いやすいですね」

「良かったな。本物はゴルゴダにでもここに眠るとか書いて指しとくか」

「お主、いつか死ぬぞ」

「知ってる」

大丈夫でしょうかお兄様は逆恨みを買いやすいみたいですし心配です・・・。

「ではギフト授与を終わります。なお今回の授与と祝勝会の費用のは今回マジで役立たずだった何のためにいたのかわからない白夜叉様に請求します。皆さんお疲れさまでした！」

「「お疲れさまでした！」」

「え？」

そう……巨龍召喚

帰還

side ゲント

5 桁に2、6 桁に14、7 桁に16の外門を地域支配者として旗を掲げる“黄昏”の本拠地を知っているものは少ない。

というか“黄昏”は俺個人だけのコミュニティであり、一時的にメンバーが増えるもののすぐに独立したコミュニティとして同盟・傘下にする群体コミュニティだ。

“黄昏”直轄の土地はあっても管理等は丸投げしているため、俺が死んだりどつかに隷属する破目になったら即座に縁切りして“黄昏”として残るのは俺の身柄と手元の恩恵だけとなるように仕組まれている。

何度も隷属してたりするのに何で復活しているかといえば、俺個人が様々な伝手を持っているため、独立したら仕事の幹旋が減り落ちぶれていたり、“黄昏”のネームバリューがなくなつたことで他のコミュニティに食い物にされたり、そもそもそつちの方が儲かるという身も蓋もない理由で戻ってくるものがある。

そして“黄昏”とは表向き関係ないコミュニティから間借りした場所を本拠として

いる。

元々本拠あつたのがいろんな襲撃のせいで潰されることが多々あり、もうこれ本拠持たない方がよくね?となつてこんな事になつたという経緯がある。

完全に扱いが野良魔王だが、俺が何をしたというんだ。

せいぜい、神群から恩恵を巻き上げたり、襲撃したりおちよくつたりしただけなのに。

閑話休題。

「おいてけえ〜おいてけえ〜」

「これお土産な。みんなで食えや」

「ありがたや〜」

堀から聞こえる置いてけ堀の声にお土産を投げ入れながら今の本拠である敷地内へ入る。

「お帰りなさいませご主人様」

「あれ?シリユウ?なんでこつちに?南で密猟者狩り任せてたと思うけど」

確か幻獣の一部が恩恵目当てで乱獲されるから助けてほしいという依頼があつたら、先方の指名があつたのでシリユウに任せたはずだ。

「そちらは解決しました。なおその件で“黄昏”の旗を借りたいとのことでしたが」

「あとで現地に行つて交渉するか」

しかしなんでうちの旗を借りたいんだ？

南側で大きな問題でも起きたのだろうか？

「それがよろしいかと——ところでユーなんだその顔は」

「別に何でもありませんよ？」

「言っておくが今回同行が許された程度で調子に乗るなよ。直々に主の依頼で動いていた私の方が主に信頼されている」

「はんつ。同行を許された私の方が信頼されているに決まっているじゃありませんか」

この二人は顔を合わせるといつもこれだな。

ユーは奴隸的な主への忠誠心、シリユウは飼い主への忠誠。

この二つは似ているようで違うが、同族嫌悪的な感じで争いが起きる。

「暴れるなよ？」

「主に迷惑はかけません」

「гент様にも迷惑はかけませんわ」

「ならないけど」

そういつて二人はどこかへ去っていく。どうせ掃除対決とかそういう争いだろうから放っておく。

執務室へ向かうと代理でやってたらしいサイが顔をあげる。なんでこいつがやって

んだろ？

あ、近くにいたから押し付けたんだっけ。

「よう。元氣そうだな」

「おかえり。こっちは毎日働気づめや。これで休めるわ。あ、お客さんきとるよ？
客間に案内しといたわ」

客？

襲撃してくる敵じゃなくてか？

「そうかい。で？誰だ？」

「小さいガキが一人とジジイが一人ですわ」

それだけじゃ誰だかわからんな。

いつも通りに行き当たりばったりでいいか。

「わかった会ってくる」

「気をつけたほうがええで、ガキの方はどういうわけか心が読めなかったんで」

「俺にとつてはいつもの事だ」

サトリが心を読めないとなると高位の神霊か何かか？

まあ読めようが読めなろうが相手が生きてるならなんとかなるし。

「お待たせ。つててめえかよクソガキ」

「俺を待たせるとはいい度胸だな」

「勝手に来ておいて何様だ。それで何の用だ？ お前ら南側で暴れるとか言ってたよな？」

あ、旗の件はそういう事か。

南の階層支配者を討つたのか。それなら雑魚共は不安に思つてうちの旗を借りたいとか言うか。

「探し物を」アヴァロンが封印しているという話だったからな。素直に渡せば潰れることもなかっただろう」

「殿下に逆らおうなど」アヴァロンは愚かでしたな」

「アヴァロン」は「クイーン・ハロウィン」直系傘下の騎士団コミュニティで、4桁に本拠を置く階層支配者としてはかなりやりにくい相手のはずだがそれを討ちやがったか。

パワーバランスの崩れがどこまで影響を与えるのかは知らんが、しばらく南側は荒れそうだな。

「アヴァロン」にお前らが欲しがるようなもんはなかったと思うがなあ？ 階層支配者事態が邪魔だったとかか？ 北側の階層支配者の同時襲撃とかしてるし」

「……耳が早いな。サラマンドラ」と白夜叉を討つための計画の調整でそんな余裕は

ないと思っていたが」

「俺がやったのは準備だけでそれ以外はノータッチだよ。つか、相性はいいことは否定しないが若輩すぎて隙だらけだったぞあの斑ロリ。よくかきすぎて足元掬われて敗北とかアホらしい」

おかげでいらんフォローする破目になったし、ここで邪魔になりそうな白夜叉を脱落させられなかったのは痛い。あいつなんか知らんが俺の動向を監視しようとするんだよなあ。鬱陶しいし、目的の邪魔してくるからウザったいことこの上ない。

「無名だからこそあの戦術が通用したんだ。とはいえ白夜叉と相性のいい手駒はもういないしどうするべきか……」

「考えるのはいいけど何しに来たんだよ。つか、何でここは入れたんだよ。『黄昏』の印ねえと入れねえのに」

「ああ、あのゲームか？ リンが暇つぶしに解いてくれたぞ」
「暇つぶしっておい」

あれでも5桁相当の謎解きだったのだが、暇潰しで解くのかよ……。単純に特定の物持って入口でそれを奉げるだけだからなあ。

簡易化しすぎたか。

置いてけ堀のゲームとの連携で鉄壁に近いと思ってたんだが、新しい方式考えとかね

えとな面倒くさい。

「それよりも南側で面白いものが見つかった」

「面白いもの？」

「13番目の太陽だ」

「箱庭の騎士が持つ太陽の主権だ?!」アヴァロン〃が隠し持っていたのか!」

あれは過去の虐殺とともに失われたと聞いていたが、まさか〃アヴァロン〃が隠していたのか。通りで〃を突いても何にも出てこないわけだ。

「あの様子だと〃アヴァロン〃は13番目の太陽が封印されていたことは知らなかったらしい」

「どういう事だ?」

「純血の龍の魔王を封印していることになっていたらしい。まあ、間違っではないがな」

契約書類を渡されたのでゲーム内容を確認してみると

「うわっ、完全に復讐のための残虐ルールじゃねえか。これは封印されてもしかたがない」

「そこでお前に頼みがある」

「なんだよ? 太陽の主権はこれに組み込まれてるからクリアしないと取れねえぞ?」

ついでに言うのと完全クリアは俺には難しい。

このガキが手伝えれば別だが。

「そんな事は頼まん。南側の階層支配者にならないか？今後のコントロールが楽になるのだが……」

「興味ねえよ。だいたい俺は上に睨まれてるからそんなこととして認められたくはねえし、目的から外れる」

階層支配者フロアマスターになれば上のちよつかいもなくなくなるだろうが、俺には目的が必要だ。

平和を維持するなんて目的じゃ燃え尽きてしまうしな。

「だろうな。言ってみただけだ。本題はこっちだ」

そういつて取り出したのは……!?

「これはアジダカーハの!?!」

「最終段階には……な。そこでお前には白夜叉を足止めできる材料がないか聞きたい」

「……そういうことならいくつか教えてやるよ。本番前の肩慣らしで使うつもりだったんだからな？感謝しろよ？」

そういうながらいくつかの外門と詳細な場所を書き渡す。

「こいつら全部開放すれば今の白夜叉じゃどうにもできねえよ。……神格の返上でもない限りはな」

「ほう？今の白夜又じゃこれに勝てないのか？」

「勝てるぞ？ただ一匹倒すのに時間がかかり過ぎるだけで」

「なるほど。うってつけだな。同時に開放するように指示しよう」

俺たちの悪巧みは長時間に及び。

最悪へのシナリオはどんどん終結へ向かって走り続ける。

たとえそれが修羅神仏の思い通りだとしても止まることはない。そして修羅神仏の想像以上でも止めることはできない大きな流れとなる。

そのうねりは箱庭を終わらせるだろう。

上でふんぞり返ってる馬鹿どもには最悪の結末で終わらせてやるよ。

誰も望まないBAD ENDでな。

腐れ縁

side 久遠飛鳥

収穫祭への参加を賭けたゲームで勝利し、私と耀さん。それに苦勞詐欺（笑）と南側へ十六夜君とレティシアより先んじて向かい、そこで北側とは違う水と

自然の世界を楽しみながら、「ウィル・オ・ウィスプ」と合流した後に収穫祭を行う
コミュニティのリーダーへ挨拶へと向かうと

「まったく。久々に出会ったというのになぜ逃げようとする？」

「こうやって腕を極めるからだよ！つか、逃げねえからやめろ！」

「そう言つて逃げるだろ？」

「否定はしない」

「……」

「無言で締め上げんな!？」

サンドラの姉であるサラとサラに取り押さえられているгентトに出会った。

「ていうか何してるのかしらの二人は!？」

「サラ様!？」サラマンドラから出て行つたと聞いていましたが、南側にいたのですか

!?

黒ウサギ。それより先に変な悲鳴あげている兄を心配すべきじゃないかしら？

「ああ、黒ウサギか。今までの活躍は聞いている一先ず座るといい。お茶でも出そう」
「俺はコーヒード」

さつきまで悲鳴を上げていたのに余裕そうに応える。さつきまでの演技だったのかしら？

「お茶菓子ある？」

春日部さんさつきチーズを食べたばかりでしょう？

「ふむ。待ってろ」

ボキリといい音をさせてからあっさり「折りやがったこいつ!？」と騒ぐゲントを解放したと思つたらイスに座らせて、部屋の隅でお茶とコーヒートを淹れはじめ。

(ねえ黒ウサギ?)

「どうしたんですか飛鳥さん？」

(お兄さんがあんな目に遭っているのにどうしていつも通りなの?)

このブラコンウサギは兄があんな目に遭っていたら例え神であろうとも喧嘩を売するような性格だと思つていたけどなんでここまで落ち着いているのかしら？

ゲントの付き人の女性はキレてサラさんに不意打ちして返り討ちに遭っているとい

うのに。

「お兄様とサラ様はいつもあんな感じですよ？よく問題を起こして箱庭中でマークされていたお兄様を捕まえて説教をしました」

あなたのお兄さん子供のころから階層支配者フロアマスターですら手を焼くほど捕まることはなかったって言つてなかつたかしら？

箱庭すべてを敵に回して逃げ延びることが出来るって自慢してたのは耳にタコが出来てくるくらい聞いて覚えてるわ。

「懐かしい話だな。今は流石に立場もあつて追いかけてまわすような事は出来ないがな」

「……盗み聞きとは趣味が良くないわ」

「目の前で話していたから聞こえてしまつてね。すまなかつた」

茶目つ氣たつぷりにウインクをしてお茶を渡された。

一口呑んでみると香りと味が広がるようにイライラしていた精神を落ち着かせる。悔しいけどお茶の最大限を引き出しているわ。

……何かしらこの敗北感は。これが大人の女性の余裕というものかしら？

「このバカを相手しているうちにいろいろ上達してね。そのせいか次期階層支配者フロアマスターは確実と言われていたくらいだ」

そういえば“サラマンドラ”ではサンドラちゃんじゃなくて別の人がなるはずだつ

たと小耳にはさんだわ。それがサラさんというわけかしら？確かにгентを捕まえておけるなんてすごいわね。白夜叉は探し回っても逃げられたと言っていたし。もしかしたら白夜叉より有能なんじゃないかしら？

「誰がバカだ」

「妹のために一区画を焼き払ったのはお前くらいだ」

「あれはマイシスターを攫ったあいつらが悪い」

コーヒー片手に折られたはずの腕で黒ウサギを指差すгентは……ちよつと待って？さうつととんでもない事を言わなかったかしら？

「黒ウサギが攫われたってどういう事？」

「私も気になるわ。いくら黒ウサギがポンコツでも攫われる——わね。そういえば最近もサーカスに騙されて攫われてたし、意外でも何でもなかったわ」

「飛鳥さん!」

何でそこで不服な声が出せるのかしら？

反省してないのかしら？

「……お前らへの援護止めた瞬間にそれかよ。やっぱ」

員預かろうか？」

たぶん善意なのでしょうけど答えは決まっているわ。

“ を潰して俺の所で全

「お誘いはうれしいけどお断りするわ」

「そうだぞ（もつきゆもつきゆ）」

そう言つて同意する春日部さんは待つて。何食べているのあなた？

「春日部さんその羊羹どこからだしたの？」

「うちの手土産ですな」

「兄貴について行くのもアリだと思えますよ姐御」

「一瞬で懐柔されなないで。あと誰が姐御よ」

「お兄様は私のお兄様です！」

「ブラコンはちよつと黙つてなさい」

私はどちらかといえばポケ担当なのになんで突っ込みみたいなことしないといけな
いのよー！

そういうのは黒ウサギの担当でしょ！

「常識人ポジはマイシスターだと思つてたけどそうでもなかったか」

「お前の妹はお前関連だとポンコツ化するぞ」

「知ってる」

お兄さんが関わらなければ苦勞人ポジなのにね。

本当にいい迷惑だわ。

「ん」

「ほら」

「おう」

「コーヒーを飲み終えたら煙管を燻らせるお兄さんはいつも余裕そうね。ん？」

「煙草は辞めたらどうだ？臭うぞ」

「バカヤロウー。男は酒とヤニと女さえあれば生きていけんだよ」

「ふむ。お前に女がいるとは知らなかったな」

「それお前が言うの？」

何かしらね。この二人には妙な縁というか腐れ縁というだけじゃ説明できない何かがあるわね。

そう言えばあの煙管に刻まれているのは——火龍？

「え？」（とあることに気がつく女の勘）

「ふむ」（気がつかれた事に気がつく女の勘）

「なんか面倒くさい事になってるな」（勘とか関係なしに洞察力で察する男）

「もつきゆもつきゆ」（今日の晩御飯なんだろう？）

い、意外すぎるわ。

この二人まさかそういう関係だなんて！

黒ウサギは!?

「確かに私はブラコンですがそれは別に恥じることじゃ——」

「ホントにポンコツね」

「飛鳥さん!?なんで罵倒されたのですか!?!」

盲目的に信頼しているから逆に気がつかないのかしら?」

「いつそういう御関係に? (モキユモキユ)」

「ふむ。結構前だないろいろあつて激しく燃え上がつてな」

「物理的に燃やしに来たよな?燃える槍持参して」

「あれからちよくちよく関係を持つていてな」

「大体お前に襲われたけどな」

「結構強引だったぞ」

「寝てる時に頭を貫こうとされるとは思わねえよ」

「ちよつと待つてあなたたちどうという関係?」

どつちも真実と嘘を盛り込んでいる感じがするわね。

「そんな!?!ではサラ様の事をお姉さまと呼ぶべきですか!?!」

「ふむ。お姉さまはサンドラに呼ばれ慣れているからな。可愛らしくお姉ちゃんとかはどうだ?」

「お姉ちゃん……ですか？」

そこ乗るべき所じゃないわよ黒ウサギ。

というかいの？あなた兄との結婚相手は認めないとか言ってたでしょうに。

「うちの妹を變な道に引き込むの止めてくれませんか？」

「将来の義妹だろ？變ではない」

「それは未来永劫あり得んから安心しろ」

「そうかな？少なくともお前次第だと思うぞ？そつちから抜け出せばな」

苦虫を噛み潰したように顔を逸らすお兄さんは何を企んでいるのかしら？

思ってたより何かを隠しているようね。

「かつ。女つてのはどうしてどいつもこいつも鋭いんかねえ？」

「女だからだ」

「……」

「はひ？どうしたのですかお兄様？」

「なんでもない」

それは一緒にしちゃダメだと思わね。

天然で純粹という一番あてにならない類ですもの。

「それよりお前は階層フロア支配者マスター就任の要請を蹴ったそうだな」

「そんな面倒なものの受けるわけねえだろ」

「そうか？お前の活動はそれに近いと思うぞ？上からのお墨付きでやるかどうかの違いだろう」

「あいつの要請とか断る一択だろ。そうじゃなくても断ってたがな」

あいつ？誰かしら？

「どうやら本気で嫌っているようだけど飄々としたこの男が嫌っている存在なんているのかしら？」

いたとしても妹の敵といった所でしようけど。

「あいかわらずだな」

「変わらねえからこそその俺だ」

「いや結構変わったぞ？昔なら要請すらあり得なかっただろう」

「そんなもんかね？」

「自覚なしか。お前は少し丸くなったよ」

「そうかね？」

燻らせる煙は余りにも濃い。

ていうか部屋が紫煙で見えないわね。

「ま、お祭りを楽しみにしてるよ。昔馴染みが結局階層フロアマスター支配者になるとは思えなかった

がね」

「楽しみに見ている」

「そうするよ」

そういつて煙が晴れた頃にはいなくなっていた。

いつの間になくなったのかしら？ 全く分からなかったわ。

「相変わらずだなあいつは。さて、本題に入ろうか君たちを呼んだのは他でもない——」

仕事

君がお姫様？

誰だつて？

君の部下から依頼を受けた存在だよ。俺が押し売りしたともいうけどね。

へえ。子喰いつて後付け——呪いだっけ？は女しくない理由はそれか。

単為生殖つて子供なのかね？分裂——もう一人の自分じゃないのか？

呪いが発動している時点で子供認定かな。

何しに来たつて？簡単に言えば見るに堪えないんだとよ。

おいおい物騒だな。俺じゃお前に勝てるわけないだろ。こちとらただの人間だぜ？

じゃあ何かつて？こうするんだよ

おー、効いてる効いてる。

すげえ咆哮だ、伝説の化け物にされたのもわからなくはないな。

子を守ろうとする本能と呪いの衝動の闘ぎ合いか、これ厳しいかねえ？しかし恩売るチャンスでもあるしなあ。

お。成功したか。動けないとは想定内だ。失敗した時の想定の方が多いけど

何したかって？ 出産準備だ。

産んだ瞬間に攫って逃げる。シンプルだろ？

子育てはあんたの部下がするってよ。

え？ ちよつと待てなんで身体が大きく？

あ、これやばい。

side
gent

「まったく、こんな泥人形でワイがどうにかなると思つたか？」

俺のクビをへし折れない程度の圧力で踏まれている。

流石に七大魔王は伊達じゃないか。行けるかと思つたがなめすぎていたというか相

手が強すぎたというか俺が弱かつたというべきか。

「隙だらけだったから行けるかと思つたんだけどな」

窓の外を眺めながら話すこいつは気づいているようだ。

「まったくクソガキは何年たつても変わらん」

「そういうあんたは変わったな。前に会つた時より鈍になつたな」

「お前は喋るなや」

踏み潰されて碎けて潰れた。

「こんなので襲い掛かるってことは実力試しか？」

「いや普通に行けるかと思つての襲撃だけど？」

「そう言いながら窓から部屋の中に入る。」

「百十年ぶりだな蛟魔王。覇気がなさ過ぎて殺し時かと思つたぞ？」

「百六十年ぶり……な。ゲントも相変わらなかつたいな技使うな。なんやねんこれ？」

踏み潰した泥を見ながら蛟魔王は聞いてくる。

「見てわかるだろ」

「ゴーレムか？ それにしてはお前に似すぎてたし前に倒したドツペルの類か？」

「スワンプマンだよ」

ある男がハイキングに出かける。道中、この男は不運にも沼のそばで、突然 雷に打たれて死んでしまう。その時、もうひとつ別の雷が、すぐそばの沼へと落ちた。なんとこの偶然か、この落雷は沼の汚泥と化学反応を引き起こし、死んだ男と全く同一、同質形状の生成物を生み出してしまふ。

この落雷によって生まれた新しい存在のことを、スワンプマン（沼男）と言う。スワンプマンは原子レベルで、死ぬ直前の男と全く同一の構造を呈しており、見かけも全く同一である。もちろん脳の状態（落雷によって死んだ男の生前の脳の状態）も完全なる

コピーであることから、記憶も知識も全く同一であるように見える。沼を後にしたスワンプマンは、死ぬ直前の男の姿でスタスタと街に帰っていく。そして死んだ男がかつて住んでいた部屋のドアを開け、死んだ男の家族に電話をし、死んだ男が読んでいた本の続きを読みふけりながら、眠りにつく。そして翌朝、死んだ男が通っていた職場へと出勤していく。

「実際にはいくらかの裏技使ってるがな」

「自分と同じ人物を作ったところでгентト自身ならワイに挑むのはおかしくないか？」

「自分が何人もいるなら一人ぐらい死んでもいいだろ」

「ふーん。で、お前は巨人族を相手にしないのか？」

「生憎、差別はしないんで」

大騒ぎしている外の喧騒を一瞥して、適当に言いながら椅子があつたのでそこに座る。

「ところでよ。使わねえならその主権を俺にukれない？」

「何のことや？主権なんて持つてないで？」

「その義眼が月の主権だつてのはわかつてんだよアホ」

「それ言つたらお前の持つてるそれも主権やろ？」

「……ばれてんのかよ。誰にも知られてないはずなんだがな」

対クソ野郎用の秘密兵器だつていうのに何でばれているのだろうか？

どつちにしろ新しい戦略も考えとかなないといけないだろう。

「月の主権を持つてたら何んとなーくわかるからな」

「そうか？ 経験の差かねえ？」

言いながら勝手に茶を入れる。こつちの茶葉はそこそだが水がいいな。うまい。これはうまくやれば大儲けに繋がるな。ちようどバカ共が攻めてきてるし、いい口実になる。

「そーいや知ってるか？」

「なんや？」

「牛魔王を階層支配者フロアマスターにしようという動き」

「大兄を!?! いったいどこが!?!」

どうやら初耳だったらしい。

当事者としてはあり得ないと思うかもしれない。なんせ天部に喧嘩売つて魔王の烙印を受けたぐらいだ。だけど当事者以外が見ていると特におかしくもないと思うがね。

「白夜王とクソ野郎、ついでに齐天大聖が後押ししてるぞ」

「姉さんが!?!……いや、しかし!?!」

「そこだけ？ ま、伝えるだけ伝えし勝てそうにないし去らせて貰うわ。じゃあな『枯木

の流木』さんよ」

何か騒いでたがさつさと去る。

この後の行事に巻き込まれたくないし。やらないといけないこともあるしな。